博士論文　2022（令和 4）年度

英文ガイドブックの視点による国際観光黎明期の研究

－明治期における京都観光の文化史的考察－

同志社女子大学大学院文学研究科
日本語日本文化専攻
千代間　泉

A Study of the Cultural History of Tourism in Kyoto during the Meiji Era from the Perspective of English Guidebooks

Izumi CHIYOMA

2022

目次

序論 9
1. 本研究への経緯 9
2. 本研究の目的・研究方針 10
3. 本研究の調査対象 11
4. 明治期の英文京都案内研究の動向 13
5. 各章の構成 15
6. 凡例 16
第 1 章 ［資料翻訳］山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873) 17
解題 17
本書の特色 19
凡例 20
表紙 21
序文 （3 枚目） 21
目次（4 枚目） 22
（4 枚目裏） 22
京都市街の地図 23
京都の近郊地図 24
本文 24
1. 京都の街 24
2. 三条 【三条大橋】 24
3. 御所 【御所】 25
4. 祇園 【洛東八坂社】 25
5. 知恩院 【洛東智恩院】 26
6. 南禅寺 【洛東南禅寺】 26
7. 若王子 【洛北若王寺】 26
8. 黒谷 【洛北黒谷】 27
9. 永観堂 【洛北永観堂】 27

10. 真如堂　【洛北真如堂】 27
11. 吉田　【洛北吉田社】 27
12. 銀閣寺　【洛北銀閣寺】 27
13. 円山　【洛東丸山】 28
14. 東大谷　【洛東東大谷】 28
15. 八坂の塔　【洛東八坂塔】 28
16. 清水　【洛東清水寺】 29
17. 清水焼の陶器　【五條ノ陶器】 29
18. 西大谷　【洛東西大谷】 29
19. 大仏　【洛東大佛殿】 30
20. 耳塚　【大佛耳塚】 30
21. 蓮華王院（三十三間堂）【洛東三十三間堂】 30
22. 稲荷　【洛南稲荷社】 31
23. 泉涌寺　【洛東泉涌寺】 31
24. 東福寺　【洛東東福寺】 31
25. 宇治　【洛南宇治】 31
26. 黄檗　【洛南黄檗山】 32
27. 本願寺　【洛内本願寺】 32
28. 本圀寺　【洛内本圀寺】 32
29. 東寺　【洛内東寺】 32
30. 八幡の石清水【南城八幡社】 33
31. 長岡　【洛南長岡社】 33
32. 梅宮【洛西梅ノ宮】 33
33. 嵐山　【洛西嵐山】 34
34. 清凉寺【洛西清凉寺】 34
35. 仁和寺【洛西御室】 34
36. 大徳寺　【洛北大徳寺】 34
37. 金閣寺　【洛西金閣寺】 35
38. 北野　【洛北北野神社】 35
39. 西陣　【西陣織物】 35

40.　上賀茂　【洛北上加茂】 36
41.　下鴨　【下加茂】 36
42.　鴨川　【鴨川堤】 36
43.　大津、堅田、比良　【三井寺ヨリ唐崎堅田見ル】 36
44.　琵琶　【近江八景一覧ノ圖】 37
45.　唐崎【近江唐崎松】 37
46.　瀬田、粟津、石山【石山ヨリ勢田橋ヲ見ル】 37
47.　比叡山　【比叡山】 38
48. 38
第 2 章　日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改訂についての研究
—山本覚馬著、英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）を題材に— 39
2－1.　はじめに 39
2－2.　先行研究 40
2－3.　遷都による京都の危機的状況と京都博覧会 41
2－3－1.　遷都による危機的状況 41
2－3－2.　京都博覧会の開催 41
2－4.　『覚馬名所案内』改版の歴史と関わった人々 43
2－4－1.　成立時期と関わった人々 44
2－4－2.　『覚馬名所案内』改版の歴史 45
2－5.『覚馬名所案内』の特色 47
2－5－1.『覚馬名所案内』の特色 47
2－5－2.『宇治本』と『同志社本』の比較 49
2－6.　まとめ 53
第 3 章　出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)
の詳細な制作背景 55
3－1.　はじめに 55
3－2.　先行文献 56
3－3.　新出史料の個々の解析 57
3－3－1　「博覧会の沿革」丹羽圭介講演 57
3－3－2　「京都と博覧会　丹羽圭介氏談」 57

3－3－3　丸尾長顕著（1967）『イヴの喫煙室』「圭介翁聞き書」 59
3－4.　結果：丹羽の視点による「『覚馬名所案内』の制作背景」新情報 60
3－5.　制作にかかわった京都府の雇い外国人たち 61
3－5－1.　ルドルフ・レーマン 61
3－5－2.　レオン・ヂュリー 62
3－6.　丹羽圭介の幼少から『覚馬名所案内』を制作した頃まで 62
3－7.　まとめ 64
第 4 章　[資料翻訳] W. E. L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』(1880) の京都記述部分 67
解題 67
TG 序文　（以下翻訳） 68
京都［Kioto］ 69
1. 建仁寺 72
2. 大仏［The Daibutsu-(Great Buddha)］ 72
3. 八坂塔 73
4. 高台寺 73
5. 三十三間堂 73
6. 清水寺 74
7. 西大谷 74
8. 明暗寺 74
9. 耳塚（耳の墓） 75
10.　東本願寺 75
11. 西本願寺 75
12. 東寺 75
13. 神泉苑（聖なる泉の庭）‘SHINSENYEN-(Holy spring’s Garden) 76
14. 愛宕権現 76
15. 御室御所 76
16. 衣笠山（絹の帽子の山［Silk Hat Mountain]） 76
17. 金閣寺（金で覆われた寺［Gold-covered Temple]） 76
18. 西陣 77

19. 上賀茂 77
20. 修学院 77
21. 下鴨 77
22. 銀閣寺（銀で覆われた寺［Silver-covered Temple］） 77
23. 若王子 78
24. 知恩院 78
25. 円山 78
26. 御所 79
27. 宮城 - 実際の御所 79
28. 桂宮御殿 80
29. 勧業場の織工場 80
30. 急流下り［The Rapids］ 80
31. 東福寺 81
32. 泉涌寺 81
33. 宇治 82
34. 奈良 82
35. 琵琶湖 83
第 5 章　Keeling の *Tourists' Guide*（1880）についての研究 84
5－1.　はじめに 84
5－2.　先行研究 85
5－3.　TG 内の京都記述部分の比較調査 87
5－4.　考察 90
5－4－1.　A. 古い西洋人旅行記による影響 90
5－4－2.　B. 京都博覧会による影響 92
5－4－3.　C.文明開化の新産業 93
5－4－4.　D. 観光地の取捨選択 95
5－4－5.　E. 推薦、付加価値 96
5－5.　まとめ 100
第 6 章　*Stray Notes on Kioto and Its Environs*.（1874, 1876, 1878）についての研究. 103
6－1.　はじめに 103

6－2. 先行研究 103
6－3. 研究方法 105
6－4. SN について 105
6－4－1. 新出史料 SN を知り得た経緯と SN 初版の編集後記 106
6－4－2. SN の時代・制作背景：『神戸居留地』より 107
6－5. SN の京都記述部分 108
6－5－1. 『覚馬名所案内』から始まる名所 108
6－5－2. SN から始まる名所 112
6－5－3. 明治初期の入京交通アクセスと「伏見稲荷」 113
6－5－4. 古い西洋人旅行記の影響 115
6－5－5. 京都の祭 116
6－5－6. 西洋人初の「保津川下り」 116
6－6. まとめ 117
第 7 章 英国皇孫京都観光（1881）に関する研究 119
7－1. はじめに 119
7－2. 参考文献 120
7－3. 研究方法 122
7－4. 結果と考察 122
7－4－1. 皇孫の京都旅行とサトウの随行 122
7－4－2. 皇孫たちの「川下り」 129
7－4－3. 『西京新聞』の報道と日本側・京都府側の準備 130
7－4－4. サトウの名所選択 131
7－5. まとめ 132
第 8 章 「保津川下り」国際観光の始まりと発展 133
8－1. はじめに 133
8－2. 先行研究 134
8－3. 研究方法 136
8－4. 結果と考察 136
8－4－1. SN 改訂第 2 版（1878） 136
8－4－2. TG (1880) 140

8－4－3.　HT 初版（1881）..... 141
8－4－4.　HT 第 2 版（1884）..... 141
8－4－5.　HT 第 3 版（1891）..... 142
8－4－6.　HT 第 9 版（1913）..... 143
8－5.　まとめ..... 143
第 9 章　「伏見稲荷大社」西洋人観光の始まりと発展..... 147
9－1.　はじめに..... 147
9－2.　SN 第 2 版・SN 改訂第 2 版..... 149
9－3.　*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*（1881）、（1884）
..... 150
9－4.　KG（1890）..... 156
9－5.　*A Handbook for Travellers in Japan (including Formosa)*（1913）..... 156
9－6.　HT 第 2 版と HT 第 9 版から見る、西洋人「稲荷」観光の始まりと進展..... 160
9－7.　まとめ..... 162
終論..... 164
1.　本研究の要約..... 164
2.　考察..... 167
主な参考文献..... 170
辞書..... 177
インターネットホームページ..... 177

序論

1. 本研究への経緯

京都は、17 ヶ所もの世界文化遺産[1]を持つ、日本有数の国際観光都市である（2022 年現在）。文化遺産の多くが保存状態も良く、内外の人びとに昔から門戸を開いている。このような国際観光都市京都の現在の状況は、今の努力だけではなく、歴史的に京都を観光で盛り上げようとする動きがあったはずである。京都における西洋人の国際観光はいつ始まり、京都の観光は西洋人旅行者の眼差しにどのように映し出されて進展したのだろうか。それには近代における京都国際観光の黎明に焦点を当てることが必要だと考える。

明治初期に始まる英文京都ガイドブックには、明治期の西洋人観光の様子が、初期の段階からその時々に対応し進展してきた。英文京都ガイドブックは京都に特化し、英語話者の観光の歴史をたどるには最適ではないかと思い、本研究の題材とすることにした。

現在までの研究において、日本初の英文京都観光案内と言われるガイドブックは、山本覚馬（1828－1892）著、丹羽圭介（1856－1941）出版の *Celebrated Places in Kiyoto and the Surroundings…*（1873）（以下『覚馬名所案内』）である。2023 年に出版 150 年となり、『覚馬名所案内』に掲載された名所は今も有名な観光地である。

『覚馬名所案内』は国際観光の先駆けとして、自ら京都観光名所を提示し、国際観光を推進しようとした。迎え入れ側である京都の人々の特別な思いと意気込みを感じる。しかし、未だその制作背景・制作過程において研究は十分であるとは言えない。

さて、その後の英語話者刊行のガイドブックからは、西洋人たちがガイドブックの嗜好に基づいて推薦された名所を巡る様子が鮮明に映し出される。

これについてジョン・アーリ／ヨーナス・ラースンの『観光のまなざし[2]［増補改訂版］』（2014）の論を以下に引用する。

> 1600 年から 1800 年にかけて、旅行を論ずるといえば、遊学中に話の種にしようと

---

[1] 京都府（n. d.）「世界文化遺産古都京都の文化財一覧」によると、賀茂別雷神社（上賀茂神社）、賀茂御祖神社（下鴨神社）、教王護国寺（東寺）、清水寺、延暦寺、醍醐寺、仁和寺、平等院、宇治上神社、高山寺、西芳寺、天龍寺、鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、龍安寺、本願寺（西本願寺）、二条城である。https://www.pref.kyoto.jp/isan/　最終閲覧 2022 年 2 月 14 日。

[2] 神田孝治（2012）によると、「*The Tourist Gaze* は、邦訳書のタイトルに従い『観光のまなざし』とやくされることが多い。しかしながら、『観光客のまなざし』と訳した方が、まなざす主体が観光客であることが明示されるので誤解がないであろう（60）」である。

して得た学術的な知見が中心だった。これが百聞は一見にしかず式の旅にシフトしていった。旅行体験の視覚化ということが生じたのだ。「まなざし」の発展ともいうべきで、これを助長し支えたのがガイドブックの発達であった。ガイドブックは新しい見方を育成していくのである（第 1 章「観光理論」、10）。

ガイドブックの発達が近代の観光に大きく関与したというアーリらの論から、日本人の視点において制作された『覚馬名所案内』の後に刊行された、英語話者の制作した英文ガイドブックは、西洋人の視点において、取捨選択・新情報の追加を行い、京都の観光文化を進展させたと思われる。また日本人が「観光」とは気づかなかった分野においても、英文ガイドブックは自らの眼差しに基づき、新「観光」を見出して発展させたと考える。

明治初期の近代における国際観光の黎明期において、突然外国人に開かれた京都を「観る」ことは、英語話者の観光者の感覚と嗜好を刺激し、多様な観光行動に繋がっていたはずである。本研究では、英文ガイドブックはそれらの観光文化を促進しその歴史を伝えるツールであるという視点から、明治期の京都国際観光の黎明期について調査する。

2. 本研究の目的・研究方針

山口誠（2012）は、「ガイドブックその変遷と可能性」において、「近代ガイドブックの特徴は、改訂とシリーズ化を繰り返すことにある。（中略）例えば数年ごとに不定期で改訂されたマレーの日本編を通時分析すると、外国人旅行者が見ようとした『日本』の変遷を垣間見ることができる。良質なガイドブックは貴重な歴史資料になる（中略）つまり改訂されるガイドブックには、『旅先の社会の現在形』とともに、それを編集して出版する『制作者の意図』のふたつの情報が映し出されている（145）」と述べた。

山口の論に賛同し、本調査に当てはめると 3 つの特徴がある。第 1 に、後続のガイドブックは、それ以前に刊行されたガイドブックを参考とし、そこから必要な内容を切り取り、新情報を追加する。第 2 に、シリーズ化されたガイドブックは、当時の英語話者の旅行客が見た日本社会が書かれた貴重な歴史史料である。第 3 に、ガイドブックには当時の京都と観光の様子に加え、制作者自らの嗜好が反映される。これらのことから、『覚馬名所案内』は日本初の英文京都ガイドブックとして、その後に続く西洋人刊行のガイドブックに何らかの影響を与えた可能性がある。また、『覚馬名所案内』をはじめとして、時系列にガイドブックの内容を追うことにより、当時の京都国際観光の様子が正確にわかるものと考える。

そして各々のガイドブックを比較考察すると、それぞれの制作者たちの個性と嗜好が現れ、「観るべき」価値のある観光文化の発生と進展を把握できると考える。

したがって本研究の目的は、近代京都国際観光の始まりを英文ガイドブックの視点から探ることで、英文ガイドブックが観光文化の歴史をどのように表象したのかを、可能な限り明らかにすることである。具体的には 3 つの調査を行う。第 1 に、京都国際観光の始点である『覚馬名所案内』の内容と制作背景の詳細な調査、第 2 に、日本人の視点で制作された『覚馬名所案内』がその後西洋人による英文ガイドブックに与えた影響、及び西洋人刊行による英文ガイドブックの記述内容をそれぞれ比較調査、第 3 に、特に西洋人により開拓された新京都観光名所の始まりと発展についての調査、である。

本研究により、京都国際観光の黎明であった『覚馬名所案内』が、京都国際観光のルーツにあたる存在であったかを明らかにするとともに、後続の英語話者によるガイドブックが記した国際観光の始まりから 20 年間にわたる観光の様子と発展を知ること、そして西洋人たちの嗜好により観光の舞台に立った新観光名所の詳細を明らかにする。

3. 本研究の調査対象

主な調査対象は、現在までに筆者が把握した図版 1.「英文京都・日本ガイドブック（1873 年～1891 年までの刊行）一覧)」にある、①～⑦の京都観光名所ガイドブックである。⑥⑦については、すでに多くの先行研究により調査は進んでいるため、本稿においては主に明治期における新しい観光に関する章の中で調査に用いる。⑧～⑩については、①～⑦に関係する部分において調査した。

図版 1.　英文京都・日本ガイドブック（1870 年代か～1891 年までの刊行）一覧

	年	タイトル	著者名	印刷・発行など
①	1873	*Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Countries for the Foreign Visitors.* (山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』、以下『覚馬名所案内』)	K. Yamamoto	Published by Niwa

②	1874	*Stray Notes on Kioto and Its Environs.* （以下 SN）	Unknown	Hiogo: Printed at the “Hiogo News” office.
③	1876	*Stray Notes on Kioto and Its Environs. Second Ed.* （以下 SN 第 2 版）	Unknown	Yokohama: Published by F. R. Wetmore & Co.
④	1878	*Stray Notes on Kioto and Its Environs. Second Ed. Revised.* （以下 SN 改訂第 2 版）	Unknown	Hiogo: Printed at the “Hiogo News” office.
⑤	1880	*Tourists’Guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc.* （W. E. L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』、以下 TG）	(Compiled by) Keeling, W. E. L. (Tokio)	Yokohama: Sargent, Farsari & Co.
⑥	1881	*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan.* （以下 HT 初版）	Satow, E. M. and Hawes, A. G. S.	Yokohama, Kelly & Co. Kelly & Walsh.
⑦	1884	*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan. Second Edition.* （以下 HT 第 2 版）	Satow, E. M. and Hawes, A. G. S.	John Murray. Yokohama, Kelly & Walsh.
⑧	1889	*Kyoto and Its Surroundings. with Brief Sketches of Osaka, Arima, and Yu-shima. New Edition, Revised and Enlarged.*（以下 KS[3]）	Unknown	“Hyogo News” Co., Printers & Publishers.

[3] 内容からも②～④の SN シリーズを発展させた都市案内で、神戸から日帰りもしくは 2、3 泊で戻れる温泉地や保養地の紹介がある。そのため、特に神戸外国人居留民が重宝したと考える。名所案内と名所に関連する物語や逸話が散りばめられている。

⑨	1890	*Keeling's Guide to Japan, Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, Kobe &c., &c., Together with Useful Hints, History, Customs, Festivals Roads &c., &c., with Ten Maps, Fourth Edition, [Second Issue]*（以下 KG[4]）	Keeling, W. E. L. (Revised and Enlarged by A. Farsari)	Yokohama: Printed at A. Farsari.
⑩	1891	*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan. Third Edition.*（以下 HT 第 3 版）	Chamberlain, B. H. and Mason, W. B.	John Murray. Kelly & Walsh, Limited.

出所：各々のガイドブックのタイトルページをもとに筆者作成。

4. 明治期の英文京都案内研究の動向

まず、『覚馬名所案内』について、小嶋正亮（2019）「英文京都案内『CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS』について」の調査がある。小嶋は版の多数異なる『覚馬名所案内』について、最も初期刊行と思われる宇治市歴史資料館所蔵本を用いて詳細に調査した。小嶋の研究により、大きく 2 つの版（英文タイトル・銅版画イラストの変更と鉄道追補のある地図の差し替え有）があることが明らかになり、『覚馬名所案内』研究を大きく前進させた。

工藤泰子の論「明治初期京都の博覧会と観光」（2008）では、最も初期の京都博覧会について、1871 年の京都博覧会の主体であった地元の有力者たちの詳細と、翌年から京都府が加わった初期の京都博覧会の観光事業、『覚馬名所案内』を含む外国人に対する入京サポートについて、詳しく調査した。

全体的な明治初期のガイドブック研究について、荒山正彦は「明治期における英文日本旅行案内書の刊行―明治初期地理学史の一側面―」（1991）において、明治期における英文日本旅行案内書の刊行について考察した。その中でもシリーズ化され充実した内容のマレ

[4] ⑨の KG は⑤TG の第 4 版 2 刷である。KG のタイトルには、初版の編纂者、キーリングの名が冠としてあるが、実際は A. ファーサリが改版増補を行い、キーリングが関与したかは不明である。

ー社刊行のガイドブック（本稿における HT）について詳しい。

田中まりは「19 世紀末西欧における日本観光と日本イメージの形成―マレー社の『日本旅行案内』に紹介された京都―」（2004）の論において、マレー社の『日本旅行案内』（本稿における HT）に紹介された京都について考察した。

野口祐子は「明治時代の英語ガイドブックにおける京都へのまなざしー「文化財」という観点」（2014）の論において、HT 第 2 版までと第 3 版以降において、前者は主観性を抑え、後者は主観的なコメントが度々現れることを指摘した。そして HT の視点が、欧米人旅行者の旅行記に影響を与えたことについて二条城・平等院等をあげて考察した。長谷川雅世は「明治時代の京都でのイギリス人旅行者の神社仏閣めぐり―イギリス人の旅行記に描かれた京都の特別な寺々―」（2015）の論において、明治時代のイギリス人旅行者たちには、京都は日本の宗教の中心地であるという認識があり、彼らの代表的な寺社仏閣巡りの場であった方広寺・三十三間堂・清水寺・知恩院・西本願寺・東本願寺について、それらの旅行記への描かれ方について論じた。長坂（2014）は、「観光をめぐる近代日本の表象に関する歴史社会学的研究―探検紀行から旅行ガイドブックへ―」の 1 部において、「HTJ」（本稿における HT である）についての詳細な研究を行った。このように京都観光名所についての研究は、マレー社刊行の *A Handbook for Travellers* シリーズを中心として進んでいる。

明治初期のガイドブックの変遷については以下のような研究がある。長坂契那（2010）は、「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」において、キーリングの TG が先行文献としたのは『覚馬名所案内』である可能性を示唆した。明治時代の旅行記・ガイドブックに詳しい伊藤久子（2009）は、「研究余話 : 旅行ガイドブックの著者キーリング」において、キーリングの TG がマレー社刊行の HT シリーズと比較して軽視されていることに触れ、TG が HT より 1 年早く刊行され、日本ガイドブックの嚆矢として独自性があったこと、HT の改訂が無かった間に、情報を提供しつづけた重要な役割があったと指摘した。

川内有子（2020）は、「初の英文京都ガイドブックと京都の国際観光地化における耳塚」において、都市案内である SN について触れた。川内の別論（2020）「1860 年代における西洋人の「忠臣蔵」へのまなざし : 開国以前の日本人表象とフォークロア研究の興隆」においては、古い西洋人旅行記が明治初期の日本に興味を持つ西洋人に影響を与えたことを指摘した。

以上のように、明治期の京都国際観光については HT を中心としたさまざまな研究が進んでいるが、『覚馬名所案内』・TG の内容については、部分的に取り上げられる程度であり、

SN については、あまり知られていない。京都国際観光の始まりと進展を、英文ガイドブックを用いた観光文化史の視点からアプローチした研究には、まだ大きな余地がある。本研究にて十分に調査を行い、近代における京都国際観光の黎明と進展を明らかにすることは学術的な価値があると考える。

5. 各章の構成

序論の後、第 1 章においては、『覚馬名所案内』の資料翻訳を行った。『覚馬名所案内』は、英文の不確かさ、情報の少なさもあり、一部を取り上げ論じた研究はあるものの、全文を翻訳したものは確認できず、詳細についてははっきりとしなかった。『覚馬名所案内』の内容を精査し、内容についての理解を深めるために資料翻訳は不可欠である。

第 2 章は、「日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改定について」と題し、第 1 章の資料翻訳を踏まえ、『覚馬名所案内』の歴史的・人的な制作背景と、複数回改訂された『覚馬名所案内』のそれぞれの特徴について考察した。

第 3 章では、「『覚馬名所案内』改版の歴史と関わった人々」と題し、『覚馬名所案内』の制作者丹羽圭介の視点からみた制作背景について、未見の史料であった丹羽自身の講演録、また丹羽圭介の親族からの史料のご提供、家族に伝わるお話しをまとめ、より詳細な『覚馬名所案内』の制作背景をまとめた。加えてチーフとして制作に尽力した丹羽圭介の若き日々を調査・考察した。

第 4 章からは、西洋人制作の英文ガイドブックに取りかかった。日本ガイドブックの嚆矢、TG の京都記述部分の研究を行うために、まずは資料翻訳を行った。

第 5 章は、「Keeling の *Tourists' Guide* (1880) についての研究」と題し、TG における『覚馬名所案内』、京都博覧会、古い西洋人旅行記の影響の有無、TG の記述の特徴について考察した。

第 6 章は、「*Stray Notes on Kioto and Its Environs.* (1874, 1876, 1878) についての研究」と題し、未見の史料であった、SN の初版・第 2 版・改訂第 2 版を『覚馬名所案内』、TG という前後のガイドブックと比較考察した。

第 7 章は、「英国皇孫京都観光（1881）に関する研究」と題し、軍艦‘Bacchante’に乗って世界旅行中の英国ヴィクトリア女王の皇孫たちの京都観光旅行の詳細を、皇孫たちの公式世界旅行記『バッカンテ号の巡航』と、随行した英国領事館員アーネスト・メイソン・サトウ（Ernest Mason Satow, 1843－1929）の『サトウの日記』から実際の行程と皇孫たちの

行動を追った。

第 8 章と第 9 章は、明治以後から有名になった観光名所をとりあげた。

第 8 章は「『保津川下り』国際観光の始まりと発展」と題し、SN 改訂第 2 版の記述から、最初の西洋人による「保津川下り」が 1876 年と判明した。その最も初期からそれ以降の発展を SN、HT シリーズから、重要な部分を抜き出し考察した。

第 9 章は、「『伏見稲荷大社』国際観光の始まりと発展」と題し、もう 1 つの明治期以降の新国際観光名所であった「伏見稲荷大社」について、その始まりと発展を『覚馬名所案内』、SN、HT シリーズから考察した。

終論には本論の要約及び結語を述べた。

6. 凡例

1. 本研究は、英文ガイドブックの「京都」についての記述に焦点をおいて調査を行った。
2. 調査対象のガイドブックの略称について、山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』については『覚馬名所案内』とし、英語の略称である TG、SN などには、『』は用いない。
3. 外国人名は、始めに名字をカタカナ表記し、その後に（　）内に原語表記を行った。以降はカタカナ表記とした。数字はローマ数字とした。
4. 旧字体はそのままの方が良いものを除いて、新字体に改めた。
5. 人物で名前を補足した方が良い時は（　）内に加えた。
6. 年号は西暦で表記し、必要のある時には西暦（和暦）年とした。
7. 筆者の英語から日本語への翻訳については、英語原文を示した方が良い場合は［　］に原文を示した。原文で書かれた固有名詞が日本語では不明なものは、英語のまま本文に示した。
8. 説明が必要な箇所については、注に示した。
9. 資料翻訳における個々の京都名所の前の数字は、便宜上登場順につけた。
10. 原文中に内容に関する間違い、不適切な人道上の表現がある場合においてもそのまま訳した。
11. 江戸時代における日本の長さ、面積の単位は、日本で現在採用されている単位に換算して（　）内に示した。1 町（丁）は約 109.09 m、1 里は 3.93 km、1 エーカーは 4046.856 ㎡、1 フィートは 30.48cm、1 インチは 2.54cm として計算し、（　）内に追記した。

第１章　［資料翻訳］山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)

解題

本解題では、『覚馬名所案内』が制作された目的、成立時期、制作に携わった人々、本書の歴史的な位置づけについて確認する。

本書は 1873（明治 6）年 3 月 13 日～6 月 10 日までの 90 日の間、京都御所、仙洞旧院で開催された第 2 回京都博覧会に入場した外国人訪問客の為に作られたものである。本会場入場者は 706,057 名、外国人は 634 名の入場が記録されている[1]。

その前年に開催された第 1 回京都博覧会は、1872（明治 5）年 3 月 10 日～5 月末日までの 80 日間であった。会場は西本願寺対面所・白書院・黒書院、建仁寺方丈、知恩院の大方丈・小方丈の 6 ヶ所で行われ、「入場者は日本人 31,103 人、外人は 770 人（京都市、1975：128－129）」であった。京都のみならず比叡山、琵琶湖遊覧を含めて、来遊する外国人への「おもてなし」並びに実用的な便宜を図る京都観光案内の必要性を求められ、『覚馬名所案内』は制作された。

『京都府教育史』には、以下のように第 2 回京都博覧会の様子が描かれている。

> 尚外人の遊覧客招致のため、外務省に依頼して外人筋に広告した事は効果があって、上海、香港等からさへ来る者があった。それには山本覚馬が門弟の丹羽圭介と書いた英文の案内記を、丹羽氏等自らの手で印刷して賣つたのが非常に好評を博した。此書は四十八頁の小冊子ではあるが、色々な意味で記憶すべき珍書である（1940、390）。

『覚馬名所案内』の販売価格については、全く情報はなく調査中であるものの、外国人の対応に関連して大変興味深い記述があった。それは京都府が「旅館の設備には府で心を砕き、通弁、接待、警備等には、欧学舎や舎密局の生徒も手伝をした（同、388）」の部分である。

『覚馬名所案内』の成立時期について、出版者の丹羽圭介は「山本覚馬氏の指導により私が主となって拵えたものであるが、もちろん京都最初の欧文活版印刷であった。以上はすべて明治六年のことで、御所を拝借した当時の博覧会は、実に京都の産業文化に一新紀元を劃した年である（大槻喬、1937：348）」と述べている。同書 40 ページには「明治五年には未だ英文活字はなく、同年設定の“外国人入京規則”は英文木版を以て印刻」されたと書

[1] 京都博覧協会（1903）「京都博覧会諸統計一覧表」『京都博覧会沿革誌』より抜粋。

かれている。本書は英文活字で印刷されているので、これらの文献から本書の初版が出版されたのは明治 6 年である事は確かであろう。

第 2 に、本書の制作に携わった人達について『改訂増補山本覚馬伝』（以下『覚馬伝』）には以下の情報がある。ただし同書には先行文献が書かれていないため、内容の信用性は高いとは言えないが、その内容を以下にまとめる。

なお、より詳細な制作背景については、本稿第 2 章・第 3 章にて述べる。

1. 明治 4 年、ドイツ語教師ルドルフ・レーマンの兄弟であるハルトマン[2]、レーマンの手を経て印刷輪転機を独逸から輸入。集書院に保管後、明治 5 年山本の求めで丹羽が組み立てを試みたが出来ず、完成写真を参考にしてルドルフ・レーマンが機械を組み立てた。
2. 英文の案内記の原稿は山本家の婿養子にする予定で住み込んでいた喜三郎と、丹羽が美濃紙に筆で書いた。
3. 活字拾いは山本の妹、八重子（後の新島襄夫人）が行った。解版についても、八重子と丹羽氏の妹とが行った。
4. 印刷された案内記は 48 ページの、洛中洛外の絵入りである。
5. 文部省の認可を経て発行したので、著者は山本覚馬、出版者は丹羽圭介である(1976、99)。

4.については同書に「銅版で地図付の簡単な案内記を作った（同書、117 頁）」とあるように、銅版画に各々の名所が詳細に描かれ、一見するだけでも名所の様子や魅力がわかるようになっている。銅版画の作者については、「銅版京都名所」の銅版画が使われ「石田雨麦亭（石田有年）（宇治市歴史資料館、2018：45）」が作者と記されているため、地図は石田旭山（才次郎）[3]、銅版画は石田有年が担当したようである。

第 3 に、『覚馬名所案内』のガイドブックとしての歴史的な位置づけについてである。長坂契那（2010）は「1881 年以前に出版されていた『旅行』もしくは『案内』という単語が

---

[2] 『覚馬伝』のレーマン兄弟についての記述には、齟齬がある。本稿第 3 章（3－5－1）を参照されたい。

[3] 地図には、片面（Map of Kiyoto）にのみ‘GRAVER KIYOKUZAN. I. KIYOTO. JAPAN.’が印字されているが、大日本スクリーン製造株式会社による複製本には両面の下方に印字がある。

表題に掲載されていたもの（106)」を出版年の古い順に挙げ、2 番目に『覚馬名所案内』を挙げている。そして長坂は日本最古の旅行ガイドブックについて、以下のように述べている。

> 外国語による日本最古の旅行ガイドブックは、資料①のデニスによる 1867（慶應 3）年『中国・日本開港地案内』であった。（中略）全体の三分の二である 22 都市が中国の都市を書いており、日本に関しては開港した長崎、横浜、箱館（函館)、兵庫、そして当時の政府に当たる幕府があった江戸の 5 都市に限られていた。そして日本編の記述は伝聞によるために情報の出所が曖昧で概要しか書かれていないので、編集したデニスは日本に滞在したことがないと判断できる（同書、107)。

この研究から、外国語による日本最古の旅行ガイドブックはデニスによる『中国・日本開港地案内』と思われる。しかし、デニスのガイドブックの内容には、京都観光名所についての記述はないことから、外国語による日本最古の「京都」観光ガイドブックは『覚馬名所案内』である可能性が高い。さらに『覚馬名所案内』は日本人によって英語で書かれた日本初の英文ガイドブックである可能性が高い。

名所を特定して翻訳し、その内容を論ずる『覚馬名所案内』の研究はあるが、全文を日本語に訳した文献は見受けられない。そこで全文を翻訳することにより、この貴重なガイドブックの内容を明確にし、明治初期における外国人を対象とした京都の名所並びに各々の見どころを明らかにする。『覚馬名所案内』に込められた意図、その後国内外で発行されたガイドブックに参考にされ、影響を与えた可能性を示し、今後の研究に生かすためにも、全体を翻訳する意義は大きいと思われる。

本書の特色

本書の内容の特色を箇条書きにする。

1. 京都博覧会用に作成されたため、第 2 回会場であった御所、第 1 回会場であった知恩院並びに本願寺、宿舎であった円山、神戸から京都への交通について稲荷、八幡の石清水等にそれぞれの関連が記されている。「遊覧区域は琵琶湖まで延長させ（住谷悦治校閲、1976：117)」たので、琵琶湖周辺の名所の紹介、並びに京都の名産品の紹介、販売促進として清水焼、宇治茶、西陣織がある。
2. 一見安易な英文に見えるが、文法通りではない箇所が多く見受けられる。

3. 現在の読み方、書き方にはない綴り、並びに誤植と思われる単語が多数ある(例：‘Kiyoto’)。
4. 原文には‘splendid’（splendor を含む、25 回）, ‘magnificent’（10 回）など名所を讃える単語が頻出する。
5. 固有名詞では、そのままの読みを英語で書いているものが多い。例えば、「御所」は‘Gosho’である。「天皇」という単語は 18 回使われるが、そのほとんどが‘Tenno’（11 回）、‘Mikado’（3 回）、現在一般的に天皇を表す‘Emperor’は 4 回であった。「将軍」については‘Shogun’のまま 5 回使われている。
6. 地図には当時日本でも最先端であった小学校、外国語学校、電報局、郵便局、鉄道等の記載がある。
7. 地図は、薄い和紙の両面を使い鮮明に印刷されてある。

凡例

1. 本翻訳には、同志社大学図書館蔵の『The Guide TO THE CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING PLACES BY K. YAMAMOTO. KIYOTO. PUBLISHED BY NIWA. THE SIXTH YEAR OF MEIJI. 1873.』を使用した（請求番号、291.62 ||Y）。総頁数は 48 で、寸法は縦約 18.0×横約 16.7cm、厚さ約 0.6cm、折り込み地図は 1 枚の表裏に印刷されており、縦 32.0×横 40.0cm である（筆者調べ）。

   現在、最も図書館などで所蔵書が多いと思われる墨流し模様の表紙であり、糸とじ、銅版挿絵がのり付けされている。
2. 地図に書かれた英文の翻訳は、地図に記載された名所は除外し、名所以外の英文、英語の翻訳に留めた。
3. 現在、日本の寺社仏閣を英語で説明する際に、慣例的に「神社」‘Shinto shrine’、「仏教寺院」‘Buddhist temple’と使い分けられる事が多い。本書では寺社について、原文は全て‘temple’である。神道、仏教の明記の無い文章については‘temple’を「寺社」と訳した。‘Buddhism’と明記がある場合には「寺」、‘Shinto’と明記がある場合には「神社」と訳した。本書には「若王子」のように、現在の宗教と違う寺社も見受けられた。
4. 本書における名所の紹介ページの上部には、銅版画が貼られている。本書には銅版画

のみと本文があるが、国立国会図書館所蔵本[4]には銅版画の上辺に漢字でタイトルが記されている。本翻訳では、個々の頁、タイトル、その横の【　】内に銅版画上の日本語タイトルを記した。

表紙

京都とその郊外の名所案内

著者　山本覚馬

京都

出版者　丹羽圭介

明治 6 年

1873

[中表紙（2 枚目）]

外国人訪問客の為の京都とその郊外の名所案内

著者　山本覚馬

京都

出版者　丹羽圭介

明治 6 年

1873

序文　（3 枚目）

この小さな本は、京都博覧会に来場した外国人訪問客の便宜を図るため書かれました。

外国人訪問客は入京の際、多分自分達の国々に土産話 [the seeds of story] を持って帰るために有名で素晴らしい場所を色々訪問したいと熱望するでしょう。しかし名所を全ては見つけ出せないかも知れません。そんなときこのガイドブックがあれば、多分この本の便利さが証明されるでしょう。

[4] 国立国会図書館デジタルコレクションにて公開されている。
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1900016/1　最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。

目次（4 枚目）

京都の街　1

三条大橋　2

御所　3

祇園　4

智恩院　5

南禅寺　6

若王寺　7

黒谷　8

永観堂　9

真如堂　10

吉田　11

銀閣寺　12

丸山　13

東大谷　14

八坂　15

清水　16

清水の陶器　17

西大谷　18

大仏　19

耳塚　20

蓮華王院（三十三間堂）　21

稲荷　22

泉涌寺　23

東福寺　24

宇治　25

（４枚目裏）

黄檗　26

西本願寺　27

本圀寺　28

東寺　29

石清水（八幡）30

長岡　31

梅宮[5]　32

嵐山　33

清凉寺　34

仁和寺（御室）　35

大徳寺　36

金閣寺　37

北野　38

西陣　39

上賀茂　40

下鴨　41

鴨川　42

大津　堅田　比良　43

琵琶湖　44

唐崎　45

瀬田　粟津　石山　46

比叡山　47

京都市街の地図

（地図左上）

1873 年　京都　丹羽制作

（地図中央下）

日本　京都　石田旭山　銅版彫刻者[GRAVER KIOKUZAN. I]

（地図右下）

---

[5]原文では ‘MUMENOMIYA’ である。JapanKnowledge 所収の『日本国語大辞典』の「うめ」の項目によると、「平安以後「むめ」と表記された例がかなり多い」とある。 ‘M’ から始まる読み方は『覚馬名所案内』の特色であったと考えられる。本稿第 2 章（2－5－1）、本稿第 6 章（6－5－1）で述べる。

欧学舎の印として　E. S.

小学校[A SMALL JAPANESE SCHOOL]の印として　■

寺社の印として　●

神道という宗教の印として　⛩

逓信局の印として　T. S.

郵便局の印として　P. O.

図書館の印として　L.

劇場の印として　▲

鉄道の印として　#######

京都の近郊地図 [6]

本文

1.　京都の街

京都の街は平安という名の日本の首都として、約 1030 年前にこの国を統治した桓武天皇によって創始されました。その時から京都は特に変わりなくありましたが、内戦が勃発すると戦いの火ぶたはいつもここで始まりました。なぜなら日本の天皇は皆、ここに住んでいたからです。京都は偉大で多くの有名で素晴らしい天皇の宮殿、寺社がある最も有名な都市です。そして絹のドレスや陶器等の、人間にとって必要な製造品においても最も有名です。

この心地よい場所はそれぞれ、東山と西山という 2 つの地区に分けられます。東山は西山から鴨川を境に区別され、京都の東側を含みます。西山は仁和寺、金閣寺などの西側部分を含みます。

最初のページに京都の市街地図、次のページに京都近郊の色々な場所が見られるでしょう。[7]

2.　三条　【三条大橋】

鴨川にかかる 3 番目の橋である三条は、全ての方向において距離を測り、定めるために最も便利な起点です。それは京都から大津や伏見等に行くのは何町 [chios] [8] か、などと尋

---

[6] 京都市街の地図の裏面にある。

[7] １枚の表（京都市街）、裏（京都近郊）が描かれた銅版画の地図の事を述べている。

[8] これ以降「町」は原文で全て ‘chios’ である。

ねる時、地元の人はこの橋からの距離を言う事が多いからです。だから、名所への距離はこの橋から述べるようにしましょう。

この橋は西暦 [after the Christian era] [9]約 1600 年の（豊臣）秀吉の偉大な努力以前には、何度も洪水によって壊れました。

始めに秀吉は鴨川の堤を高く堅固にしたので、堤防はそれ以降壊れる事なく今もそのままです。

次に秀吉は三条、四条、五条という橋を建設し、橋の下の川底に大きな石を敷きました。そうすれば橋は以前のように簡単に壊れる事がないからです。

3. 御所　【御所】

天皇の古い住まいであり、（京都）博覧会が開催されている建物である御所[10] は、この国の中で最も素晴らしい宮殿です。

内側の塀の中にある建物は紫宸殿と呼ばれ、この国の政府の古い所在地でした。

紫宸殿の右奥は清涼殿という建物です [That in the right of the above named edifice is Sheirioden.][11]。

外の塀には 6 つの素晴らしい門があり、中の塀には 3 つあるので、それらは九門と呼ばれています。

博覧会の実施まで、宮廷の高官である公家以外は宮廷内に入る事は許されませんでした。

ですから人々は今回、この宮殿を訪問したいと熱望しています。

三条から北東[12]の方角に 15 町（約 1.6 km）の距離です。

4. 祇園　【洛東八坂社】

祇園は東山で最大ではありませんが、最も有名で素晴らしい寺社なので、私の話しはそ

---

9 時代について、原文ではすべて西暦で示されている。「太政官布告第 337 号」の「京都府令書壬申十一月第二百七十一号」が明治 5 年 11 月 9 日に出され、明治 5 年 12 月 3 日が明治 6 年 1 月 1 日と定められた。いち早く西暦を取り入れ、外国人に便宜を図ったと考えられる。

10「第二回は御所および仙洞御所庭園を借用」した（京都市、1975：131）。「御所内の博覧会は紫宸殿から清涼殿の縁側を通り、内侍所までゆけ、広い縁側に出品が陳列されてあった。（青山霞村、1928：123）。

11 一般的に紫宸殿を正面に見ると、銅版画の通り、清涼殿は左奥に位置し、原文と違いがある。工藤泰子（2008）「明治初期の博覧会と観光」95 ページ内、「御所御絵図」写真提供乃村工藝社、を見ると、紫宸殿を正面に見た右側（東側）の建春門に大博覧会の旗が立っている。建春門から見学者が入場したので、正面左に紫宸殿、その右奥に清涼殿が見える。この英文は入場口から見たままを書いていると思われる。

12 本来は三条大橋から京都御所は北西の方角にある。

の場所から始めましょう。そして祇園から徐々に北に進みます。祇園社の創設者は西暦 860 年頃この国を治めた清和天皇でした。ですが、何度か火災で焼失し、又地震に揺さぶられました。ですからその時代以降、何度も再建されています。現在の建物はとても威厳があり、その形はとても小さいですが、紫宸殿の建物に良く似ています。

入口を入ると巨大な門が見えるでしょう。

その門は屋根以外全て赤色です。

又寺社の入口には 2 本の柱と横に 1 本の梁 [as the two pillars with a transvers（ママ）beam] がある大きな石づくりの鳥居と呼ばれるものがあります。

この小さな本で話す事は沢山あるので、今は祇園を離れなければなりません。

5. 知恩院 【洛東智恩院】

ご存知のように、昨春開催された前回の（京都）博覧会の会場であった知恩院は、京都のなかでも広く、最も荘厳な寺社の 1 つです。

西暦 1202 年頃、国中に仏教を広める目的の為活躍した僧源空によって建てられました。

素晴らしく、広大で、卓越した建物である現在の建物は、左甚五郎 [Hidari Jingoro] という高名な大工によって建てられました。

高さ 18 フィート（約 5 m 49 cm）、厚さ 10 インチ（25.4 cm）の大きな鐘もあります。

鐘はその建物の南東の方角の丘の上にあります。

三条から約 8 町（約 873 m）です。

6. 南禅寺 【洛東南禅寺】

南禅寺は西暦 1260 年頃亀山天皇の宮殿でした。彼は仏教の信者になった後、ついには仏教の寺として仏像を納める為の建物を献上しました。それが今も残っています。

大変立派な庭があり、この銅版画に見られるように、住職 [templekeeper] の住居は本当に美しい [very handsome indeed] です。

特筆すべきは門の近くにある、大きいトーロー又は石灯籠 [a large Toro or stone lantern]です。

距離は三条から 14 町（約 1.5 km）です。

7. 若王子[13] 【洛北若王寺】

若王子は 1220 年頃仏教崇拝のため、後白河天皇によって建てられました。沢山の人々が、

[13] 熊野若王子（2019）「熊野若王子」https://nyakuouji-jinja.amebaownd.com/ （最終閲覧 2022 年 3 月 1 日）によると、「現在は熊野若王子神社と称」するとある。

夏の涼を求めて 3 本の滝を訪れます。

秋には赤く色づいたモミジ（紅葉）[momiji (maple)]の名所です。南禅寺に近く、三条から約 16 町（約 1.7km）です。

8. 黒谷 【洛北黒谷】

黒谷は京都の中で最も大きい境内の内の 1 つです。そして仏像が納められている本堂は美しい建物です。三門と呼ばれる美しい楼門があります。創建者はこの国に仏教を根付かせる事に成功した中の 1 人、円光大師と言われる人です。

三条から 19 町（約 2.1 km）です。

9. 永観堂 【洛北永観堂】

永観堂は仏教崇拝の為に、854 年に文徳天皇によって創建されました。

この寺の仏教の最初の説教者は、有名な僧弘法大師の孫である真紹 [Shinsai]でした。

人々が大変神聖だと思う沢山の素晴らしい仏像があります。

特筆すべき立派な庭園があり、この場所は東山で最も立派な場所の 1 つとして知られています。

南禅寺の近くです。

10. 真如堂 【洛北真如堂】

真如堂は多数の小さな建物を含む御所から東にある素晴らしい寺です。

この場所は京都の中でも立派な花々と美しい紅葉で最も有名な場所の内の 1 つです。

中国から来た仏教崇拝の為に 1050 年頃白河上院 [Shirakawajoin]によって建てられました。

三条から 23 町（約 2.5 km）です。

11. 吉田 【洛北吉田社】

吉田はこの国の神道の中で大変古く、有名な神社です。

現在の建物はほとんどすべて赤で彩色されています。

この写真 [photograph] [14]から見られるように、立派な木々がそこには茂り、大変気持ちの良い場所です。

三条から約半里（約 2 km）です。

12. 銀閣寺 【洛北銀閣寺】

銀閣寺は昔も今もその見事さで最も有名な場所です。

この寺は 1400 年頃に自分の楽しみの為に足利将軍によって銀で飾られた事から「ギンカ

[14] 実際は銅版画である。

クジ」[15]という名前になりました。

寺は今もそのままですが、大変古いので銀はもう今では全く見られません。

立派で素晴らしい庭園は、沢山の種類の常緑樹や可愛い花々のある、立派で気持ちの良い庭園があります。

庭の中心にはきれいな魚のいる小さな池があります。

三条から 32 町（約 3.5 km）です。

13. 円山 【洛東丸山】

祇園の東にある円山は有名な僧侶によって創建されました。

市街全てが丘の上から一度に見られる旅館等があり、この都 [this capital]の最も輝ける風景の内の 1 つを手に入れる事ができます。

ですから、博覧会の為に京都を訪問する外国人用のホテルを用意しました[16]。

銅版画に見られるように、沢山の種類の花々や果実の実る木々の優美で明るい庭園と美しい石が色々あります。

春には沢山の桜の木に花がとても美しく咲きます。ですから人々は円山へ行き、旅館等の宴会場[the halls] から満開の花々を見下ろしながら宴会をします。

これが人々にとって最も楽しい娯楽です。円山は三条から 10 町（約 1.1 km）の距離です。

14. 東大谷 【洛東東大谷】

東大谷は西暦 1690 年頃建てられ、その仏像は人々が大変神聖だと考える阿弥陀仏 [Midabuds] です。

この理由からその建物は他の建物より一層大きく作られました。

京都の魅力的な風景だと定評を得ているので、最も有名な場所の 1 つと呼べるかもしれません。

唐門と呼ばれる素晴らしい門があります。その門に入る前に、両側にうっそうとした木々のあるとても素敵な道を見つけるでしょう。祇園に近く三条から 12 町（約 1.3 km）です。

15. 八坂の塔 【洛東八坂塔】

八坂の塔は昔、仏教という宗教を初めて崇拝する為、聖徳太子という偉大な皇子 [the great

---

[15] ‘Gin’が ‘silver’であるという説明が本文中に一切ないので、読者には銀閣寺が銀箔で覆われたから銀閣と言う事について理解は難しかったと思われる。現在銀閣寺は ‘the Silver Pavilion’のニックネームで知られる。

[16]「明治五年（1872）の京都博覧会で入京を許された外国人は、円山一帯を宿舎とした（小林丈弘、高木博志、三枝暁子、2016：42）」とある。

prince, Shiotoku] によって創建されました。その後塔が倒れたので、最も有名な将軍であった（源）頼朝によって再建されました。

現在の塔はこの挿絵にあるようにとても高く形が良いです。

清水への道の途中にあり、三条から 12 町（約 1.3 km）です。

16. 清水　【洛東清水寺】

京都で最も荘厳な寺社である清水は桓武（天皇）が都を作った際、大悲信仰 [the faith of Daihi] のために（坂上）田村麻呂によって創建されました。

舞台と呼ばれる大きな枠組の上に立っています。

丘の上の道々はとても歩きやすく、寺に上るのにとても便利に舗装されています。

本堂、または本尊が納められている建物は広く、素晴らしいです。

そしてその本尊は京の人々が今も最も信仰する仏像の内の 1 つです。

ですからこの場所が、少なくとも 100～200 人の男女、特に女性が訪れない日は一日もありません。

ここからの眺めは、京都の全景が見えるため、京都で最良の眺めと言われていると思います。

三条から約 20 町（約 2.2 km）あります。

17. 清水焼の陶器　【五條ノ陶器】

清水への道には、素晴らしい陶器が沢山ある陶器店が多数あります。

そこで作られた皿、急須、湯呑等は優れている事でとても有名です。品質が大変良いものは価格が高いです。

京都の主要な製造品の 1 つです。

国内のほとんどの地に、素晴らしい価値のあるものとして発送されています。

18. 西大谷　【洛東西大谷】

親鸞聖人はその宗教[the religion] を広めるため西暦 299 年（ママ）頃に西大谷の建物を建てました。

そして 1709 年頃徳川の命により再建されました。

その寺院はとても美しく、立派な庭園に囲まれています。

その寺院を上るには、メガネバシ（眼鏡の橋）[Meganebash (spectacles-bridge)] と呼ばれる特殊な形の素晴らしい石橋を渡ります。

池の周りにはとても美しい緑の木々と桜の木々があります。

唐門と呼ばれる壮大な門があります。

清水に近く三条から 18 町（約 2 km）です。

19. 大仏 【洛東大佛殿】

（豊臣）秀吉は大仏と呼ばれる大変巨大な像[17]も作りました。

木造で重厚に上塗りされています。

像は高さ 160 フィート（約 48.8m）、像を覆う建物は高さ 200 フィート（約 61 m）です。

建物と像は地震や雷 [lighting (sic.)] [18]によって数回壊れました。

今日の像は木造で、本来の像の粗い模造品でしかありません。

元の場所には、大きい鐘以外残っていません。大鐘は高さ 14 フィート（約 4.27 m）、直径 9 フィート 4 インチ（約 2.85 m）、厚さ 9 インチ（約 22.9 cm）あります。

大仏は三条から南に 15 町（約 1.6 km）です。

20. 耳塚[19] 【大佛耳塚】

耳と鼻の墓である耳塚は、西暦 1590 年頃太閤秀吉が建立した大仏の門前にあります。この有名人に仕える大将達が 15 万人の兵力で朝鮮を侵略した時、秀吉は戦闘中に殺害した敵の耳と鼻を朝鮮から持ち帰り、自分に見せるよう命令しました。なぜなら戦闘で殺害した敵の頭部を切断し、王や大将に見せるという古くからの日本の慣習があったからです。

しかしその時代 [But now] [20]、距離が遠すぎるため、殺された朝鮮の兵士の首を日本に持ち帰る事は不可能でした。

このような理由で秀吉は上記の命令を出しました。

日本に持ってこられた耳と鼻の全てはこの場所に一緒に埋められました。

この墓は周囲 720 フィート（約 219.46 m）で高さ 30 フィート（約 9.14 m）です。

21. 蓮華王院（三十三間堂）【洛東三十三間堂】

大仏の近くには、後白河天皇が 1150 年に創建した蓮華王院があります。

彼はこの寺を特に観世音 [Kanjeon] 崇拝のためと定めました。

---

[17] ‘Daibutsu’ の属する宗教については言及がない。

[18] ‘lightening’ と思われる。

[19] 大日本スクリーン製造株式会社刊行の『覚馬名所案内』（以下複製本）には、耳塚の頁があるものと、完全に削除されたものがある。例えば、京都府立総合資料館歴彩館所蔵の複製本には耳塚が 20 ページに入っている。削除の有無を問わず、どちらも裏表紙の下方に「日本、京都の同志社大学図書館に保管されている原本から 1981 年 2 月に複製された。（筆者訳）」と書かれている。

[20] 文脈から「しかしその時代」とした。

最も大きな建物は三十三間堂と呼ばれ、1000 体の像があります。

それぞれの像は 5 フィート（約 152.4ｃｍ）の高さです。

この寺院建立のずっと後に、弓道をする人達の間で、縁側と建物の廂の間に沿ってどこにも触れる事なく弓矢を放つ、という慣習が始まりました。

矢が刺さった痕跡は今でも沢山の柱等 [&c]に見る事が出来ます。

22. 稲荷　【洛南稲荷社】

伏見へ行く道の途中にある神道の社である稲荷は、この国で最も有名な神社です。

ほとんどどこでも祀られている稲荷社の総本宮です。

この神社は淀川が見られる稲荷山という名の丘に建っています。

三条からその神社までは 37 町（約 4 km）です。

23. 泉涌寺　【洛東泉涌寺】

泉涌寺は西暦 850 年頃文徳天皇の治世の下、高官であった（藤原）緒継[21]によって建てられました。

その後天皇方の墓所として使われています。

蓮華王院の南東にある小さな谷に位置しています。

三条大橋より 28 町（約 3 km）の距離です。

24. 東福寺　【洛東東福寺】

伏見から京都への道沿いにある東福寺は、鎌倉の将軍（藤原）頼経によって 1230 年頃建立されました。

最も大きく最も立派な本堂の他に、多数の素晴らしい建物があります。

長い塀がその寺社を囲み、立派な木々 [fir trees] [22]が寺の前に生えています。

三条大橋から 23 町（約 2.5 km）です。

25. 宇治　【洛南宇治】

淀川の東にある宇治村は、この国の茶の産地としてとても有名 [is a very famous for tea]です。少なくても樹齢 200 年から 300 年のとても古い茶の木々があります。この村の土壌は、日本の中でも他に並ぶ場所がないほど茶木に最適です。この村に住むほとんど全ての人々

---

[21] 原文では ‘Morotsugu’ であるが、都名所図会巻三には「文徳帝の（中略）左大臣緒継公（野間光辰編、1994：286）」と記載がある。

[22] ‘fir trees’ は、研究社発行『新英和大辞典第六版』（2002）によると「１．モミ：a.マツ科のモミ属(Abies)の樹木の総称」である。本書では、全般的に林、森について全て ‘fir trees’ と述べている。

が茶木を栽培し、世話をしています。

莫大な量の茶は全国、又海外の国々に出荷されます。この国の最も主要な生産物です。

春には、女性と少女たちがその木々の茶葉を摘み、それは美しい風景です。

京都から南西の方角にあり、三条からその村への距離は 3 里 [Ris]（約 11.8 km）です。

26. 黄檗 【洛南黄檗山】

黄檗万福寺はこの市の南方にあるとても素晴らしい寺社です。

創建者は 1650 年頃に中国から来た福清 [Fukushin] [23]と呼ばれた中国人でした。

彼は徳川の命令により、このような素晴らしい建物の数々を建てました。

大変豪華に建てられた壮麗な門と建物が複数あります。

27. 本願寺 【洛内本願寺】

前回の博覧会の開催地であった寺社である本願寺は、1260 年頃にこの国を治めた亀山天皇が創建しました。

京都の中で最も有名な寺社の 1 つです。

大きく立派な塀がその寺社を取り巻いています。

飛雲閣と名付けられた美しい小さな建物を含むとても優雅な庭園があります。

この寺社の本堂は美しさと大きさで大変有名です。

西六条に位置しています。

三条から 26 町（約 2.8 km）です。

28. 本圀寺 【洛内本圀寺】

堀川通松原の南 [in the south of Matuwara in Horikawa] にある本圀寺は、有名な僧侶日蓮によって創建されました。

境内にはとても形の良い塔と他に小さな建物が点在し、そして緑の木々がある立派で広い所です。

他の寺院にもあるような背の高い門があります。

この本堂の裏には客殿と呼ばれる建物があります。

客殿の廻りには、立派な木々が沢山あります。

御所から距離にして 24 町（約 2.6 km）です。

29. 東寺 【洛内東寺】

この市の南西角に位置する東寺という寺社を創ったのは、弘法大師空海 [Kukai Kobo]と

[23] 福清県出身の隠元禅師かと思われる。

いう有名な僧でした。

東寺は京都の中で最も大きい寺社の 1 つです。

高い塔（トゥ）[a high tower (Towu)] は人目を惹き、遠くからでも見る事ができます。

とても荘厳な建物と木々、そしてその場所全部が大きな塀で囲まれています。

毎月 21 日には大変沢山の京都の人々がここに来て、像を拝みます。

30. 八幡の石清水【南城八幡社】

この市の南西部にある八幡の石清水は、神としてこの国をかつて治めた偉大な天皇を崇拝するため、清和天皇が建立しました。

淀の南西にある八幡の丘に位置しています。大阪から伏見へ川を遡上する船からその丘がみられます。

建物はとても素晴らしく豪華で、日本で最も崇拝された人々[24]に捧げられた寺社の内の 1 つと呼ばれています。

三条から距離にして約 4 里（約 15.7 km）ほどです。

31. 長岡 【洛南長岡社】

長岡の天満宮は 870 年頃に活躍した菅公 [Kanko] という有名な人物に献じられた寺社です。

彼は博学で徳があったので、今日まで人々に神として崇拝されています。

菅公は今なお、この国の殆どすべての場所で崇拝されています。

この寺社はとても良い場所にあり、開田という村の西にあります。

三条から 3 里（約 11.8 km）です。

32. 梅宮【洛西梅ノ宮】

梅の宮は西山の中で最も壮麗な場所です。

とても素敵な池があり、池の真ん中には小さな島があります。その前にはとても快適に過ごせる寺社である大きな建物があります。

島の中には小屋があり、小さな橋が池にかけられています。

西山のこれらの名所 [those of Nishiyama] を訪ねるようでしたら、[25]

行くべき場所を忘れないようにして下さい。なぜならそれは、京都の西の方角の中で最も立派で一番有名だからです。

---

[24] 原文では ‘most worshipped persons in this country’ である。
[25] 原文で改行されている。

三条から 56 町（約 6.1 km）離れています。

33. 嵐山 【洛西嵐山】

嵐山は京都の西部にあります。

この丘のふもとには、その廻りを流れる大きくて清らかな [crean (sic.)] 川があります。

春に咲く沢山の美しいサクラの木々と、秋にはとても美しい花のように全て赤くなる紅葉 [the red leaves that become all red] があります。

川の中には琵琶湖にいるのと同様に、美しい魚がいます。

沢山の人々が訪れ、春には美しい花、秋には明るいモミジ [the red leaves that become all red] を見上げてご馳走を食べます。

本当に最良の風景の 1 つです。

三条から 2 里（約 7.9 km）の距離です。

34. 清凉寺【洛西清凉寺】

清凉寺は西暦 1000 年に仏教 [the religion] を学ぶ為中国へ渡った、奈良東大寺の僧奫然 [Chionen] によって建立されました。

それは西山の中で、立派な塔と素晴らしい門楼を持つ、最も素晴らしい場所の 1 つです。

三条から 18 町（約 2 km）です。

35. 仁和寺【洛西御室】

最も素晴らしい境内を持つ寺の 1 つである御室仁和寺は、西部に位置します。

光孝天皇が仏教を信仰するために創建しました。

その後、この国で最も位の高い寺の 1 つ [one of the highest temples] になりました。

今回この寺で高価で古いもの等が多数展示されました。（豊臣）秀吉や他の大名によって献上された、金銀で飾られた高価な品々がそこにはあります。

寺内には、春に美しく咲く沢山の花々と見事な木々があります。ですから多くの人々が、そこで開花した桜の花を見上げながら宴会をします。

寺は宮 [Miya] の名の下、代々親王が僧侶になるので大変立派です。

36. 大徳寺 【洛北大徳寺】

大徳寺は仏教を学んだ事でとても有名な僧である大燈国師 [Taitokokushi] によって創建されました。

山内の建物は皆荘厳で、それぞれ素晴らしい仏像が納められています。

寺の入口には、とても豪華な造りの門楼があります。

寺は今宮通の南にあります。

三条から 25 町（約 2.7 km）の距離です。

37. 金閣寺 【洛西金閣寺】

金閣寺は北野（天満宮）の北東にあり、足利将軍が完成した銀閣寺の少し前に建てられました。

金箔 [very thin gold] で装飾された塔 [tower] が、今も庭園の真ん中に建っています。しかし大変古いため、現在薄い金はほんの少ししか見られない状態です。

しかしその雄大な建物と立派な庭は今も残っています。

それらは素晴らしく荘厳な事で銀閣寺より優れています。

この庭はとても広く、素敵なものが多数あります。

塔の前には沢山の魚のいる池があります。

京都の中で最も大きく素晴らしい寺の 1 つと呼べるかも知れません。

三条から 50 町（約 5.5 km）の距離です。

衣笠と呼ばれる立派な丘がそこからも見られます。

38. 北野 【洛北北野神社】

最も学問に優れ公正な人であり、大昔 [at ancient time] の人々の幸せを願い努力した菅公のために開かれた北野の天神は、素晴らしい神社で、その本社は帝の邸宅と全く同じです。

その社は御所の西、金閣寺に行く途中にあります。

神道の社の入口には、いつも大きな鳥居があります。

建物の立つ場所はとても心地よく、立派な森が周りにあります。

三条からこの神社までの距離は 41 町（約 4.5 km）です。

39. 西陣 【西陣織物】

西陣はこの国の絹織物製造で最も有名な場所です。

日本の最も鮮やかで価値ある布地がそこで作られ、金で装飾された着物 [somedresses] も又織られています。

そこでは今回 [at this time] [26]も又、冬に重宝される襟巻 [neckclothes] が沢山製造されました。

西陣で織られた襟巻は現在、京都でとても広範囲に普及しています。

外国産のものよりもずっと安価なので、京都から他の都市へ高級品 [for a great value] と

[26] 博覧会の事を指していると思われる。

して出荷されています。

40. 上賀茂 【洛北上加茂】

下鴨と同時期に創建された上賀茂は又、政府から補助金が支出される社の 1 つです。

豪華さと大きさで下鴨に勝っています。

その建物は本当にとても豪華です。

この広い境内の中で競馬 [the race] が毎年あります。

遠いですが、その道は鴨川の堤防に沿ってあり、多くの木々が植わっているので、歩くととても気持ちが良いです。

三条からの距離は 66 町（約 7.2 km）です。

41. 下鴨[27] 【下加茂】

下鴨は古代におられた玉依姫を祀るために、天武天皇によって創建されました。

日本の歴代天皇の殆どが祝日や祭の時にいつも訪れる特別な場所です。

ですから下鴨は政府からの補助金がある社の 1 つです。

ホンシャ又は像が置いてある建物 [Honshia or the building where the deity is put] の前に鳥居が 3 つある素晴らしい社です。

その寺社は立派な古い森に取り囲まれています。

鴨川が分かれるこの都市の北側に位置し、三条から 20 町 (約 2.2 km) です。

42. 鴨川 【鴨川堤】

鴨川は北部の山から発生した貴船岩屋川の水が集まり、形成されました。

この川は二条、三条、四条、五条の橋を通って、京都の東部に流れます。そして最後に淀の西側にある淀川に流れ込みます。秋に長い期間雨が降ると、川の堤防は大変早く浸水し、橋を倒し、田畑を不毛にし、農家の人達には何も残りません。この川は堤防の乾いた場所に大きく布を広げて、麻や綿の布を晒す事で有名です。鴨川の水は又、高瀬と呼ばれる小さな運河に水を供給しており、高瀬川は二番目の橋である二条から伏見までを流れています。この運河はとても浅いのですが、大変多くの物資が、特別に作られた小さな船によって荷物の上げ下ろしをされ、向きを変えます。

また少数の客船が伏見から京都まで往復しています。

43. 大津、堅田、比良 【三井寺ヨリ唐崎堅田見ル】

大津には開化楼という名で知られる外国人用の快適なホテルがあります。

---

27 原文では ‘SIIIMOGAMO’ である。目次には ‘SHIMOGAMO’ とある。

このホテルは湖畔の良い場所にあります。

三条から大津の距離は 3 里（約 11.8 km）です。

堅田近くの湖の中に立つ建物 [the building] [28]に飛んでくる鳥たちも又最も良い風景の 1 つです。

その建物 [house] から湖のほぼ全景が見られます。

冬から春の始めまで雪に覆われた比良山は、特に夕方が大変良い風景です。

44. 琵琶 【近江八景一覧ノ圖】

京都の東にある琵琶湖は、沢山の美しい景色が全方向で見えるとても素晴らしい湖です。

湖の美しさは 8 つ[29]あります。

1 つ目は唐崎の変わった松、2 つ目は野生の雁が飛び降りる風景。

3 つ目に粟津、4 つ目に石山の秋の月光の夜、5 つ目に瀬田の夕暮れ、6 つ目に矢橋への船の航行、7 つ目に雪の比良山の夕景、8 つ目は三井寺からの景色で、この寺社に上れば、ほとんど全ての美しい景観が見られるでしょう。

45. 唐崎【近江唐崎松】

唐崎の松は、先ほど言ったように、湖の周りの 8 つの珍しい風景 [one of the eight remarkable things] の 1 つです。

この木は湖岸で成長し、その枝は皆水の上を大きく広がっています。

この木は少なくとも樹齢 200 年から 300 年ほどだと言われています。

雨は枝から枝へたれ、ついに水の中に落ちる時、特別な音を立てます。

46. 瀬田、粟津、石山【石山ヨリ勢田橋ヲ見ル】

湖の水の出口を横切る瀬田の橋は、最も有名で大きいものです。

夕景はとても美しく、多くの人が日暮れ時にやってきます。

粟津は湖岸のとても快適な場所です。

一番良い風景は風が吹き太陽が輝く時です。

この湖の波はその時銀のようにとても美しく見えます。

石山寺は、湖の水の出口近くの丘に立っており、湖の低い部分はここから見下ろすと一

---

28 「湖の中に建てられた建物」であるので、堅田の浮御堂かと思われる。

29 近江八景である。例えばジャパンナレッジ所収の『日本国語大辞典』によると、近江八景とは近江国（滋賀県）、琵琶湖南部の湖畔にみられた八つの景勝で、「三井の晩鐘，唐崎の夜雨、堅田（かただ）の落雁、粟津の晴嵐，矢橋（やばせ）の帰帆、比良の暮雪、石山の秋月、瀬田の夕照をいう」と書かれている。

番良いかも知れません。

沢山の人々が秋の月明りの夜にこの場所を訪れます。

47. 比叡山 【比叡山】

山々の中で最も高い山が京都の北東にある比叡山です。

この山の頂上近くには、延暦寺という名の大きな古い寺社が建っています。

延暦寺は桓武天皇が京都に都を作った際、創設されました。何世紀もの後、この寺社の僧はとても強力になり、時には他の寺社の僧たちと激しく戦い、ひどい虐殺や放火をしました。

一時期、数千人の僧が住んでいました。

1540（ママ）年に将軍（織田）信長に対しての戦いが起こり、とうとう信長に負け、すべての僧は殺され、立派な建物は灰塵に帰しました。

今日の宗教施設はその規模と素晴らしさにおいて、古い時代のものとは全く異なっています。

48.[30]

比叡山に上ると、琵琶湖のほとんどを見る事ができます。

比叡山は京都の周辺にある最も有名な風景の一つで、旅行者が山の頂上まで上る事は、大変価値があります。

三条から 3 里（約 11.8 km）です。

おわり[THE END]

[30] タイトルはない。

第２章　日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改訂についての研究
—山本覚馬著、英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）を題材に—

2－1.　はじめに

表題の英文京都ガイドブックの原文のタイトルは‘The Guide TO THE CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING PLACES BY K. YAMAMOTO.’である。タイトルののち、‘KIYOTO. PUBLISHED BY NIWA. THE SIXTH YEAR OF MEIJI. 1873.’［京都、丹羽出版、明治 6（1873）年］である。

『覚馬名所案内』は、明治維新後衰退した京都復活の起爆剤として開催された京都博覧会に、入京が許された訪日外国人の為に発行された。明治初期に日本人の手によって、英語で書かれた日本初の画期的な名所案内であった。

『覚馬名所案内』の序文（第 1 章を参照）が示すように、著者である山本覚馬は、明治維新後初めて外国人に開かれた京都が、国際観光で発展する絶好の機会ととらえた。

『覚馬名所案内』は表紙・銅版画の違い・微妙な文章の違い等から初版から数年間版を重ねたことがわかる。本稿では、複製本[1]の原本である同志社大学図書館蔵本（以下『同志社本』という）を基本的に使用する。寸法は縦約 18.0×横約 16.7cm、厚さ約 0.6cm、折り込み地図は 1 枚の表裏に印刷されており、縦 32.0×横 40.0cm である。墨流し模様の表紙であり、糸とじ、銅版挿絵が頁毎にのりつけされており、添付の地図は鉄道と京都駅の彫り入れがされている。中表紙には‘FOR FOREIGN VISITORS’（外国人訪問者のための）と表紙にはない増補がされてある。持ち運びしやすい小冊子である。

複数の改版は冊子が好評の内に数年に亘って頒布され、また読者が見やすく読みやすいように改良されたと思われる。また、日本文化を英語で紹介する「外国人観光案内のための英語表現」や京都のインバウンド観光の始まりを象徴する興味深い 1 冊である。

『覚馬名所案内』は多様な視点から明治初期を論じるうえで、その一部分として触れられることが多い。本稿では、京都の最も初期の国際観光に一定の役割を果たしたであろう『覚馬名所案内』自身について、誕生した制作背景と複数の改訂による変化に焦点をあてて考察を行う。特に『覚馬名所案内』の英文内容そのものについての研究はまだ十分とは言えず、研究の余地がある。

---

[1] 裏表紙に「日本、京都の同志社大学図書館所蔵の原本を 1981 年 2 月に複製（筆者訳）」と記載がある。但し、複製本には名所の一つである「耳塚」の部分が削除されている。

本稿では『覚馬名所案内』の、新旧の版を比較してその内容の変化を調査し考察する。

2－2. 先行研究

京都博覧会については工藤泰子（2008）、複数の『覚馬名所案内』の存在については小嶋正亮（2019）、『覚馬名所案内』のガイドブックにおける歴史的位置づけについては長坂契那（2010）の論考を参考にした。

工藤泰子（2008）は明治初期の京都博覧会について、運営者である「京都博覧会社は京都市民主導の半官半民の組織（83）」であり、出資・貢献した地元の有力者たち、並びに京都府のサポートについて詳しく調査した。『覚馬名所案内』については特に、御所拝観が第 2 回以降の京都博覧会の呼び物であった事に触れ、京都博覧会のために特別に拝借された「御所」の項目内の英文内容にそれが表れている事を指摘した。工藤による、『覚馬名所案内』が第 2 回京都博覧会に即した内容を含んでいる、という指摘は、その他の名所の英文内容にも反映されていると考えられるため、本章では全てのページを考察し、『覚馬名所案内』の特色をより深く調査する。

小嶋正亮（2019）は、明治 6 年発行と記載のある『覚馬名所案内』は、複数の異なるタイトル、大きく 2 種類の異なる銅版画イラストの違い、銅版画の出典と銅版作家の特定、地図における京都駅とその鉄路の追補から、現存する複数の版の『覚馬名所案内』を分類して、発行年をある程度特定可能とした（京都駅の開業は 1877 年である）。小嶋の研究は『覚馬名所案内』の英文内容の違いには言及していない。本稿では新旧と思われる異なる版の英文の内容を比較し考察する。

長坂契那（2010）は「1881 年以前に出版されていた『旅行』もしくは『案内』という単語が表題に掲載されていたもの」を出版年の古い順に挙げ、2 番目に『覚馬名所案内』を挙げた。長坂は日本最古の旅行ガイドブックについて、以下のように述べている。

> 外国語による日本最古の旅行ガイドブックは、資料①のデニスによる 1867（慶應 3）年『中国・日本開港地案内』であった。（中略）日本に関しては開港した長崎、横浜、箱館（函館）、兵庫、そして当時の政府に当たる幕府があった江戸の 5 都市に限られていた。そして日本編の記述は伝聞によるために情報の出所が曖昧で概要しか書かれていない（長坂、2010：106）。

長坂は、デニス本の後、1873 年に『覚馬名所案内』が出版され、その次に発行された京都名所案内は、キーリングの『旅行者のための横浜・東京…案内』初版：1880（明治 13）年（2010、110）」（以下 TG）であり、キーリング本に初めてほかの都市とともに京都についての記述がある事を挙げた。その他荒山正彦（1991）は、マレー社発行の *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*（1881～1913）（以下 HT）の研究において、それ以前の日本旅行案内書については、合計 5 冊、それも 50 ページ以下の小冊子しかなく「日光、京都、横浜、東京などのかなり限定された都市とその周辺の案内である（1991、131）」とした。荒山が指摘した冊子の中では、1873 年発行の『覚馬名所案内』は最古である。

2－3. 遷都による京都の危機的状況と京都博覧会

本節では、遷都によって京都が立たされた危機的状況とそれを打破する目的で開催された京都博覧会についてまとめる。

2－3－1. 遷都による危機的状況

『京都の歴史 8』によると、幕末の政争により京都は動乱の場となり 1864 年 6 月、蛤御門の戦火により、市域の三分の一を焼失する「どんどん焼（京都市、1971：16）」となった。京都の市民は王政復古により京都が新政府の政治的中心となることに期待を抱いていたが、明治 2（1869）年東京への遷都が決定的となった。京都は「千年にわたる帝都としての地位を失い、いわば廃都ともいうべき事態に（同書、17）」なり、それは極めて深刻であった。

遷都直後の人口は、同条件の元での人口調査は当時の文献によって大きく数が異なり、一概には言えないが、大きく減少したと思われる。『京都の歴史 8』によると、当時の京都市民の危機意識は人口に表れ、「明治四年から六年にかけて華族・士族・有力町人の転出によって、京都の人口は減少の方向をみせ（同書、33）」たとある。『京都府教育史・上』には「車駕東遷の後をうけて、京都は火の消えたやうに淋れた時であるから、人口も急激に減少していたであろう（京都府教育会、1940：64－65）」という当時を物語る記述が残る。

2－3－2. 京都博覧会の開催

東京遷都は精神的なダメージを京都の人々に与えた。並木誠士によると「現実的には、天皇周辺のさまざまな調度、道具類を製作していた産業界のダメージが大きかった。（中略）このような産業界の危機的な状況を打破する手段のひとつとして博覧会が企画された（並

木誠士、2008：326)」とある。

博覧会 60 年の記録である『博覧協会史略』の緒言には「死か、生か、退けば死を俟つに等しい。では進んで活を求めるの途は何処に何があったか？（中略）博覧会の開設、これ以外に途はない（大槻喬、1937：3)」という強い決意が見える。京都博覧会の創設者、並びに出資者である有力者たちのプロフィールや働きについては、工藤泰子（2008）の論を参照されたい。明治 4 年に開催された創始博覧会の内容は古物、骨董が多く、京都博覧会としては除外され、明治 5 年を第 1 回として記録する事となった。

第 1 回京都博覧会は、「明治 5 年 3 月 10 日（陽暦 4 月 17 日に相当す）から 5 月末日（陽暦 6 月 3 日）までの 80 日間（大槻喬、1937、11)」開催された。会場は本願寺対面所、白書院・黒書院、建仁寺方丈、知恩院の大方丈・小方丈の 6 ヶ所で、『京都博覧会沿革誌』の諸統計一覧表によると入場者は「参観人、46,935 人、参観外国人、770 人[2]」であった。『京都博覧協会史略』によると、博覧会としての第一の使命は産業の開発振興であるが、「第二の使命は京都を日本随一の観光地として汎く外国人にも宣伝紹介すること（大槻喬、1937：46)」であった。そのため官民協議の結果、「京都府は正院[3]に向って特に外国人の入京許可を乞ふことに（同書、17)」なり、その結果、外務省は明治 5 年 2 月 3 日付で各国公使及び領事に対し、日本最初の博覧会の開設を告げ、特に入京を許し、かつ出品をも促した。各国について、第 1 回には具体的な国名は書かれていないものの、第 2 回の開催にあたっては、「英佛米蘭伊西澳獨丁露希瑞（同書、48)」である。

観光という第 2 の使命によって、都であった京都を外国人に開き、京都のみならず比叡山、琵琶湖遊覧までできるようになった。第 1 回の頃は外国語の京都ガイドブックの対応がなかったため、第 2 回開催時とそれ以降に向け、外国人への「おもてなし」と実用的な観光の便宜を図るために京都案内書の早急な準備と配布の必要性があった。

第 2 回京都博覧会は新暦明治 6 年 3 月 13 日～6 月 10 日までの 90 日間、京都御所、仙洞旧院で開催された。本会場入場者は「参観人 706,057 人、参観外国人 634 人[4]」と記録されている。第 1 回における日本人 46,935 人の入場に対して、第 2 回は約 15 倍もの参観人数（日

---

[2]『京都博覧協会史略』では、「本邦人 31,103 人、学校生徒女紅場生徒 7,531 人、外国人 770 人（37)」である。

[3] 正院とは「明治四年七月より十年三月まで存在した最高政治機関（京都博覧協会史略、17)」であった。

[4]『京都博覧協会史略』では、「本場 406,457 人（53)」で相違があるが、外国人の数は変わらない。

本人）となった。『京都博覧協会史略』には「御所御殿の拝借といふ空前にして且つ絶後たるべき光栄に浴した（大槻喬、1937：46）」とある。天皇が数年前まで居住していた王城が開催場所となり、内外の一般の人々がこの機会に見物したい、と熱望したのだろう。これは『覚馬名所案内』「御所」のページ（第 1 章）を参照されたい。

工藤泰子（2008）が用いた「御所御絵図（2008、95）」には、京都御所の東に位置する建春門から入場者が入り、紫宸殿の前を通って清涼殿に向かう列が描かれている。現在の参観コースは西の清所門からであり、紫宸殿と清涼殿の見える方角は異なるが、建春門から入場すると、紫宸殿の右奥に清涼殿がみえる。この文章から、『覚馬名所案内』は京都博覧会入場者用に制作されたことがわかる。なお、「三条大橋から北東の方角」については、実際は北西が正しいと思われる。

また外国人対応の「おもてなし」に関連して、『京都府教育史』に興味深い記述があった。それは京都府が「旅館の設備には府で心を砕き、通弁、接待、警備等には、欧学舎や舎密局の生徒も手伝をした（1940、388）」との部分である。英語を含むヨーロッパ言語を教える欧学舎や化学を教える舎密局で、西洋人から直接学ぶ学生達が「お雇い教師」仕込みの得意な英語を使って手伝いをしたようだ。

京都博覧会はその後大正 15 年まで、「しだいに全国的な産業見本市のような性格（京都市、1971：138－139）」を見せながら、合計 53 回開催され、京都の復興と産業、美術、工芸の発展に大きく寄与した。それは博覧会だけでなく、それに付随した余興、例えば「都をどり」は今日では春恒例の舞踏公演となっている。

2－4.　『覚馬名所案内』改版の歴史と関わった人々

この章では、『覚馬名所案内』の改版の歴史とその制作に関わった人々について述べる。『京都府教育史』には、以下のようにガイドブックが登場した時の様子がある。

> 尚外人の遊覧客招致のため、外務省に依頼して外人筋に広告した事は効果があって、上海、香港等からさへ来る者があった。それには山本覚馬が門弟の丹羽圭介と書いた英文の案内記を、丹羽氏等自らの手で印刷して売ったのが非常に好評を博した。此書は四十八頁の小冊子ではあるが、色々な意味で記憶すべき珍書である（京都府教育会、1940：390）。

このように曖昧にしか記述がないので、より細かく調査する。

2－4－1. 成立時期と関わった人々

『覚馬名所案内』は表紙に「明治 6 年」と記載があり、第 2 回京都博覧会のために発行された。出版者の丹羽圭介は「山本覚馬氏の指導により私が主となって拵えたものであるが、もちろん京都最初の欧文活版印刷であった。以上はすべて明治六年のことで（大槻喬、1937：348）」あると述べている。また「明治五年には未だ英文活字はなく、同年設定の『外国人入京規則』は英文木版を以て印刻（同書、40）」された、との記述から『覚馬名所案内』の文章は英文活字で印刷、制作されているので、『覚馬名所案内』の初版が出版されたのは明治 6 年である事は確かであろう。

上記丹羽の情報のほかに、『覚馬伝』に述べられている情報は、本稿第 1 章「解題」にある。

『覚馬伝』の「年譜」によると、山本覚馬は会津藩の武士の長男として生まれ、26 才の時、江戸に出て蘭学を学んだ。また洋式砲術の研究を深めた。37 才の時会津に戻り、藩主松平容保の上洛に伴って京に入り、同年蛤御門の変の際会津藩砲兵隊を率いて奮戦するが、眼疾を患い療養した。41 才の時鳥羽伏見の戦いが始まり薩軍に捕えられ、同藩邸に幽閉される。「管見」を著述し、薩摩藩主に差し出した。42 才で京都府顧問となり、43 才で京都府兵部省食客として京都府に採用された。博覧会のための英文案内記を作るのは明治 5 年 45 才の時で、「この年から足を病む（杉井六郎、1976：398－402）」状態であった。

輸入と機械組立てはレーマン兄弟が行った。『京都府教育史・上』には明治 4 年「十月二十九日付で欧学舎から、博覧会に出品する為大阪川口のレーマンから送った品物が、ルドルフの所に着いたといふ事を府に届出でて居るから、ドイツ製の機械類も並べた（京都府教育会、1940：387）」とあり、その機械類の一つであった印刷輪転機が第 1 回京都博覧会で展示され、京都府が購入した可能性が考えられる。

丹羽圭介は京都出身である。『慶應義塾出身名流列伝』によると、1856（安政 3）年生まれで、新英語学校に入って間もなく京都府令選抜により農牧講習所に入学、英人教師より学んだ。国法を学ぶ必要性を感じ、山本覚馬に洋学を学んだ。京都の慶應義塾で学び、明治 7 年上京、明治 10 年東京の慶応義塾を卒業、11 年京都に戻った。「12 年京都に府会設けられて山本氏其議長となるや氏は書記長の名を以て盲目にして躄りなる覚馬翁を挨け万事を処理す（三田商業研究会編、1909：149－150）」とあるように、山本覚馬との師弟関係は

深いものがあった。

山本八重は 1845（弘化 2）年生まれである。明治 5 年当時は、「女紅場（京都府立第一高等女学校の前身 - 現在の鴨沂高校）の権舎長兼教道試補に任ぜられ（中略）同 8 年 11 月に辞任（河野仁昭編、1989 年：43)」するまでその職にあった。

著者と出版者については「当時は内務省でなく文部省の認可を経て発行したので、著者は山本覚馬、出版者は丹羽圭介である（住谷悦治校閲、1976：99)」。内務省と文部省の許可の違いは不明であるが、本書タイトルの‘By K. YAMAMOTO’（山本覚馬著）と‘NIWA, KIYOTO’（京都、丹羽出版）はこの許可の影響を受けた。

『覚馬名所案内』の銅版画と銅板地図については「銅版で地図付の簡単な案内記を作った（同書、117)」とあり、各々の名所が詳細に描かれた銅版画によって、一見するだけでも名所の様子や魅力がわかるようになっている。銅版地図は地図の下部に作者の名前があり、石田旭山（才次郎）である。銅版画の作者についての詳細は、小嶋正亮（2019）の論を参照されたい。

これらの調査から、先述の「珍書」の意味は、「京都の名所を文明開化の象徴の一つである英語の活字、美しい銅版画と詳細な地図で描いた小冊子」という従来の日本にはなかった新しい種類の「ガイドブック」であった。

2－4－2.　『覚馬名所案内』改版の歴史

『覚馬名所案内』は、複数の異なるタイトルと 2 種類の異なる銅版画、地図上での鉄道の有無から、複数回の改版がされた事が近年の調査で明らかになってきた。

小嶋正亮（2019）は、宇治市歴史資料館所蔵本[5]（以下『宇治本』という）と版の異なる『覚馬名所案内』を調査し、特に『宇治本』と京都府立京都学・歴彩館所蔵本（以下『歴彩館本』という）を比較して、以下のようにまとめた。

> タイトルに「The Guide（案内)」の語が付くほか、形状も宇治本が長方形であるのに対し、ほぼ正方形。表紙や中扉を彩る飾り罫の種類も異なる。地図は同図だが、歴彩館本には明らかに後補とおぼしき鉄道路線が描かれる。本文はほぼ同じながら、項目によっては追記等が見られ、レイアウトが異なる。寸法とともに、両者が最も

[5] Yamamoto, K. (1873). ‘*Celebrated Places in Kiyoto &, the Surrounding Countries for the Foreign Visitors, Translated into the English by K. Yamamoto*’. Kyoto, Niwa.

大きく異なる点は、頁毎に貼付される銅版画である（2019、4）。

同じく、小嶋は『宇治本』は一番古い部類の出版であり、数年間試行錯誤を繰り返す一方、『歴彩館本』は「貼付の地図に線路が描かれ京都駅の位置に『ROAD RAIL STATION』とあることから、明治 10 年 2 月 10 日の同駅開業以降、京都博覧会でいえば、第六回以降であることは明らかである（同書、7－11）」とし、新旧の主な改版のキーポイントは、銅版画の変更と鉄道駅の後補であったと述べた。

小嶋の論におおむね従うが、筆者の立場から改めて、主な版を調査し特徴を考察した。

比較的古いと思われる本について『京都博覧協会史略』の写真にある本のタイトルは『THE GUIDE of THE FAMOUS PLACES IN AND AROUND KIYOTO FOR THE FOREIGN VISITORS. PUBLISHED BY THE COMMITTEE OF THE EXHIBITION. 2533（大槻喬、1937：41）』 である。これは「皇紀 2533 年、博覧会協会発行（筆者訳）」とあり、発行年が皇紀で示され、発行者が丹羽ではなく博覧会協会である。本典にあたっておらず、中身は不明なので、その所在を調査中である。

類似する『歴彩館本』『国立国会図書館所蔵本』『同志社本』の 3 冊について調査すると、わずかながら違いが見られた。第 1 に、『歴彩館本』『国立国会図書館所蔵本』の 2 冊には銅版画上部に日本語タイトルがあるが、『同志社本』の銅版画は上部の日本語タイトルが切られた状態で貼られていた。第 2 に、3 冊の中で『歴彩館本』だけが 43 ページの「大津、堅田、比良」と 44 ページの「琵琶湖」の銅版画について、逆に貼られていた。個々の銅版画を該当ページへ貼付するという作業中に貼り間違えたと思われる。

『幕末明治・京都遊覧－銅版画の世界－』の 45 ページには現在新しいとされている『覚馬名所案内』の銅版画と明らかにされた「銅版京都名所」があり、この中に「京都停車場」の銅版画が含まれているが（宇治市歴史資料館、2018）、実際には新しいとされる版の『覚馬名所案内』に使われていない。開通後の出版に鉄道駅の頁が追加されなかったことは疑問を残すため、今後も調査を続けたい。

『覚馬名所案内』が実際に京都博覧会での観光ガイドブックの役目を終えた時期の可能性の 1 つとして、明治 13 年があげられる。それは京都博覧会が盛り上がりを見せ、会場が京都御苑内の常設会場に移されたのが明治 14 年であることから、その前年ではないかと考えられるためである。紫宸殿を含む京都皇宮が使用されなくなり、本文 3 ページの「御所」の説明が古い情報になった事から『覚馬名所案内』の配布が終了した可能性がある。

同時に考えられる可能性は、『覚馬名所案内』に取って代わる西洋人によって英語で書かれたガイドブックの登場である。長坂契那（2010）によると、前述した TG は 1880（明治13）の刊行である。『キーリング本』の第一版の序文には、「すでに、『横浜案内』や『東京案内』、『京都案内』などの優れたガイドが出版されている（106）」という一文があり、『覚馬名所案内』に影響を受けた事が窺える。同じく序文には、多くの質問が日本へ来た外国人から寄せられ、「どのような質問に答え旅行者に便利なヒントを提供するのが、この小冊子を編集する目的である（同、110）」とする。

TG の第 4 版 2 刷である KG（1890）の序文には「前の版が飛ぶように売れた事でキーリングのガイドが日本を訪問する人達に必要である事が証明されました。（中略）この第 4 版を印刷している間に起こったどんな変更でも、別紙に書いて該当する頁に挟んであります（拙訳）」とあり、TG・KG は、文明化激しい日本を描くガイドブックとして、できるだけ新情報を入れていこうとする意気込みが見られ、英語圏の観光客に大変魅力的であった事が窺える。

2－5.『覚馬名所案内』の特色

この章では、初めに『同志社本』の英文から、明治初期ならではの英語の表現の特色や注目すべき点を挙げる。次に『宇治本』（比較的古い時期に発行か）と『同志社本』（改版を重ね、比較的新しく安定して供給されたか）を用いて、文章を注意深く検討し、2 冊の違いや年月の変化を読み取る比較を行った。その結果、大変興味深い記述の変化・表現・並びに言葉の改善等が見られた。

2－5－1.『覚馬名所案内』の特色

筆者は本稿第 1 章にて、『同志社本』の全文翻訳を行った。その際に見受けられた内容の特色を『覚馬名所案内』が参考にした文献、地図を含め、より細かく詳しく述べる。

京都博覧会第 2 回会場であった御所、第 1 回会場であった知恩院並びに本願寺、宿舎であった円山、神戸から京都への交通に関して稲荷、八幡の石清水、奈良への休憩箇所であり、名産の宇治茶で名高い宇治等が名所として含まれている。建仁寺は第 1 回会場の 1 つであったがこれについては含まれていない。「遊覧区域は琵琶湖まで延長させ（住谷悦治校閲、1976：117）」）たので、琵琶湖周辺の観光紹介がある。物品の販売促進として清水焼、宇治茶、西陣織等の京都の名産品が紹介され、西陣織は具体的に「今回も冬に使い勝手の

良い襟巻が沢山あります（筆者訳）」と販売した様子を書いている。

文法通りでない文章、現在の読み方、書き方にそぐわない綴り、並びに誤植と思われる単語が多数ある。例えば地名について、京都は‘Kiyoto’と綴られ、表記は現在と異なる。名所の一つ 「梅宮」は‘MUMENOMIYA’と記された。本稿第 6 章（6－5－1）に後述するが、この‘M’から始まる「梅宮」は、『覚馬名所案内』独特の呼び方であり、SN に『覚馬名所案内』が影響を与えたことのわかる一例である。

名所をたたえる言葉が、‘splendid’（splendor を含む、25 回）, ‘magnificent’（10 回）など多く現れる。

固有名詞では、そのまま読みを英語で書いているものが多い。例えば、「御所」は‘Gosho’である。「天皇」という単語は 18 回使われるが、そのほとんどが‘Tenno’（11 回）、‘Mikado’（3 回）、現在一般的に天皇を表す‘Emperor’は 4 回であった。「将軍」については‘Shogun’のまま 5 回使われている。天皇を表す英語表現については、新旧の『覚馬名所案内』の比較において違いが表れたので、後述する。

貼り付けされている地図には当時日本でも最先端の小学校、外国語学校、電報局、郵便局、鉄道等の記載がある。外国人向けであるのにも関わらず小学校の場所が掲載されているのは、日本の中でも特に京都における教育水準が高いことをアピールし、日本が文明国であることを見せる意図があったと考えられる。地図は、薄い和紙の両面を使い鮮明に印刷されてある。

現在、日本の寺社仏閣を英語で観光案内する際に、慣例的に神社は‘Shinto shrine’、仏教寺院は‘Buddhist temple’、また省略して shrine（神社）、temple（寺）と言う事が多い。しかし『覚馬名所案内』では、寺社について原文は全て‘temple’で統一され、‘shrine’は現れない。工藤泰子（2009）によると、1895（明治 28）年に開催された第 4 回内国勧業博覧会のために新たに作られたガイドブック *The Official Guide-Book to Kyoto and the Allied Prefectures* の特色として、「神社」‘Temple’、「寺院」‘Shrine’として扱われるが、その逆の場合もあり、「英語表記の齟齬（44）」が見られるとする。つまり、1873 年の『覚馬名所案内』には‘shrine’は表記として存在しなかったが、1895 年には寺社を‘temple’、‘shrine’で区別し始めた。「外国人観光案内のための英語表現」の最初期からの進歩が確認された。

年について原文では‘after the Christian era’と記述され、すべて西暦で示されている。明治改暦では、明治 5 年「十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト（京都府「改暦ノ布告」: 1872 年 11 月 9 日）」定めた。外国人が理解しやすいよう、いちはやく西暦を使用したと思われる。

明治初期の京都の起点は三条大橋であり、三条大橋からの距離は丁（町）や里という江戸時代における日本の長さの単位に基づいている。しかし本文内の説明でサイズを表すために使われた長さの単位は、外国人観光客にわかりやすいようにフィート、インチ等が使われている。

『覚馬名所案内』が参考にした文献について小嶋正亮（2019）は、「宇治本英文京都案内に貼付された挿絵の解説は、『都名所図会』に全面的に依拠していることがうかがえる（14）」とする。『覚馬名所案内』の英文の内容において複数の文献を調べたところ、1780 年初版の秋里籬島作『都名所図会』の文章の内容に、数ヵ所似通った名所の説明はあった。『都名所図会』は「初刊以来版を重ぬること幾回か、流布極めて広く伝本また頗る多い（新修京都叢書刊行会『京都叢書』第 6 巻、1967：解題 1）」とあるように、長く版を重ね人々の手元に残った京都名所案内であり、『覚馬名所案内』の英文内容に影響を与えた可能性がある。しかし確実に英文内容の文献である、とする決め手に欠けるので今後も調査を続ける。

2－5－2.『宇治本』と『同志社本』の比較

明治 6 年発行に近いとされる『宇治本』と、鉄道が開通した明治 10 年頃発行かと推測される『同志社本』、それぞれの本文の内容を注意深く照らし合わせ、違いや年月の変化の比較を行った（図版 2.）。その結果以下のような変更・改良・加筆などが明らかになった。

図版 2.の 1 は、新旧の銅版画の違いが、英文に影響したことを明確にした。『宇治本』では、江戸時代の流れを引き継ぐと思われる銅版画（図版 3.）とそのページの英文は「この彫刻に見られるように（筆者訳）」と書かれる。それが『同志社本』では、写真によく似た銅版画（図版 4.）（『同志社本』は、銅版上部のタイトルが切られているため、『歴彩館本』を使用）に変更されたため、英文に「この写真に見られるように（筆者訳）」とわざわざ訂正された。

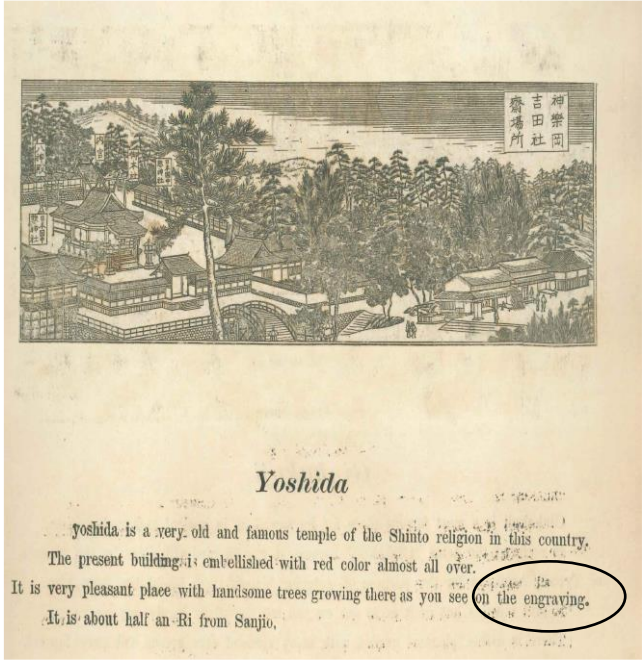
図版 2. の 2 は、清水寺における拝観客の増加が書かれている。『宇治本』では、「ですからこの場所は少なくとも 20 人～30 人の男女、特に女性の参拝者が来ない日は一日たりともありません。（筆者訳）」とあるが、『同志社本』では「100 人から 200 人の男女、特に女性の参拝者（筆者訳）」と変更されている。明治 6 年の時点からわずか数年程度で参拝者数が大きく増加した事を表している。

図版 2.　『宇治本』と『同志社本』の内容の違い（調査、下線とも筆者）

No	違い	頁、名所	宇治本	同志社本
1	内容	11.吉田	as you see on the engraving	as you see on the photograph
2		16.清水寺	Therefore there is no day where this place is not visited at least twenty or thirty men or women, especially women.	Therefore there is no day where this place is not visited at least one or two hundreds men or women, especially women.
3	称号	7.若王子	Goshirakawa Tei	Goshirakawa Tenno
4		23.泉涌寺	Montokutei	Montoku Tenno
5		27. 西本願寺	Kameyamain	Kameyama Tenno
6		30. 石清水八幡宮	Sheiwa tei	Sheiwa Tenno
7		35.仁和寺	Kokotenno	Koko Tenno
8		35.仁和寺	mia	miya
9		41.下鴨	Temmutenno	Temmu Tenno
10		47.比叡山	Kammu Tei	Kammu Tenno
11		37.金閣寺	by Ashikaga	by the Shogun Ashikaga
12	綴り	2.三条	brigde / with	bridge / whit
13		19.大仏	DAIBTS	DAIBUTSU
14		31. 長岡天満宮	TENMANGWU	NAGAOKA
15		32. 梅宮大社	MUMENOMIA	MUMENOMIYA
16	加筆	17. 清水の陶器	The plates teapots and cups made there are very celebrated for Their splendor.	The plates teapots and cups made there are very celebrated for their splendor, and some of

				them cost very highly value.
17		19.大仏	It was constructed of wood and varnished.	It was constructed of wood and varnished very richly.
18		21. 三十三間堂	RENGEHOIN	RENGEHOIN(SANJIUSANGENDO)
19		30. 石清水八幡宮	IWASHIMIZU	IWASHIMIZU(YAWATA)
20		35.仁和寺	NINNAJI	NINNAJI(OMURO)
21		43.大津、堅田、比良	OTSU	OTSU KATATA AND HIRA
22		46.瀬田、粟津、石山	SHETA	SHETA AWATSU AND ISHIYAMA
23	文法	33.嵐山	look upon	looking upon
24	簡潔	27. 西本願寺	building named Huinkaku	building.
25		29.東寺	high tower (Sagodo)	high tower (Towu)
26		頁の順番	1.三条 2.御所 3.京都の街	1.京都の街 2.三条 3.御所
27		地図	鉄道路線と京都駅無	鉄道路線と京都駅有
28	銅版画		人物（洋装の男女含む）のある風景、日本語説明有	人物はほとんど無し、風景画に近い
		名所の頁に銅版画の貼付のないもの	京都の街（地図の貼付場所）、御所、八坂塔、清水の陶器、大仏、蓮華王院、本圀寺、石清水	京都の街（地図の貼付場所）

図版 3.　『宇治本』　p. 11「吉田」（筆者による楕円枠内に‘engraving’を示す。）

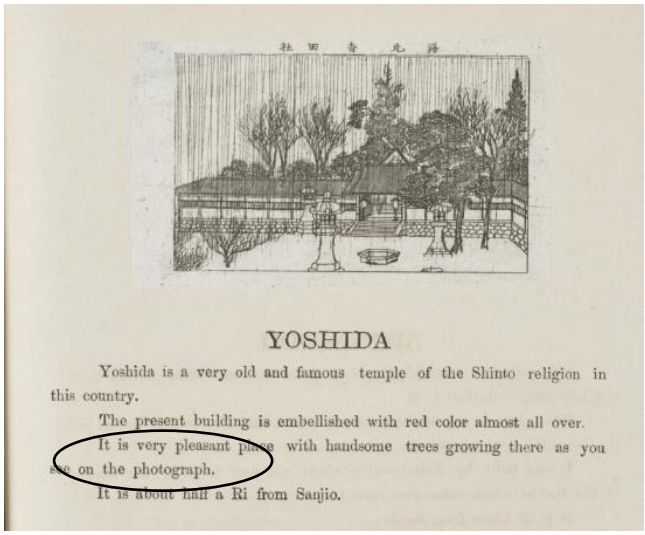


Yoshida

Yoshida is a very old and famous temple of the Shinto religion in this country.
The present building is embellished with red color almost all over.
It is very pleasant place with handsome trees growing there as you see on the engraving.
It is about half an Ri from Sanjio.

画像提供：宇治市歴史資料館。

図版 4.　『歴彩館本』 p. 11「吉田」（筆者による楕円枠内に‘photograph’を示す。）



YOSHIDA

Yoshida is a very old and famous temple of the Shinto religion in this country.
The present building is embellished with red color almost all over.
It is very pleasant place with handsome trees growing there as you see on the photograph.
It is about half a Ri from Sanjio.

資料出所：京都府立京都学・歴彩館 京の記憶アーカイブ。

図版 2. の 3～10 の称号については、特に天皇の呼び方を‘tei’から‘Tenno’に統一して、外国人にわかりやすくした可能性が高い。「外国人観光案内のための英語表現」の視点にお

いては、「天皇」という英語には訳しきれない性質を持つ単語の翻訳では最も初期の段階ではないかと思われ、大変興味深い。24、25 もまた、外国人が理解しやすいよう簡潔にされた。その他表内のものを含めて多数の綴り・文法・地名の訂正・説明のための加筆があり、その中でも 16 の『同志社本』の加筆された文章は「大変有名で、高品質のものは高価ですが値打ちがあります（筆者訳）」としている。17 の加筆された文章は「大仏は木造でとても立派に漆で塗られています（筆者訳）」と特色を加えている。

2－6. まとめ

本章では、明治初期の京都において発行された『覚馬名所案内』の誕生と歴史について、その時代的背景、制作の目的、改版の歴史、内容の特色や新旧の比較について明らかにする事を試みた。

今回の研究により『覚馬名所案内』が単なるその場限りの京都観光案内冊子ではなく、好評を得たことにより、何回も増刷と改版を行い、改良された足跡が明らかになった。それはまさしく、例えば先述した KG の序文にみられた「ガイドブック」の使命に通ずるものであった。

『覚馬名所案内』は世界に向けて日本が文明国であり、京都がその中でも優れた都市である事を知らしめるための 1 つの具現化であった。

銅版画においては、はじめは幕末の流れを受け継ぐスタイルであったが、京都博覧会で「賜進歩賞牌（小嶋正亮、2019：12）」の作品に切り替えた。「写真」のような銅版画イラストを得たことは『同志社本』での ‘photograph’という語句で表現され、新技術であった写真に代わるものとして使われた。当時は活版印刷された紙ごとに、絵を貼りつける必要があったのである。

内容については、古い情報から新情報に変更を行った。例えば清水寺参拝者数の増加である。具体的に挙げられた数字の比較によって、京都博覧会開催により数年のうちに、実際に京都が観光都市として進歩したことが明らかになった。

英文においては、文法や使用される言葉にところどころ理解が難しい部分があった。これは、母国語が英語である人に英文校正を依頼せず、英語を学んだ日本人だけで文章を書きあげた事を示す。「外国人観光案内のための英語表現」については最も初期の段階が確認された。

『覚馬名所案内』は京都に住む誰もが名所と認める文化財を一覧にし、西洋人主体のガ

イドブックに先駆けて、京都を自らの手で世界に紹介した貴重な資料である。今後も『覚馬名所案内』の研究を通して、山本覚馬らが蒔いた「タネ」が、その後の京都国際観光、並びにガイドブックに及ぼした影響について研究を深める。

第 3 章　出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）の詳細な制作背景

3－1.　はじめに

丹羽圭介は『覚馬名所案内』の制作者・出版者である。『覚馬名所案内』は、当時最新式であったプロシア製印刷機を使い、絵のように美しい銅版画を貼り、英文で京都名所を紹介するという日本の文明開化を象徴する、京都博覧会の公式「外国人おもてなしツール」であった。そして、京都博覧会会場において「丹羽氏自らの手で印刷して売ったのが非常に好評を博した（京都府教育会、1940：390）」とあるように、丹羽の『覚馬名所案内』への熱意が見られるものである。

筆者は、第 2 章において、『覚馬名所案内』の制作背景と改訂について述べたが、その後丹羽に重点を置き、制作背景の調査を継続した。『覚馬名所案内』を世に出すためには、丹羽と少人数の制作者たちの他にも、何らかの協力体制があったと考えた。山本覚馬の実際の関与、他の指導者の有無、発行元、名所選定、日本文、英語訳の作成、実際の活版印刷の様子など、多岐にわたって調査の余地がある。本調査において、京都府立京都学・歴彩館所蔵の丹羽圭介講演録（1896 か）としてまとめられた、「博覧会の沿革丹羽圭介講演」「京都と博覧会丹羽圭介氏談」の 2 つの記録を得た。また、丹羽の曾孫である丹羽章氏に面談の機会をいただき、丹羽章氏が丹羽の思い出をまとめた、『三橋写真』（2010）、並びに丹羽が受けたインタビュー（丸尾長顕著（1967）『イヴの喫煙室』「圭介翁聞き書」）、A Directory of Kyoto and Its Traders (1913)（以下ディレクトリ）　の写しの提供を受けた。

これらの新出史料を検討し、丹羽の言葉による『覚馬名所案内』の制作背景から得た新情報を確認した。また 10 代で『覚馬名所案内』制作を成し遂げた、丹羽の幼少期から『覚馬名所案内』制作時までの人物像を、丹羽の視点から掘り下げることは興味深く、本稿の研究には必要であろう。

調査の結果、『覚馬名所案内』における山本の関わりは、山本の京都国際化戦略のネットワークである、ルドルフ・レーマン（Rudolf Lehmann, 1842－1914）、レオン・ヂュリー（Léon Dury、1822－1891）、日本側からは妹山本八重（1845－1932）を通して、強く示唆された。特に今回の調査において、レオン・ヂュリーの名が制作の指導者として新出した。また、新英学校及女紅場の女子生徒たちが、活版印刷の作業に従事したことも新情報である。さらに若き日の丹羽が、師匠山本覚馬の薫陶を受け良く応えて、この制作から発行までのプロジェクトをやり遂げた様子が浮き彫りになった。山本の指導者としての姿は丹羽のその

後の活躍に現れた、と考察する。

本稿での丹羽の年齢は、数え年とした。文献は一部現代仮名遣いとした。

3－2. 先行文献

『覚馬名所案内』の制作についての先行文献は、『覚馬伝』の記述を基本としているものが多い。また先行文献は、制作の改版、体裁、時代背景、銅版画、英文、内容など多岐にわたって研究されている。

銅版画の違いを含む『覚馬名所案内』に改版については、小嶋正亮（2019）の論考に詳しい。また本稿第 3 章には、改版における文章内の内容の違いと情報更新がある。

『覚馬名所案内』の母体であった京都博覧会の時代背景については、工藤泰子（2008）の論考に詳しい。本井康博（1996）は、アメリカ人たちが実際に京都博覧会を観覧した様子や感想を含めて、京都博覧会とアメリカン・ボード宣教師と関わりについて論じている。

体裁について、長谷川奨悟（2012）は、『覚馬名所案内』が幕末の京都スタイルの名所記と寸法において一線を画している（28）と述べ、森登（2013）は、『覚馬名所案内』が「当時としては非常に洒落た洋装本である（32）」と述べた。

京都博覧会の外国人対応については、京都府教育会（1940）に詳しい。日本政府からの通訳の派遣[1]があり、京都府においても、通訳官を遠隔地からも招いた[2]。また当時、欧学舎で言語を学んでいる学生は、外国人対応のため欠席しても差し支えない、という指令がでるほどで「博覧会中欧学舎の生徒は見物のため入京する西洋人の警護、通訳などの手伝いをしたものである（京都府教育会、1940：387）」という様子であった。

名所の選定と内容について、小嶋（2019）に日本側による文献の指摘がある。また、本稿第 5 章には、明治初期に来日した西洋人は、鎖国中・鎖国以前に京都を訪れた西洋人の古い旅行記から、京都について共通の「観るべき」名所があり、それが『覚馬名所案内』にも影響した可能性を指摘した。

丹羽については、『慶應義塾出身名流列伝』（1909）にプロフィールがある。

---

1 「常時外国事務に敏腕の聞こえ高かった楠本正隆氏に対し京都へ出張をめいじている（大槻喬、1937：29）」。

2 「長崎、足羽（現福井県の一部）、豊岡（現兵庫県の一部）、宇和島（現愛媛県の一部）、広島の諸県より通訳官 8 名を招いて 3 会場へ分置し、大阪府よりは井上典事、山田権少属、川原四等訳官、兵庫県より芦原権大属らが出張し、交代して外国人の応対に当たった。尚兵庫県では京都府の依頼に応じ左の訳官が 10 日交代を以て出張した（大槻喬、1937：29）」、という対応であった。

3－3.　新出史料の個々の解析

『覚馬名所案内』についての研究の多くは、『覚馬伝』（1976、原著 1928 年）を重要な基礎史料としている。しかし、原著者青山霞村が用いた参考文献が不明であるため、研究には慎重さが必要である。

前述した新出史料の『覚馬名所案内』関係部分を抜き出し精査したところ、結果として、新情報や詳しい制作の状況が当事者の丹羽の言葉から明らかになった。このことにより、研究の信用性は高まったと思われる。

まず 3 つの重要な文献内の、該当部分を引用し、特に重要と思われる箇所にアルファベットと下線（全て筆者による）を引き、説明と見解を加える。

3－3－1　「博覧会の沿革」丹羽圭介講演

この講演記録は一般的な原稿用紙に書かれている。

> 今ここにガイドブックがありますから一つ御覧ください。これは私がまあ活版をさせて拵えたのです。初めて京都で活版の機械が出て来たりで、輪転機が来たので、ここに [a.] ドイツ人の工学教師リントツレフ・レーマンによって端なくもこういうことを教えられて、その方針によって到底組立てが出来たのですが、ここにこれは博覧会がまあ単に・・？・・（ママ）博覧会が公に出版した何もかもが書いてある、こういうもので要するにこの明治 6 年は京都は大体的なやり方で、まあいわば御所は東京の方に御遷りになったけれども、これから遠く広く顧客を京都に集めて繁栄をさせようというのでございます。こういうのが京都の第一方策であった（24－25 ページ）。

下線 a.の部分であるが、「リントツレフ」については、講演の際の書記が、丹羽の言葉を聞いたまま書いたと思われる。この文章は、ルドルフ・レーマンが、印刷技術の最先端である活版印刷機を使う提案、またその機械を使用した全く新しい書籍の制作手段の助言、そして印刷機の組立も実際に行った、とも受け取れる文章である。

3－3－2　「京都と博覧会　丹羽圭介氏談」

この談話の書き取りは、大礼記録原稿用紙に書かれ、綴じられたものである。

その他銅版で京名所及博覧会の地図や英文の京都案内記（ガイドブック）を編纂出版したりして、それはそれは宣伝に努めたものであった。この出版に際しては、[b.]府立集書院（今の図書館）用として、独乙から活字や印刷機械を購入し、[c.]佛人ヂュリー氏の指導の下に、私が主任となって、[d.]山本覚馬氏の娘で、今の新島未亡人や私の妹など、英語女学校の生徒達が主として活字拾いの職工として働いた。これが明治 6 年（1873）で、京都に於いて外国文を活字に印刷出版した、そもそもの始まりで、[e.]出版物は全て山本覚馬の名を以て出した。

下線 b.にあるように、出版、発行元は府立集書院（明治 5 年 9 月竣工）（京都市、1975：275）であった。「明治 5 年正月に府ですでに話があり、福沢諭吉氏が京都の学事視察をした時、『書籍縦覧株式会社開設』を勧め、府でいよいよこれを実現させる気運になった時、村上勘兵衛（青山、1976：96）」ら他 3 名が自ら運営したいと名乗り出た。集書院は実際に印刷の現場であったと思われるが、確実に裏付ける文献は現在の所見当たらない。

下線 c.には、フランス人教師のレオン・ヂュリーが指導した、という重要な新情報があった。ヂュリーに関しては、本章 3－5－2 に後述する。

下線 d.の、新島八重と丹羽の妹など、英語女学校の生徒達が主として活字拾いの職工として働いた、とする記述であるが、「八重と丹羽の妹」については青山霞村（1976）に良く知られていた。しかし、何を参考文献にしたかが不明であった。

この丹羽の言葉により、「京都と博覧会　丹羽圭介氏談」は、『覚馬伝』の参考文献であったと推定される。それを裏付ける 1 例として、山本八重を山本覚馬の娘、と青山（1976：99）は誤ったまま書いている。「京都と博覧会　丹羽圭介氏談」では、「娘」のところを後に、鉛筆で「妹」に訂正した様子がある（図版 5）。

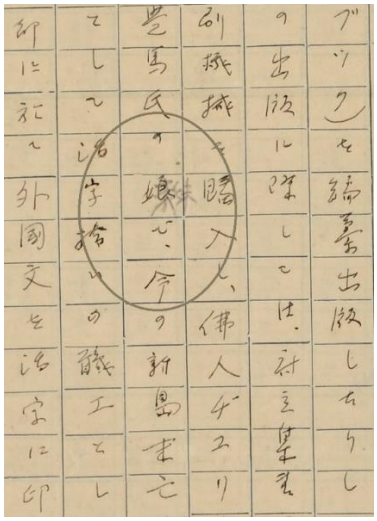
『覚馬名所案内』の制作には、新英学校及女紅場の女子生徒たちが職工として、実際に貢献した、という新情報が本調査でもたらされた。

山本八重は、明治 5 年 4 月に開かれた新英学校及女紅場の「権舎長兼教導試補（京都府教育会、1940：349）」であった。

丹羽圭介の妹については、「名前は英（ヒラ）、圭介の 3 年年下の 1859（安政 6）年生ま

れで、仲の良い兄妹であった。ヒラは平井権七[3]に嫁ぎ、平井はのちにスポンサーとして、海外で開催された万国博覧会のための渡航資金援助など、丹羽を経済面から支えた（千代間、2020 年 7 月 11 日）」。

図版 5.「京都と博覧会　丹羽圭介氏談」原稿の一部（○は筆者による）



史料出所：京都府立京都学・歴彩館。

女紅場の生徒達は、「華族は勿論士族、医者、学者、儒者等の子女が主で、平民の女子は余り居らなかった（京都府教育会、1940：348）」という生活環境にあり、職工として初めての作業に全力で取り組んだ様子がわかる。

下線 e.では、山本がこの全く初めてのガイドブック制作・発行事業について、全責任を負う人物であったことがわかる。

3－3－3　丸尾長顕著（1967）『イヴの喫煙室』「圭介翁聞き書」

丸尾は 1938（昭和 13）年 8 月 10 日に、京都の丹羽圭介宅を訪問し、聞き取りを行った。丸尾は、その時の丹羽の印象を「翁はそのとき、すでに 84 才で、美しい白髪、見事な白いひげが長く垂れ、温和だが、厳とした偉丈夫だった」と述べている。

---

[3] 英の夫、平井権七は 6 代目と思われる。「平井家は亀甲屋の屋号を持ち、江戸時代からのポンプの製造販売を業とし、明治維新までは御所および諸藩の御用商人も勤む。維新後は金銭貸付業も兼ね、多額納税者として明治 37 年には府下第 3 位を占む（京都商工会議所、1985：545）」とある。

外人も来るというので、英文の案内書（ガイド・ブック）を印刷することになりました。[f.]これが日本で印刷された最初のガイド・ブックとなったのです。CELEBRATED PALACES (sic.) IN KYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES と、いうものです。銅版画を貼った、なかなか苦心の案内書で、私が英文を書きました。
ドイツ語学校の[g.]リュドルフ・レーマンの弟が機械技師でしたので、当時、集書院（後の図書館）にあった輪転機を組立ててくれ、英文活字を[h.]私や、私の師匠の山本覚馬の妹（後の同志社の新島襄夫人となる）が汗まみれになって文選したり植字したものです。この日本最初の英文ガイド・ブックは[i.]三度も刷り直したものです（253－254 ページ）。

下線 f.の CELEBRATED PALACES （原文ママ） IN KYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES については、丹羽は自分の蔵書を丸尾に見せたと思われる。『京都府教育史・上』389 ページには「山本覚馬・丹羽圭介の京都案内（丹羽圭介氏蔵）」の表紙写真があり、‘Kyoto[4]’の他に、(&) の後に (,) がないだけで、丸尾の書き写したタイトルと同じである。

下線 g.には「リュドルフ・レーマンの弟」とあるが、正しくはルドルフは弟で、兄はカール・レーマン（Carl Lehmann）である。また「リュドルフ」は、青山の原著での言い方であり、『覚馬伝』では、ルドルフと改められていることから、この部分は丸尾が、青山の原著（1928 年）に倣って書いたと思われる。

下線 h.の部分では、丹羽自身も印刷工員として働いた、という新情報である。

下線 i.の「三度刷り直した」点も新情報であるが、この言及が、『覚馬名所案内』の誕生までに、3 度刷り直して完成したのか、それとも 3 回増刷を行ったのかは、不明である。

3－4. 結果：丹羽の視点による「『覚馬名所案内』の制作背景」新情報

丹羽の言葉である 3.で述べた新出史料の中から、得た情報をまとめると以下の通りである。

① ガイドブックを制作するにあたり、ルドルフ・レーマンは、すでに京都府が所有する印刷輪転機を使用し、画期的な書籍を制作することを助言した。

② 制作はフランス人のレオン・ヂュリーが指導し、丹羽が主任となり、印刷輪転機の文選・植字は、丹羽自身、山本八重、丹羽英、並びに新英学校及女紅場の生徒達が職工

[4] 丹羽圭介氏蔵は ‘Kiyoto’ である。丸尾は現代語に書きなおしたと思われる。

となり、『覚馬名所案内』を制作した。

③　『覚馬名所案内』の最も初期のタイトルは、CELEBRATED PLACES IN KIYOTO &, THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS である。銅版画の貼り付けも行ったので大変苦労した。完成までに 3 度刷り直した。

④　出版については山本覚馬が著者として、全ての責任を負った。

⑤　天皇遷都後の京都復興策は顧客を内外から集め産業を繁栄させよう、とする京都府の方針があった。

3－5.　制作にかかわった京都府の雇い外国人たち

先述の『覚馬名所案内』制作に貢献した西洋人たち（ルドルフ・レーマン、レオン・ヂュリー）はどちらも、山本覚馬の友人で、京都の外国語教育と国際的な商業発展のためのブレーンでもあった。また京都の教育界にとって、学生たちの面倒見も良く京都府からも信頼され、重要な働きをした。

3－5－1.　ルドルフ・レーマン

前述したように、カールとルドルフのレーマン兄弟については、兄・弟の記述に齟齬がみられるので、注意が必要である。また「ハルトマン・レーマン」は「レーマン・ハルトマン商会（Lehmann, Hartmann & Co.）」（重久篤太郎、1968：139）である。

レーマン兄弟、またレーマン兄弟と山本覚馬のつながりであるが、竹内力雄（2019）、重久篤太郎（1968）に詳しい。「レーマン・ハルトマン商会は、貿易商社ではあったが、西洋の新知識の移植を計画した府藩県のお雇い外国人の供給源の役割もつとめて（同書、141）」いた。

ルドルフは、1869 年 27 才で来日し、レーマン・ハルトマン商会で働いた。ルドルフは兄カール（Carl Wilhelm Heinrich Lehmann、1831－1874）と親しかった山本覚馬の仲介により、新設の外国学校の雇い教師として、1870（明治 3）年京都に移った。ルドルフは英語も話し、最初の半年ほどは「英語、ドイツ語両語を教えた（同書、140）」。京都府教育会（1940）によると、ルドルフは、京都博覧会を授業の一環として「ドイツ学校の生徒を殆ど毎日連れて（同書、387）」行き、文明開化の製品を実際に見せて、学生たちの教育に役立てた。

3－5－2.　レオン・ヂュリー

レオン・ヂュリーについての詳細は宮本エイ子（1986）、重久篤太郎（1968）にある。ヂュリーはフランス語のほかには療病院にてラテン語を教えている。「おそらく彼は京都でラテン語を講義した最初の人であった（重久、1968：131）」。英語を解したかどうか、調査中である。「氏は生徒を公私にわたりよく指導し，そのため入学するものが相ついだ（重野安繹、1899）。明治 10 年に帰国の際には「京都府では十余人を選抜しフランスへ随行させ，染色陶器製糸を学ばせることになり，氏にその監督を委託した。留学生は氏の尽力により大成して帰国した（同書）」とあるように、学生からも慕われ、京都府からも信頼された。

3－6.　丹羽圭介の幼少から『覚馬名所案内』を制作した頃まで

丹羽の 20 才頃までについては、本章 3－3－2 で述べた『慶応義塾出身名流列伝』（1909）が主な情報源である。本節では、丹羽の口述、家族に伝わる話から、丹羽の幼少から『覚馬名所案内』制作の頃までをまとめる。

丹羽は 1856（安政 3）年 8 月 8 日[5]、山城国葛野郡壬生村（現在の京都市中京区壬生）に生まれた。父の名は桂芳、母の名は千代である。丹羽は 3 人目の子供であったが、長男長女は生まれてすぐに亡くなり、丹羽家 14 代目の「戸籍上長男（丹羽章、2010：3）」であった。丹羽は「壬生の寺侍の子（丸尾、1967：245）」であったが、父桂芳は「これからは商売だ」、として寺侍は返納（千代間、2020 年 7 月 11 日）した。丹羽家は、新撰組本陣の前にあった、壬生坊城通綾小路の八木喜間太[6]の親戚であった（丸尾、1967、246）。

丹羽は、幕末の騒々しい京都で幼少期を過ごした。蛤御門の変（西暦 1864 年 8 月 20 日、丹羽 9 才）では、御所が戦闘地となり、京都の町の大半が焼失した（同書、247）。丹羽も家族とともに避難した。その際、大小の刀を差してもらったが、重く刀が地面を引きずったので困った（同書、274）、とその時の思い出を語った。

圭介の受けた教育について、「幼少の頃は、庄田平五郎先生に漢字（ママ）を学び、更に同村の儒学者山本秀夫に教わり、論語を暗誦した（丹羽章、2010：3）」。庄田平五郎については、時代が前後するが似た苗字の人物がいる。『京都府教育史・上』によると、明治 7 年 2 月に京都に慶応義塾の分局が開かれ、「大分県人で長崎開成学校の出身である荘田平五郎が四月から授業を始めた（1940：551）」とある。山本秀夫については、『山本亡羊先生小伝』

---

[5] 和暦であるとすると、西暦では 1856 年 9 月 6 日生まれである。
[6] 八木家 10 代目当主である。

によると、幕末に有名な本草学者として知られた山本亡羊[7]の子で、山本章夫の兄である。山本章夫は、京都博覧会においても、品評会の品評方として知られている（大槻、1937：64）[8]。

丹羽は自身の西洋人から受けた語学習得について、以下のように述べている。

> 明治 5 年に府立の語学校ができましたが、高田坊でフランス語はレオン・ジュリー氏、いまの京都ホテルのところでドイツ語をリュドルフ・レーマン氏が教えていました。英語は木屋町の角倉邸で米人ボーレン氏が主として教えていたが、私も一度この門にはいりましたが、程度が低く、私は府立牧牛場で米人ウイード氏について語学と農学を研究しました。これが酪農研究所のはじまりです（丸尾、1967：255）。

この言葉から、丹羽は自身の語学能力の向上のために、自分に適したネイティブ・スピーカーの教師を求めて行動したことがわかる。

丹羽が師事した「ウイード氏」とは、米国人ウイード（James Austin Weed[9]）である。ウイードと「府立牧牛場」については、拝師暢彦（2005）に詳しい。拝師によると、ウイード[10]の来日もおそらく、レーマン・ハルトマン商会の仲介があった。

丹羽はウィーン万国博覧会（開催期間は 1873 年 5 月 1 日から 10 月 31 日）について、「佐野常民大使が委員長で、私（圭介翁）も見学に行き（丸尾、1967：256）」その際、精巧な東寺の塔の模型を出品した（同書、257）と述べている。これらの発言については、調査中[11]である。続いて丹羽は、「当時、私は東京へ旅行しましたが、（中略）脇差を持ってゆけと

---

7 山本亡羊は、「文政 9 年ドイツの名医本草学者シイボルト氏我国へ漫遊し長崎より京都に来り河原町二条阿蘭陀屋敷に逗留中廈先生と往復し我国と欧州諸国の物産薬品を相互に比較研究し（中島民之介、1909：19）」交流を深めた研究者であった。

8 品評員の氏名の記録が整う、1875（明治 8）年の第 4 回京都博覧会から、品評方として名前がある。

9拝師によると、「京都府『外務省記録（明治 9 年 11 月～10 年 4 月）』よりウィードは、1827 年に米国で生まれたと考えられる（1835 年生まれの説もある）」とのことである。『資料御雇外国人』の「ウィード」には「①6 年当時 39 歳（但し 7 年当時 46 歳との届もある）」とある。

10 ウィードは、明治 6 年から年ごとに契約を更新し、12 年 4 月末日まで 6 年間、継続・雇用された（拝師、2005）。

11 坂本久子（2008）の研究に、ウィーン万国博覧会に公的に派遣された人員の名簿があるが、丹羽の名前はない。私的な渡航については調査中である。参考までに、「澳国博覧会事務局留守人員表（坂本久子、2008：3）」の中には、丹羽の師である、山本秀夫、山本章夫の名前がある。

いわれたが、重くて包んでゆきました（同書、257）」と述べた。この時の旅行についての詳細は、具体的にはわかっていない。

丹羽は同時期、京都において小野組転籍事件に関与した。『覚馬伝』によると、その該当部分は、1873（明治 6）年 5 月～8 月までの間にあり、「20 才未満の白面の書生丹羽圭介を知事代理として裁判所へやって申し渡しを受けさせた（138）」ことである。小野組転籍事件は、1873（明治 6）年 8 月に、山本が「京都府参事槇村正直の東京拘禁に関してその釈放のため、妹八重に付き添われて上京、（12 月まで滞在、奏功する）（住谷悦治校閲、1976：405）」したことが知られている。

1874（明治 7）年、18 才の丹羽は東京の慶應義塾に入学するため、「母親より金時計を持たされ、単身、徒歩で（千代間、2020 年 7 月 11 日）」上京した。「肺病を患って東京より戻った（同書）」との情報もあるが、詳しくはわからない。『京都府教育史・上』によると、京都慶應義塾は明治 7 年 2 月に授業が始まり、その年の 9 月に東京本塾に引き上げることになった。慶應義塾は「同志社設立の 1 年前であり、新式私立学校の嚆矢と見てよい（京都府教育会、1940：551）」とあるように、最も早い新式私立学校であった。生徒は「初め 7 人あったが、段々減って丹羽圭介と青地某の 2 人になった（同書、551）」。丹羽は明治 10 年に慶應義塾を卒業した。

丹羽は、山本が「明治 13 年 3 月、京都府会が開かれて初代議長に選ばれました。そのときは盲目のうえに、腰が立たず、私（圭介翁）が背負って壇上に運ぶという始末です（丸尾、1967：255－256）」という風に、慶應義塾卒業後京都に戻り、山本を支えるべく府議会の書記長として補佐した（三田商業研究会編、1909：150）。

3－7. まとめ

本稿では、制作・出版チーフを務めた丹羽の言葉と視点による新情報から、詳細な『覚馬名所案内』の制作背景への理解を深めようと試みた。結果を考察すると、著者すなわち責任者である山本覚馬の存在が大きく浮かび上がった。今回の調査において、山本はガイドブックの発案者のみならず、実際に彼のネットワークを十分に機能させ、迅速に『覚馬名所案内』が誕生するよう、より深く監督、指揮を行ったと考えたい。それは以下の 2 つの理由による。

第 1 には、ルドルフ・レーマン、レオン・ヂュリーという、山本の京都国際化戦略ブレーンによる、深い関与が確認されたことである。山本は、京都博覧会の外国人参観者もて

なしの手段について彼らと相談し、日本初の英文ガイドブックを作ることを思いついた可能性がある。活版印刷機は、特別な目的なく集書院で梱包されたままであったが、レーマンの進言により、京都の文明開化を見せつけるために、従来の木版でなく当時最先端の活版印刷機を使用するという、画期的なアイデアを山本は採用して実行に移した。山本はレーマンとヂュリーに、丹羽の助けになってくれるよう依頼していた可能性もある。丹羽は印刷機の使用方法などについて、レーマンから実際に助言を受けたであろうし、ヂュリーは、丹羽から「指導を受けた」と述べられるほど、丹羽たちになんらかの指導や助言を行った可能性は高いといえる。

第 2 に、活字の文選・植字・解版についてである。山本が妹の山本八重に相談し、同時に丹羽も妹の丹羽英に相談したであろう。八重は、積極的に行動を起こして、自ら丹羽英と女紅場の生徒を引率し、印刷作業に貢献したと思われる。

新英学校及女紅場は、山本の女子教育の具現化であった。山本が 1868 年に明治新政府に提出した『管見』の「女学」の項には、新しい国家の人材育成は急務であり、女性の「性質にかなう学問芸術や政治に関わる分野を選んで、教えるべきである。そのうえ、才能のすぐれた女性にはさらに学問をさせるべきである（大島中正他訳、2020：94）」と書かれている。この「性質にかなう学問芸術」とは、この場合何であろうか。『覚馬名所案内』制作においては、男子学生は屋外で、今日の学生国際通訳ボランティアの先駆けとして活動した。女子学生は、女紅場での針仕事の授業のように、屋内で印刷機と活字に向かい、全く初めて行う作業を根気強く行った、と考察することもできる。

『覚馬名所案内』初版発行後の銅版画を含む改版、鉄道の追補について、丹羽の関与の有無や状況は、今回の調査ではわからなかった。

さて、京都府の外国人対応について、丹羽は「巡査悉くポリス（博覧会の沿革、1896 か：23）」について語っている。「もし何か外国人が尋ねたいことがあったらどの人に聞く（中略）ポリスが悉く外国語を話せるはずはありそうなことではない、それで博覧会のどこそこの勧業まで連れて来てください」という、言葉のわからぬ時には、巡査はまず博覧会の通訳が駐在する事務室まで外国人を連れて行く、という京都博覧会の実際の対応システムの 1 つがわかった。

『覚馬名所案内』の英文については、本章 3－3－3 にあるように、丹羽自身が作成したと述べている。日本文・名所選択については、丹羽の視点からはわからなかったが、丹羽が『覚馬名所案内』の日本文作成を行った可能性について、調査中に気になる点があった。

それは、1873（明治 6）年以降山本章夫が一括管理した、山本読書室本家の伝来史料の中に、蘭書「ケンペル『日本誌』（1733）（松田清、2019：163）」が蔵書としてあったことである。推測の域を出ないが、丹羽は西洋人が訪れた京都名所を山本読書室での勉学において認識する機会があり、それが名所選定に影響した可能性はある。

『覚馬名所案内』刊行の終了について、本調査により、新たに集書院が『覚馬名所案内』の発行元であったことが判明したため、明治 15 年 2 月の集書院の閉鎖[12]に伴い、『覚馬名所案内』の刊行も終了した、と考える。

丹羽は、錚々たる研究者や教育者に師事し、京都府の御雇外国人教師たちとの深い異文化交流の機会に恵まれた。内外の博覧会との関係については、前述したように、山本秀夫、山本章夫は 1873 年のウィーン万国博覧会の事務局留守人員を務めた。福沢諭吉については、「博覧会という字が起こったのは、一番何によってかというと福沢諭吉先生が慶応年間に、西洋事情というものを拵えられた、拵えられたのではない寧ろ翻訳された（博覧会の沿革、1896 か：2）」と、丹羽は聴衆に向けて述べた。山本覚馬は「京都は日本最初の博覧会を開き、万国博覧会にも熱心に殊に当たったので、山本覚馬先生にもっとも知遇をうけた京都の丹羽圭介氏が後年政府から派遣されて万国博覧会の事務に当るに至った（青山、1976：119）」とあるように、若き日の丹羽を自分の近くに置いて指導し、強い師弟関係を築いた。それは幕末の騒乱の中、家族で市中を逃げ惑った丹羽の「京都が丸焼けになり（中略）京都の旧家では会津藩を根強く怨んでいる（丸尾、1967：250）」という感情を超越させるものであった。丹羽は山本の期待に応えて、『覚馬名所案内』を完成させ、同じく丹羽英も、自分の師である八重に応えて、自分に出来ることを一所懸命行った。

丹羽のその後の活躍は、多岐にわたる[13]。丹羽はインタビューの中で、若い頃の帯刀の思い出を 2 度も述べたように、侍であったプライドも持ち続けながら、国際人としての教養と、コミュニケーション・ツールである英語を流暢に使いこなし、人的ネットワークを強固にして、「京都美術工芸界の官民学（並木誠士他（編）、2017：240）」を繋いだ人物であった。

---

[12] 京都市（1975）『京都市の歴史 8』学芸書林、275 ページ。

[13] 例えば、並木誠士他編（2017）『京都近代美術工芸のネットワーク』思文閣出版、に詳しい。

第 4 章　[資料翻訳] W. E. L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』 (1880) の京都記述部分

解題

本資料翻訳は、TG[1]の序文、京都（奈良を含む）、琵琶湖の記述部分のみを英語から日本語に訳したものである。TG は明治維新後初の英国人による日本で出版された日本観光ガイドブックである。ページ数は広告を除き 92 ページあり、寸法は縦 17.3×横 11.3cm と、旅行中に持ち運びしやすいサイズのガイドブックである。関西方面では大阪が 1 ページ余り、琵琶湖が 1 ページ弱、奈良を含む京都が 14 ページ余りにわたり、大きく取り上げられた。

明治維新後の京都国際観光の始まりは、1872（明治 5）年の第 1 回京都博覧会であった。「実に本邦博覧会の嚆矢」[2]であった京都博覧会の第 2 回開催に間に合うように、『覚馬名所案内』は制作された。『覚馬名所案内』の制作背景と改訂については本稿第 2 章を参照されたい。TG は『覚馬名所案内』初版の 7 年後に刊行された日本ガイドブックである。

TG の編纂者 W. E. L. Keeling については明治期の旅行記、ガイドブック等に詳しい伊藤久子（2009）の論考にある。伊藤が示した『資料御雇外国人』の記録によると、氏名は Keeling, Wallace Edward Lloyd、国籍は英国、職種は教師、英学化学教師、英学教師等であった。「明治 6 年当時 25 歳（ユネスコ東アジア文化研究センター、1975：253－254）」の来日であった。1880（明治 13）年以降のキーリングの行方については書かれていない。TG は好評を博し改版増補を繰り返して、表題、編纂者、出版社を変えて KG となった。

TG の京都記述部分の魅力は、編纂者 Keeling が京都に好感をもち、京都の当時の様子を興味深く、西洋人の主観に沿って生き生きと描いたところである。実はこの特色は、TG が SN を元本とし、SN の該当部分を切り抜いて新たな出版物にしたことによるものであったため、本稿第 6 章で述べることとする。

国際観光の時代背景として、『覚馬名所案内』では ‘visitor’、TG のタイトルは ‘tourist’ とあるように、京都博覧会の「参観者、訪問者」から TG では「観光客」への変化が確認できる当時の国際観光の様子を知ることのできる重要な史料の 1 つである。

---

[1] Massachusetts Institute of Technology. (2008). Visualizing Cultures.ウェブサイトのアドレスは、https://visualizingcultures.mit.edu/gt_japan_places /tg_01.html （最終閲覧日 2022 年 2 月 24 日）である。

[2] 京都博覧協会（1903）「京都博覧会、京都博覧協会創立の概略」『京都博覧会沿革抜粋』。

この資料翻訳で内容を明らかにした後『覚馬名所案内』との比較考察を行い、『覚馬名所案内』を含む京都側から提示された既存の京都観光名所、また鎖国以前と鎖国中の西洋人観光の定番名所が西洋人観光客によってどのように取捨選択され、付加価値がついて新観光名所や観光行動が展開したのかについて、本稿第 5 章にて考察する。

TG 序文　（以下翻訳）

何が日本の見どころですか？どうすれば見られますか？どのような行き方が最良でしょうか？数日間の滞在なので、できる限り有意義に過ごしたいのです。

私は海外からお越しの方々から、日本旅行中の楽しみ方や賢い旅行の仕方について、多くの質問を受けます。このような質問に対して、すぐに役立つヒントをたくさん提供することが、この小さな本を編纂した私の慎ましい目的です。

『横浜案内』、『東京案内』、『京都案内』[3]という素晴らしいガイドブックがすでにあります。しかし都市別のガイドブックを何冊も抱えることの良さを、値段や便利さの面で考えると、小さくまとまった 1 冊の方が勝っていることは間違いありません。

この本は日本全国を全て紹介していません。もしすべてを書き込むと大量の情報になってしまいます。私は数日間しか旅行に時間を割けない方に、色々な名所を訪問する最良の方法を示したいと思います。

この本では、美しい名所や素晴らしい風景についての詳細な記述は避けました。というのはどこに行くべきか、何を観るべきかという価値ある情報を旅行者の方に伝えれば、他のガイドブックからの助け無しに素晴らしい自然や人工美 [enjoy natural and artificial splendor] を楽しむことができます。また時間が貴重な旅人のために、簡潔で良心的に書くことを心掛け、使いやすいようにしました。

この小さい[4]ガイドブックを旅行の友として皆様がより楽しい旅をされますように、というのが心からの著者の願いです。

---

[3] 『京都案内』について、本稿第 5 章（5－5－1）に述べる。

[4] 『覚馬名所案内』の序文にも、海外からの参観者の方に向けて、「この小さな本（this little work）（本稿第 1 章を参照）」であるガイドブックを持って、京都の名所をもらさずめぐり、土産話を持ち帰ってください、とある。『覚馬名所案内』においても、持ち運びやすいサイズと重量、見やすいコンパクトな本を目指した興味深い類似点があった。

東京、

1880 年 2 月。

京都 [Kioto] [5]

この街の寺社仏閣や宮殿は最も美しく、魅力に富んだ光景であふれています。京都の街は快適で心地よい雰囲気とこの国を旅行する楽しさが感じられます。京都は、行ってよかったと称賛される琵琶湖への小旅行ができる圏内にあります。西京［Saikio, (Western Capital)］と呼ばれるこの街は 793 年から帝が遷都し首都を東京に定めた 20 数年前の内乱の後まで首都でした。京都は山背国に位置し、多くの美しい風景に囲まれています。

京都の人口と重要性を示すための誇張された随分昔の統計［an exaggerated account of the importance and population of Kioto］では、京都には 100 万世帯と 200 万人の人口［over one million houses and two millions of inhabitants］があり、その中には、100 の神社［Shinto Temples］に奉職する 300 人の神主、仏教では 250 の寺に 15,000 人の仏教の僧侶、そして 7,500 人もの花柳界で働く女性［girls and women of pleasure］が含まれています[6]。

日本の歴史において、天子である天皇たちは、王位に就くごとに首都を変えました。しかし第 50 代天子［the Tenshi (Sons of Heaven) or Emperors］である桓武天皇［Kuwanmu Tenno, the 50th Tenshi］は大納言小黒麻呂と左大臣紀古佐美に山背の地を探索するよう命じました。天子は永続的に続く首都を設立しようとしており、それに相応しい場所が選ばれました。大納言らは宇太村を進言し、結果として宮殿はその地に建てられました。宮殿の城壁は民衆の家々を含み大変広範囲にめぐらされました。歴史上この宮殿だけでも 200 エーカー（約 809,371 ㎡[7]）以上を擁する大変広い敷地であったと言われています。1334 年後醍醐天皇によって御所[8]が建設され、1653 年豊太閤時代の後、御所の大部分を火事で焼失しました。京都は現在までに 11 回猛火にあい都市の大部分を失いました。最大の火事は 1846 年で、500

---

[5] 「京都」の綴りは『覚馬名所案内』の ‘Kiyoto’ と異なる。

[6] 『京都の歴史 8』によると「京都市統計書」の調査で明治 22 年（1889）にはじめてはっきりとした人口がわかり、戸数または世帯数 63,682、人口は 279,165 人であった（京都市、1971：16）。文中の誇張された統計については、SN 初版にあるため本稿第 6 章において述べる。

[7] 現在の京都市の面積は 827.8 ㎢である。宮城の広さとの関連は不明である。

[8] 現在の御所の位置と思われる。

エーカー[9]（約 2,023,428 ㎡）にも及ぶ範囲の建物が失われました。京都は粟田焼または七宝焼 [Shippokaki] といわれる美しい磁器、漆塗製品、銅製品、絹、ちりめん、刺繍製品、扇などの特産品があり、大変有名です[10]。

京都へは、三菱や他の蒸気船を利用して神戸に向かう方法があり、航海は約 36 時間かかります。神戸から京都までは列車を利用します。または陸路を取ると東海道を歩きますが、この方が良く使われます。というのはこの国を見聞する機会が多いからです。行程とお薦めのホテルの名を下に示します。

横浜から

（中略[11]）

京都

合計　126 里 4 町（約 495.8 キロメートル）

まず京都に到着したらまっすぐに外国人用のホテル地区がある円山に入ってください。最も快適なホテルは自由亭と也阿弥[12]です。円山ではガイド（案内者）[Guides (annisha)] はいつでも手配できます。人力車は 1 日当たり 50 銭で雇えます。車夫を 2 人雇うなら 1 円になります。眺めの良い場所でこれからの具体的な予定をたてるなら、円山の背後にある将軍塚に登るべきでしょう。将軍塚への道は人が通れるように整備されているので全く問題なく登れます[13]。途中、知恩院の本堂と大鐘を通り過ぎます。山頂からは京都の市街とその周辺が美しい鳥瞰図のように見られます。右手にある白い壁の城は京都府庁、北西には丘

---

9 「500 エーカー」についても SN 初版にある。

10 KG では「どの訪問者も一日は十分な時間を取って窯元や刺繍業者に見学に行くべきだ。」が追加されている。

11 東海道の宿場町と推薦する旅籠、距離が東京方面から示されている。

12 田中泰彦（1971）『都の魁（上）』京を語る会、84 ページに「自由亭」があり、所在地は「八坂神社大鳥居前」であった。同書 85 ページに「也阿弥」があり、所在地は「洛東円山」である。

13 筆者は 2020 年 5 月 18 日、実地調査を行い、円山公園から将軍塚展望台までの道のりを徒歩でたどった。所要時間は約 40 分、道の状態としては、現在は日常的に使われていないため、木々が生い茂り、途中湿って崩れかかった石段の道があったが、疲労のため登ることが困難な坂道ではない、という感想を持った。

があり、その一番高い所は愛宕山、京都で最も有名な庭園をもつ金閣寺があります。同じ方向に京都博覧会が開催されている御所と大宮御所、裁判所などがあります。複数の橋が鴨川にかかっています。鴨川は北山から始まり京都市街を縦断しています。川は豪雨の時以外水量は少ないです。多数の西洋風の建築物がみえます。鴨川の西側の堤防には、舎密局[14]、染殿[15]、石鹸製造所[16]があります。舎密局は多分上部に小さな白い塔がある建物です。その南には集産場［Kioto Bazaar］[17]、織殿［the Silk Weaving Department］が見えます。北東には大文字山と比叡山が見えます。将軍塚の北のすぐ見える所あるのは黒谷という葬送地で、塔が建っています。四条周辺に再度目を戻して、西南西に目をやると、日本で一番有名な西本願寺が見えます。同じ方角に鉄道と京都駅、東寺の塔が見えます。東寺は東京［Tokio］を訪問する中国人や朝鮮半島の大使たちをもてなす場所でした。南西には大阪造幣局の煙突が見える時もあります。南東には茶で有名な宇治があります。

京都では観光客向けの娯楽に事欠きません。劇場は数ヶ所あり、その時々見応えある舞台を鑑賞することができます。これらの音楽や踊りは魅惑的でお薦めですし、その 1 つには能と呼ばれる古くからのオペラもあります。コメディ、道化もの、悲劇ものが観劇する人々を魅了してきました。食事は多くの外国人旅行客が友人同士で、芸舞妓がお客をもてなす宴会で楽しみます。京都には祭と呼ぶ沢山の祭礼がほぼ毎日あります。毎年 8 月 16 日の「盆 [“Bon” fires]」祭の終わりに京都を取り囲む丘に火がともされます。送り火にはそれぞれ異なる意匠が表されています。‘okuru’とは心を向ける(attend)、‘hi’ は火の意味をもっています。送り火の初めは大きな字と言う意味の大文字で、京都の街の北東にあります。西方には ‘Ichiwa’[18]という地区の始めの一文字表す文字があります。北の丘には「妙」と「法」

---

[14] 『覚馬伝』（1976）によると、舎密（セイミ）局は、「京都最初の化学研究所」として、理化学の講義、実験を行い、同時に「薬剤、石けん、氷糖、ラムネ、レモナーデ、陶磁器、七宝、ガラス、漂白粉、銀朱、石版術、写真術、ビールなど」の文明開化を象徴した製品を生産販売した（青山、107－109）。

[15] 染殿、織殿は京都織物会社の前身。「府は西陣その他の織物業者を刺激奨励して、その事業を改良進歩させるため、平安朝にあった織殿染殿の模範工場を起こした」（青山、前掲書、112）。

[16] 舎密局の一部である。

[17] 集産場は「京都のすべての名産品が陳列されて人々に縦覧（青山、前掲書、106）」された場所であった。

[18] 明治時代の西洋人による英文ガイドブックから、現在は失われた意匠の存在がわかる事

があります。次に左大文字は大文字とほぼ逆さ文字としてあります。西山には門である鳥居［‘the Torii or portal］があります。しかし最も美しいのは舟と呼ばれる舟形です。将軍塚からの眺望、また市街のどこからでも見られます。

京都の地形の特徴がわかったので、以下に挙げた名所観光はもっと楽しくなりますよ。

1. 建仁寺

この建物は源頼家［the Shogun Minamoto Yorie］が約 600 年前に建立した寺で縄手 [Nowat] 通に面した地区にあります。この寺は 1872 年に開催された博覧会会場の 1 つでした。良く養生された芝生、立派な木立があり心地よい日陰を作っています。ある伝説で有名な大鐘[19]が境内の東側に吊るされています。建仁寺の多数の芸妓［geisha］が養蚕に従事しています[20]。

2. 大仏［The Daibutsu-(Great Buddha)］

京都での主要な見どころの 1 つです。大仏は方広寺とも言われ、1587 年に今は太閤様として祀られる豊臣秀吉が建立しました。この建物には 28 年前に据え付けられた盧舎那仏という名の像があります。仏像は最初木造でした。160 フィート(約 48.77m) はあったと聞きました [We are told that it measured 160 feet.]。この像が作られた数年後の大地震で仏像は木片となって壊れ多くの人々が亡くなりました。信濃の圓光寺の像が代りに据えられました。

は大変興味深い。現在は失われた送り火の場所について、佐和隆研／[ほか]編（1984）『京都大事典』淡交社、p583～584【大文字五山送り火】項に「享保 2 年（1717）の「諸国年中行事」には市原の『い』，鳴滝の『一』が載る。さらに西山には『竹の先に鈴』，北嵯峨には『蛇』，観空寺には『長刀』があったという」とある。京都の代表的な祭の 1 つは祇園祭であるが、TG には描かれていない。それは本稿第 6 章で述べるように、SN の祇園社の記述に祇園祭についての説明があったのだが、TG では削除したからである。もしくは、キーリングが TG の出版前年の 1879 年の夏に取材をしていれば、京都はコレラ蔓延により祇園祭鉾巡行は実施されず、観られなかったことが推察される。

[19] 陀羅尼の鐘と思われる。「修行僧が寝につく亥の刻(午後 10 時)過ぎ、観音慈救陀羅尼を一万返唱しながらつくことから、この名がある。開山在世のとき、鴨川の七条の下流、釜ヶ淵に沈んでいた源融(みなもとのとおる)の旧物を『えいさい』『ようさい』と、開山の名を呼びながら引き上げたという伝説がある（建仁寺（2008）「建仁寺境内図」https://www.kenninji.jp/grounds/ 最終閲覧 2020 年 11 月 13 日）」。

[20] 当時女性の教育施設については、新英学校及女紅場と遊郭の女紅場があった。「明治 5 年 10 月、遊女解放令が出され、芸者や遊女をここに強制入社させ、裁縫手芸を教え他の職業につかせようとした（青山、1976：89）」場所である。

1603 年には 63 フィート (約 19.2m) の高さの銅像と取り換えられました。その後しばらくして寺は焼失し、太閤様の次男右大臣秀頼が再建しました。秀頼はまた、高さ 24 フィート(約 7.32m)、厚さ 12 インチ(約 30.48 cm) の銅の大鐘を作らせました。1648 年に家綱はお金が必要となり、銅像を溶かして貨幣にするよう命じました。「文」[21]という文字からそのことがわかります。銅像の代りに木像が代用されましたが、これもまた災難にあう運命でした。約 82 年前に雷が原因で倒壊したのです。

3. 八坂塔

日本の仏塔建築の最古の塔として有名で聖徳太子が建立しました。当初の塔は倒壊し現在の塔は将軍源頼朝が再建しました。現在の塔は 264 年前、有名な徳川家康の息子である将軍秀忠によって再建されました。高さ 120 フィート（約 36.6 m）で内部は豪華な木組みとなっています。最上階からは素晴らしい眺望がみられます。仏教信仰のための塔です。

4. 高台寺

八坂塔の近くにあり 260 年前近くに豊臣秀吉の妻によって建立されました。隣接した建物は秀吉の命によって建てられ唐傘亭と名付けられました。現在は唐傘御亭［karakasannochin］として一般的に知られています。

5. 三十三間堂

蓮華王院ともいわれる三十三間堂は大仏の近所にあります。1162 年に建立され、千手観音（千の手を持つ神）［Senju Kuwanon (the god of one thousand hands)］を奉じています。これらの像は全部で 33,333 体[22]あると思われます。最大の像は高さ 8 フィート (約 2.44 m) の千手観音坐像です。かつて寺の西側には弓道場があり、星野勘左衛門と和佐大八郎が巧みな射手として有名でした。5 月には寺に隣接する建物の前の浅い池[23]にカキツバタ[24]が咲くので、それを楽しみにした人々で賑わいます。

---

[21] 原文は ‘by the character 文 (bun)’ である。調査の結果、本稿第 6 章に述べるように、SN の「大仏」には細かい経緯が述べられた。

[22] この 33,333 体という数字から、TG が江戸時代の西洋人旅行記の誤情報を参考にした可能性が窺える。例えばシーボルトによる『1826 年の江戸参府紀行』を全訳した斎藤信は、シーボルトが記した 33,333 という数字について「ケンプッァー以来の誤りで、33,033 でなければならない」と注で述べた。TG が参考にした古い西洋人文献については、本稿第 5 章に述べる。

[23] 白幡洋三郎は、明治期の三十三間堂の手前に池か湿地のようなものを確認し、また「手前の池も、地下の防火水槽に変わった。境内の変わりようは著しい（2004：96）」と述べた。

6. 清水寺

清水寺は数千人[25]もの参拝者たちや観光客が訪れる楽しく絵のように美しい［picturesque］風景の見られる場所です。石段が続いたのち良く舗装された道路を上り、観光客は 798 年建立の、女神［goddess］である十一面観音を頂く音羽山清水寺［Seisuiji］の扉の前に到着します。本堂（寺の正門）の前には、沢山の絵馬が掲げられています。息災を願い［escape from danger］弓道や乗馬の上達を願う絵馬などがあります。良き伴侶を探す未婚の男女が訪れる小さな神社[26]が本堂の南東にあり、真の恋人たちの守護聖人である縁結びの神が祀られています。その神社の前の格子に紙を結び付けます。効果があるように紙を結ぶには同じ手の親指と小指を使って［the pieces of paper must be tied with the thumb and little finger of one hand］結ばなければなりません。清水寺の周辺には陶器を商う店が多数あり最上の陶器や磁器を購入できます。

7. 西大谷

西大谷は京都において最も興味深い場所の 1 つです。境内は大変古く、西本願寺の墓所として使用されました。1709 年頃再建され、その後再び修繕されました。唐門と呼ばれる優雅な入口は、旅行者［traveller］にとって鑑賞する価値があります。その門から敷石の小道を行くと眼鏡橋 [the Megane Bashi (Spectacle Bridge)] です。この橋はハスで覆われた広い池にかかり、その両端にはサクラの木々が植わっています。サクラが満開の時の光景は本当に素晴らしい景色です。

8. 明暗寺[27]

普賢菩薩と中国の僧、達磨大師を祀り建立されました。この寺の僧侶は全て公家の息子たちで、帝のいる宮廷に属しており、 ‘Moudushiki’[28]という僧位が授けられています。色々

---

24 『都花月名所』の燕子花の項目には「大佛　洛東　蓮華王院の堂前池中に多し毎年大矢数の時節殊に花盛なるべし（新修京都叢書刊行会（編著）、1968：579）」とある。

25 清水寺については、京都の国際観光の発展を調査する上で、大変興味深い数字の書込みがあった。『覚馬名所案内』の初期と後期の版からは、清水寺参拝者数からの増加が、2～30 人から 100～200 人と記述された（第 2 章に詳しい）。TG では 1 日につき、という記述がないので比較はできないが、それでも「数千人」という数字は注目に値する。

26 記述内容から地主神社である。TG の京都記述部分の中で、はじめて ‘shrine’ という語が宗教施設の神社を表す単語として使われた。現在、日本の寺が ‘temple’、神社が ‘ shrine’ と区別して呼ばれる最も初期の頃だと考えられる。

27 東福寺善慧院（明暗寺）については、東福寺塔頭・善慧院の公式ホームページ（http://tofukuji-zennein.com/pg65.html、最終閲覧 2022 年 2 月 24 日）を参照されたい。

28 門跡と思われるが皇室とのつながりについては不明である。

な地方で乞食を行う虚無僧 [the Komusho (wandering minstrels)][29]は皆この寺の出身です。かごのような形の帽子（天蓋）を被る許可を得るために、この寺の僧に使用料を支払います。

9. 耳塚（耳の墓）

小西摂津守と加藤肥後守という 2 人の武将は 6 万人の兵士を率いて朝鮮を攻撃しました。多数の敵軍の兵士を捕らえ、耳をそいだ後、戦利品としてこの墓に埋めたのが名前の由来です。

10. 東本願寺

この寺は西の郊外にあります。最も裕福と思われる仏教の宗派の 1 つである一向宗または門徒宗に属しています。布教のため宣教師としてヨーロッパやアメリカに有能な僧侶を 18 人から 20 人ほど送ろうとしています。この目的のために英語学校が設立され、多数の僧侶が上海に最近創設された寺に送られました[30]。寺には以前美しい建物がありましたが、1864 年の内戦で大火となり、有名な門 3 基を含めて建物は焼失しました。

11. 西本願寺

門徒宗に属しており、日本で最大でかつ最も立派な寺です。塀に囲まれた境内の南側には精巧に組立てられ素晴らしい彫刻が施された勅使門があります。有名な左利きの芸術家、左甚五郎がデザインしました。勅使門の扉は天皇や勅使が訪れた時のみ開かれます。装飾や彫刻の素晴らしい建物と、興味深い歴史的価値のある多数の仏像が建物内にあります。

西本願寺では、こういった所にありがちな大火事が起こっていない、と僧侶たちは主張します。というのは本堂の前には有名な古いイチョウの木が植わっており、お寺を守っているのです。大火が起こるとイチョウが水を吐き出し消火すると言われています。本堂の背後にある塀の外の屋敷では、数年前に博覧会が開かれました。

12. 東寺

東寺の塔と寺は街の南端にあります。252 年前に将軍徳川家光によって建立されました。塔は高さ 164 フィート（約 50m）あり、敷地は 30 平方フィート（約 2.8 ㎡）、5 階建てです。

---

[29] 虚無僧はオールコックが『大君の都』においてイラストで描いたように、西洋人が興味深く思った職業の 1 つと考えられる。

[30] 中西直樹の調査によると、当時東本願寺は日本政府と協調してキリスト教の防止策を展開しており、そのため 1876 年には上海別院を開き、毎日のように中国語による現地人対象の布教を行ったようである（2013：111）。

13. 神泉苑（聖なる泉の庭）‘SHINSENYEN-(Holy spring’s Garden)

1000 年前に善女龍王のための社と塔が創建され、大日如来を祀っています。数年前まで塔はこの境内にありましたが、老朽化のため壊されました。650 年もの間、神泉苑は京都で最も美しい場所の 1 つでした。

14. 愛宕権現

京都西部の山で最も標高の高い愛宕山頂にあります。1037 年前に慶悛僧都［the priest Keijun］が創建しました。 イザナミ［Isanami］とホノムスビノミコト［Hono Musibi Mikoto］が祀られました。日本仏教の父といわれる聖徳太子の師である‘Nichira’も祀られていました。しかし現在その像は外されました。純粋な神道崇拝には相いれられないからです。

15. 御室御所

御室御所の本堂は約 700 年前に建てられました。そして創建から今上天皇に至るまで皇室関係の人々が居住し続けました。現在の帝も東京に出発するまでここに住んでいました。のちにとても荒廃し、以前の栄華はほんの少ししか残っていません。謁見室と帝の寝室がある部屋はとても暗く、寝室は扉がしまった状態では全くの暗闇の中です。御室御所は初回の博覧会期間中に一般公開されました。以前はあえて見学したいと思わなかった場所ですが、帝の聖なる場所を参観できるということで、数千人の人々が来場し好奇心を満足させました。金岡という芸術家が壁に描いた馬の絵が本物のようであったので、その馬は本当の生命を授かったという逸話が残されています。

16. 衣笠山（絹の帽子の山 [Silk Hat Mountain]）

宇多天皇は退位後、夏に雪が見たいという奇妙な空想をしました。その夢は実現できず、天皇は白い絹布で丘の頂上を覆おうとしました。その頂上は「笠」と呼ばれるつばの広い帽子のようでした。

17. 金閣寺（金で覆われた寺［Gold-covered Temple］）

衣笠山のふもとにあり、特に木々や花々がよく手入れされ見事に成長している美しい配置の庭園があり、京都近郊の最も魅力的な名所の 1 つです。境内の中央に位置する寺は、約 500 年前に建立された将軍（足利）義満の夏の邸宅でした。拝観料は 1 人 2.5 銭[31]を本堂の入口で支払います。その寺の案内役（少額のチップを期待している［who expects a trifling

[31] TG の京都記述部分の中で、寺社仏閣の拝観料が書かれているのは金閣寺のみである。本稿第 5 章（5－4－5）にて述べる。

fee］）は義満が沐浴や歯磨きをした場所や、茶を点てるための取水口といった史跡を案内します。滝の上の平地になった所には小沼があり、小さい島があります。古代ここに有名な白蛇が住んでいたそうで、それを伝える記念碑が建てられました。

18. 西陣

北野天神の近くにあるのが西陣です。絹、ベルベット、刺繍製品などは大変有名で日本では最高品質の輸出品として大いに知られています。安値で取引される海外製品に押されて、現在は貿易で伸び悩んでいます。

19. 上賀茂

賀茂川の堤沿いに位置するこの神社［‘Shinto temple］には、夏の間納涼のために神社を取り巻く美しい木々のもとに人々が集います。競馬［horse races, called Keba］がこの神社の前で毎年 5 月 5 日に行われます。同月 1 日には、馬たちの予行演習があります。競馬の起こりは文徳天皇の皇子であった惟喬親王、惟仁親王の王位を賭けた闘いでした。文徳天皇［tenno］は皇太子を 1 人だけ後継に推す訳にいかなかったので、馬で競わせて皇位継承争いに終止符を打とうとました。惟仁親王[32]が勝ち、後継者と定められました。

20. 修学院

帝のために作られた美しい庭と茶室があります。立派なサクラやモミジの木がマツとともにこの地を彩っています。離宮の高台から京都市内やその周辺が見渡せます。京都博覧会の期間中、一般公開されました。京都の郊外の最北東に位置しています。

21. 下鴨

修学院の南、鴨川の堤防にある下鴨神社は天武天皇によって創建され、玉依姫を祀っています。興味を引くものが大変多いので、半時間ほど気持ちよく過ごせる場所です。

22. 銀閣寺（銀で覆われた寺［Silver-covered Temple］）

慈照寺とも呼ばれ、大文字山のふもとにあります。庭園が一番の見どころで、その時代最も素晴らしい造園師であった相阿弥がデザインしたそうです。銀閣寺は 13 世紀に将軍足利義政の命によって禅僧の夢窓疎石が創建しました。洗月泉という小さな滝と庭園の一番端にあるツツジの丘はとても美しくお勧めです。4 つの石橋と将軍への貢ぎ物であった変わった形の石はあちらこちらにあり、一見の価値があります。数年前までは、銀閣寺はもっと絵のように美しい場所でした。しかし 1490 年の将軍の死以降、寺やほかの建物などが禅

[32] 後の清和天皇を指す。

僧たちの手に渡ってから、財政的に貧しくなりました。僧たちは今や乞食同然に落ちぶれ、この興味深い場所は次第に寂れていくままです。

23. 若王子

とても美しく、暑い季節には涼を感じる場所です。岩の多い東山の渓谷にあります。小さな 3 本の滝が上下に続き、上の方の滝は大きなフジの花々で覆われています。

24. 知恩院

浄土宗の円光大師が 12 世紀に創建しました。円山公園の麓、祇園の東側にあります。知恩院境内の上方の大きな四角形の土地の中心に本堂［monastery］はあります。境内の下方から伸びた長い参道には 3 基の門があります。浄土宗の僧たちはこの参道に沿った小さな塔頭で暮らしています。各々の寺で庭の木々を育て、独立した環境で境内の中で修行しています。寺に続く大きな三門は素晴らしい建築物です。三門は寺の入口であり、高さは 150 フィート (約 45.7 メートル) になります。急な階段を上ると複数の仏像を安置する長い部屋があり、それぞれの仏像が人々の煩悩を個々に示しています。降りる前に回廊を一周廻り、そこから見える絵のような景色を楽しんでください。伝説では円光大師は祈りに応じてこの世に生れ、その時代最も学識のある人になった、という美しい伝説があります。これは『アラビアンナイト』の中に出てくる、美しい寓話の中に良く似たものがあります。円光大師の墓は立ち寄る価値があります。本堂の裏手にまわると、知恩院の屋敷［yashiki］があります。1872 年開催の京都博覧会はここでありました。当時外国人の宿泊施設であったところが、知恩院の建物の張り出した所から見下ろせます。

京都の不思議の 1 つである、知恩院の大きな梵鐘は必見です。将軍塚へ向かう道沿いにある本堂の南東にあります。高さ 18 フィート (約 5.49m)、直径 8 フィート (約 2.44m)、厚さは 9.5 インチ (約 24.1cm)の大きさで、御忌祭［Giyoki］の時のみ音を響かせます[33]。

25. 円山

美しい風景や素晴らしい眺望が好きな人は、知恩院の裏手にあたる円山の丘に登ると良いでしょう。休日には数百人もの地元の人達が、丘に点在する茶屋を利用して、それぞれの余暇を楽しんでいます。

---

[33] 現在の御忌大会は 4 月、除夜の鐘も有名である。

茶屋はサクラやカエデが植えられた庭園に囲まれています。人々は美しい花々の色や、かぐわしい花の匂いを楽しみます。

26. 御所

東西は寺町通と室町通[34]の間、南北は今出川通から丸太町通の間が、天皇家の敷地です。昔はもっと大規模でした。建物は主要な建物類と多数の小建物によって構成されています。

27. 宮城 - 実際の御所

大宮御所は博覧会の開催地でした。皇后、皇族の住まい、‘Koku-san-no’御殿である皇太后の大きな住まいがあります。それに加えて公家とその他宮廷に勤める人々の屋敷や家があります。宮城は高い塀に囲まれ、格式高い重要な門が 3 対あります。南門と呼ばれる南の門は帝に対してのみ開けられます。西の門は宮廷に集う公家のための公家門、訪問者のために開かれる太陽の門という意味の日の門が東側にあります。京都在住の人［A resident of Kioto tells the compiler that］から聞いた話では[35]、初めての参観ならば、次のルートで見学するのが良いそうです。それは内侍所、紫宸殿（儀式を執り行う所）、清涼殿、小御所、御学問所、御三間、御常御殿、建春、泉殿、聴雪、御馬場（競馬場）［Obaba (Race Course)］の順です。内侍所では刀、水晶と鏡［looking-glass］といった天皇の象徴である宝が保管されています。紫宸殿では水彩画をじっくり鑑賞します。紫宸殿の北東には小御所があり、帝が将軍や大名に接見しました。御学問所は帝が学ぶ所です。美しい絵画と金箔が押された屏風をご覧ください。御三間はその隣にあり帝が位の高い女性と会った所です。御常御殿は天皇の日常生活の場でした。帝が地震を避ける為の低い建物である泉殿、娯楽のための部屋である迎春、などがあります。北に歩くと天皇の競馬場が見えます。外国人はその競馬場の西にある皇后御殿には入れません。宮城の南の門に方向を変えると、以前は薩摩藩反乱の際に官軍の総大将であった有栖川宮の居宅が現在は司法省になっています。

外国人に許されている観覧コースはみなとても魅力的です。壮麗な絵画、装飾、彫刻は称賛に値します。

---

[34] 公家町であると思われる。規模についてはほぼ京都御苑を指しているが、現在の京都御苑の東西は寺町通と今出川通である。

[35] 京都在住の日本人か在住西洋人であるかは不明であるが興味深い。この部分は KG では削除されている。

28. 桂宮御殿

桂宮御殿は桂川（蔓草の川 [Creeping-vine River]）の堤防沿いにあります。今上天皇の叔母の避暑のための邸宅でした。1878 年の博覧会では一般公開され、最も人気のある場所の 1 つでした。

29. 勧業場の織工場[36]

河原町の角倉了以の屋敷跡に立派な新築の準洋式建物が建てられ、綿や絹製品が製造されています。大量の絹製品がアメリカに輸出されています。警察、兵士の制服がここで製造されています。隣接した庭園は京都の中でも特に美しいものの 1 つです。

30. 急流下り［The Rapids］[37]

京都を観光する人達にとって、亀山（亀の山［Tortoise Mountain］）[38]から大堰川の急流を下る旅は大きな楽しみです。大堰川の野性味あふれ絵のように美しい景色に、これ以上ないほど楽しい気持ちになります。亀山は京都より 6 里離れた丹波地方にあります。亀山は大名が治める重要な城下町でした。城は 2 年前取り壊され、堀とわずかに石の城壁が残されるのみです。訪問客は京都で人力車を雇うと便利です。人力車は亀山まで全行程乗れるよう京都で手配できますが、途中 2 ヶ所だけ険しい丘のみ徒歩で登ります。沓掛は京都から亀山への道にあります。その道中の数マイルはとても美しい景色が楽しめます。もし一行が大勢なら、沓掛で人力車を降り、その後の旅程は徒歩で行うことをお薦めします。そうすることで急流下りの舟には邪魔になる大きな人力車を積むための余分な舟賃が不要となります。しかしこの場合、車夫には嵐山（嵐の山［Wild Mountain］に人力車を回送するように言い、自分達の乗った舟を待つようにすると便利です。というのは嵐山ではすぐに拾える人力車は少ないのです。勿論十分な人数の苦力［coolie］を手配し、必要な荷物を持たせることが必要です。亀山に到着後、茶屋が並んでいるのでそこで昼食を取ることが出来ます。または沓掛から亀山まで歩かなかった場合、船を雇ったあと、人力車を積み込め

---

[36] 初版にのみ名所として単独で挙げられている。KG には京都を俯瞰した記述部分にしか登場しない。

[37] 保津川遊船企業組合（n. d. ）によると、この保津川下りは「明治の 28 年頃から、遊船として観光客を乗せた川下りがはじまった」（https://www.hozugawakudari.jp/about 最終閲覧 2020 年 12 月 17 日）。西洋人の保津川下りが、いつ商業的な観光行動として始まったのか、また TG が、英文で保津川下りを紹介した初のガイドブックであった可能性については、第 8 章に詳しく述べる。川の名称については、TG は「大堰川」を用いている。

[38] 亀山は現在の亀岡である。

るようにしたのち、持参した軽食を食べることもできます。舟を雇うのに一番良い場所は古城址の前にある乗船場です。もう少し下流で乗り込むと、乗船後すぐに急流にあたってしまい、徐々に急流に遭遇する楽しみが奪われるからです。急流下りにかかる時間は 1 時間 45 分の時もあれば 2 時間 15 分かかる時もあります。水量が多い時は早く進みます。舟は大体長さ 40 フィート (約 12.2m) で横幅 7 から 8 フィート (約 2.1～2.4m) あります。最初の 1 マイル (約 1.6km) は広々とした所を徐々に下り、峡谷が狭くなり、ごつごつした岩が全方向に見えるところでは急流になり、舟は速度を速め流れに沿って進みます。舟を操るのに船頭は 2 人のみです。1 人が竹の棹を持って船首に、もう 1 人がオールをもって船尾にいます。次第に川は激流となり、舟はそびえたつ岩に向かって突進し、今にも木っ端みじんになりそうな危険をはらみながら進みます。しかし船頭たちの賢明なかじ取りのおかげで危険はすべて回避され、乗船客は安全に嵐山の静かな流れの船着き場に到着します。

峡谷の壮大さとこの地方の自然美は言葉にならないほどです。必ずご覧になることをお薦めします。女性の皆さん、この急流下りを怖がる必要はありませんよ。今までに事故があったかどうか、聞いたことはありません。嵐山から京都までは人力車で 1 時間ほどかかります。

31. 東福寺

東福寺は三十三間堂に近く、13 世紀に鎌倉の寺に居住したこともある将軍、藤原頼経によって建てられました。境内は塀に囲まれており、本堂にはインドの神である釈迦が祀られています。境内の美しい参道と、壮麗な庭園に人気があります。

32. 泉涌寺

東福寺訪問の次は 1238 年以降の天皇と皇后が葬られている般舟三昧院と泉涌寺を訪問すると良いでしょう。現在の帝の父である孝明天皇が、ここに葬られた最後の天皇です。これらの寺は元々553 年頃創建されました。その後建物が一部損なわれましたが、公家出身の大変聡明な僧、月輪（がちりん）［Gazen］大師[39]が再興しました。月輪の自伝によると彼の人生はとても興味深いものでした。早くから学問を始め中国に留学し 13 年もの間天台宗、真言宗、律宗など学問を極めました。人々の多くが月輪は死後生まれ変わり、‘Shijonoin’という名で王位に就くと信じています。この天皇［The grave of this Emperor］の墓は蓮華王院

[39] 月輪大師、悛芿（がちりんだいし、しゅんじょう）と考えられる。

の南東にある小さな渓谷にあります。訪問するに値する居心地の良い静かな場所で、行って良かったと思える場所です。

33. 宇治

この地域では日本における最高品質の茶の生産で有名です。最上級の茶は推定樹齢 500 年の木から収穫されました。最初の茶摘みは 5 月に始まり、2 番茶は 6 月です。この茶摘みの時期には数百人の人達がこの美しく興味深い土地にやってきます。菊屋という一番お薦めの宿屋では、とても美味しい茶を飲むことができます。[40]

34. 奈良[41]

古都である奈良は、絵のように美しく素晴らしい森林に囲まれています。ここでは楽しみがいっぱいありますし、人に慣れた鹿が多数丘にいます。鹿たちは春日大社（春の朝－神の名前［Spring Morning-the name of a god］）の守護神と信じられているので、誰も危害を加えることはできません。その昔、鹿を殺したものは皆死罪となりました。主な奈良観光の名所の 1 つは銅の仏像である大仏です。日本で最大の像です。像の大きさは鎌倉の部分で述べました（鎌倉の「大仏」の項に、奈良と鎌倉の大仏の大きさの比較があるので、図版 6 に示す）。こちらには知恩院の梵鐘と同じ大きさの大鐘があります。大仏の前にある石灯籠の灯りはセイロンから運ばれ、今まで消えたことがないそうです。奈良へは伏見経由の快適な道を通ります。伏見から奈良へは 6 里 (約 23.6km) あります。

図版 6. 奈良と鎌倉の大仏における大きさの比較表

大仏	奈良	鎌倉
身長	53 フィート 6 インチ （約 16.31m）	50 フィート 0 インチ （約 15.2m）
顔の長さ	16 フィート 0 インチ （約 4.88m）	8 フィート 6 インチ （約 2.6m）
耳の長さ	8 フィート 6 インチ （約 2.6m）	6 フィート 6 インチ （約 1.98m）
鼻穴の横幅	3 フィート 0 インチ （約 91.4cm）	2 フィート 3 インチ （約 68.6cm）
口の横幅	3 フィート 8 インチ （約 1.12m）	3 フィート 3 インチ （約 99.1cm）

（出所：TG 57 ページの記述から筆者作成）

[40] 平等院についての言及は TG にはないが、KG には 1 行ある。
[41] 奈良は京都記述部分の 1 つとして挙げられた。

35. 琵琶湖

琵琶湖は京都を東に 3 里 (約 11.8km) の距離にあります。湖岸からは美しい景色と、興味深い場所がたくさんあります。京都を十分観光したなら、長距離ですがぜひご訪問ください。琵琶湖とその周辺は文字にできないほど魅力にあふれた美しい景色が広がっています。

京都を出発した観光客は、まず湖を俯瞰できる高台にある大津に入ります。1200 年前には天智天皇と弘文天皇[42]という 2 人の天皇が住まう宮廷と首都がありました。現在 10,000 人の人口があり、居心地の良い宿泊所が多数あります。大津から 1 里（約 9km）少しのところに湖から川が流れ出る所、石山（石の山［Stone Mountain］）があります。その頂上からの景色は素晴らしいです。その近くには粟津と瀬田があり、木製の橋で結ばれています。唐崎は大津の東にある景勝地で大きなマツの木があり水上に枝を伸ばしています。そのマツの木は 300 年以上の樹齢があるそうです。彦根の市街は最近重要になってきました。それは小型蒸気船が湖を往復し、唐崎港から彦根港に就航しているからです。

大津と敦賀は湖経由で約 30 里 (約 117.8km) の距離です。小型蒸気船が塩津に向けて毎朝 9 時に出発し、午後 4 時に到着します。この距離は 23 里 (約 90.3km) です。そこから敦賀までの旅の残りの部分は人力車の利用になります。

[42] 大友皇子を指す。

第 5 章　Keeling の *Tourists' Guide*（1880）についての研究

―山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）と京都博覧会、古い西洋人旅行記の影響―

5－1.　はじめに

TG は、1880（明治 13）年 2 月に初版刊行の、イギリス人による日本観光ガイドブックの先駆けで、「訪日西洋人観光客が限られた旅行日数で効率的に観光できる(Keeling, 1880: preface)」ことに焦点をあてて制作された。TG は好評を得て改版増補を繰り返し、表題、編纂者、出版社を変え、1890 年刊行の第 4 版 2 刷の KG まで確認できる。

本章の研究は、本稿第 6 章で論じる SN を筆者が未見であった時のものであることを申し添える。本章の調査の結果、不明確な点についてさらなる調査の必要性が導き出された。そのため、『覚馬名所案内』と KG の間隙を埋めるガイドブックの有無を含めて継続して調査を行い、SN を発見した次第である。

さて、編纂者のキーリングについては、伊藤久子（2009）の論説に詳しく、本稿第 4 章（解題）で述べた。伊藤は長くキーリングの人物像を調査していたが、「なんの手がかりもなく、いかなる人物か何もわからなかった（伊藤、2009）」。しかし、ついに福沢諭吉書翰の調査からキーリングについての糸口を見つけた。伊藤の示した『資料御雇外国人』には、キーリングは複数の学校、雇い主を転々とし、福沢諭吉の慶應義塾に明治「12 年 3 月 1 日～7 月 31 日、雇継 12 年 9 月 11 日～12 月 25 日（ユネスコ東アジア文化研究センター、1975）」の期間雇われたという情報がある。しかしその後の記録はない。キーリングが TG の序文に記した日付は、翌年 1880 年 2 月であった。

『覚馬名所案内』については、本稿第 1 章・第 2 章において詳しく述べた。

長坂契那（2010）は、TG の編纂者キーリングが TG の序文に「既に、『横浜案内』や『東京案内』、『京都案内』などの優れたガイドが出版されている」[Keeling, 1880 : PREFACE]という一文がある」ことを指摘して、その『京都案内』とは、『覚馬名所案内』であり、「一定の購買数を確保でき知名度が高かったことが伺える」と論じた。

この長坂の論考に賛同し、『覚馬名所案内』が TG の参考文献となった可能性があると考え、『覚馬名所案内』を比較対象として分析を行った。またその分析の中には、後述する先行研究に基づき、江戸時代、並びにそれ以前の西洋人旅行記（以下、古い西洋人旅行記）がもたらす、TG の京都記述部分への影響を含めて調査した。

TG が何に影響を受け、名所の取捨選択を行い、西洋人の眼から見た「観光したい京都」を提案したのかを調査した結果、TG の内容には、古い西洋人旅行記からの影響による「西洋人が追体験したい京都」と、『覚馬名所案内』からの「日本側が見せたい京都」からの取捨選択があった。それに加え、産業都市京都についての記述、西洋人が好む観光箇所や観光行動を独自に取材し、付加価値をつけて京都の紹介をしたことがわかった。

日本側からの影響について、『覚馬名所案内』の直接的な影響以上に、その母体である京都博覧会自体が大きく影響したことがわかった。当時の京都国際観光における「西洋人に見せたい名所」が具体的に提示され、TG に取り入れられた。TG の京都記述部分は、西洋人の嗜好と眼差しから、明治初期の京都国際観光の進展が見て取れる重要な史料である。

5－2. 先行研究

TG について、踏み込んで論じた先行研究は管見のかぎりあまり見当たらない。その理由として、先述したキーリングの人物像が長く不明であったこと、TG と同時代に刊行され西洋人観光客の大きな信頼を得た、HT が明治期のガイドブック研究に強く影響したからである[1]。

TG についての評価は、例えば野口祐子（2014）は、「横浜を中心とした観光が詳しく、関西地方では京都・琵琶湖・大阪だけが挙っている。当時の日本国内の事情を反映した旅行案内である。最初の詳しい日本ガイドブックは、サトウとホーズの編纂[2]」のガイドブックである、と TG を評価しつつも HT の重要性を述べている。一方西洋人の日記、旅行記、ガイドブックに詳しい伊藤久子（2009）は、「マレーのハンドブック[3]は内容も高度で、立派な本であったが、キーリングのガイドブックで事足りる旅行者も多かったと思われる」と述べ、西洋人観光客の用途に応じて、TG と HT は双方とも同時期に好評を得た、と論じた。

幕末から明治時代の、ガイドブック・旅行記に記述された京都観光についても、HT を中心に詳細な研究が行われているが、TG については十分とは言えない。田中まり（2004）は実用的な情報を載せた、詳細な旅行案内書である HT によって「ようやく『観光』の対象となりえた」と述べ、HT の京都記述部分を詳しく論じた。野口祐子（2014）は、日本に長期

---

1 HT は「明治 5 年横浜に設立された日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）に集積された日本情報の公刊でもある英文日本旅行案内記（荒山、1991）」であり、多くの西洋人日本観光旅行客の信頼を得た。

2 HT を指す。

3 HT を指す。

滞在したイギリス人達が記述し、明治時代に出版された英語ガイドブックや旅行記を分析し、「ガイドブックに扱われた京都の名所は、欧米人のまなざしを受けて、その価値を変貌させていった」と述べた。長谷川雅世（2015）は、明治時代のイギリス人の旅行記に取り上げられた、特別な京都の寺社について論じた。

滝波章弘（2012）は、「ある旅行記は、それ以前の旅行記の影響を受ける（中略）何かを読み、その追体験のように自らの旅行を語る場合もあれば、ある人が旅行記を読み、その内容が別の人に伝わり、いつの間にか社会に共有される旅行感が成立している場合もある」と述べた。明治初期のガイドブックが参考にした、明治時代以前の外国語での旅行記や文献について、重点的に研究された例は少ないが、田中まり（2001）は「鎖国政策下にあった江戸期に京都を訪れた外国人の例は非常に少なく、主に長崎において貿易を許されていたオランダの代表が公的に将軍を訪問する際に通過する場合に限られていた。従って京都についての記述もケンペル一行やシーボルトなど数例の記録が知られている程度であろう」と、オランダ商館長江戸参府の随行員の旅行記について言及した。Rutherford Alcock（以下オールコック）は『大君の都[4]』を著すにあたって「ケンプファー（ケンペル）、トゥーンベリ（ツンベルグ）、その他の人びとの著作（日本人ないし日本の国とその制度についてのべようとしたさいきんの全著作は、主としてこれらの人びとの寄せ集めである）にざっと目をとおしてみた（山口（訳）、1997）」と述べた。オールコックの示した「その他の人びとの著作」について、川内有子（2020）は「オールコックが来日した時期にイギリスにおいて日本に関する知識を供給していたのはまさしくこれらの『編集物』であった」と述べ、イギリス、アメリカ両国で出版された具体的な著作を挙げた。これらの指摘から、TG についても、古い西洋人旅行記やそれらを編集した書籍から、影響を受けた可能性がある。

本章では先行研究で示された、オランダ商館長江戸参府に随行したケンペル[5]（Engelbert Kaempfer, 1651－1716）、ツンベルグ[6]（Carl Thunberg, 1743－1828）の旅行記の内容を調査し、

---

[4] 原著は、Sir Rutherford Alcock の *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan,* 1863 年である。

[5] エンゲルベルト・ケンペル（Kämpfer, Engelbert）はドイツの博物学者で医者でもあった。1690 年来日し、元禄年間の日本で短い間に二度もオランダ商館長に随行して江戸参府を果たした。『日本誌』は死後 11 年経った 1727 年に刊行された。（早稲田大学図書館所蔵貴重資料、日本誌。 Waseda University Library, 1996-. First drafted February 18, 1998.Last revised November 25, 2005。
https://www.wul.waseda.ac.jp/collect/yo/ae3110.html 閲覧日：2021 年 2 月 5 日。

[6] ツンベルグはスウェーデン生まれ、植物学者・医者。オランダ東インド会社に入り、1775 年長崎オランダ商館の医者として来日、翌 5 年商館長に随行して江戸参府、『日本紀行』はこの間の記録である（ツンベルグ（1991）「日本紀行」『史料京都見聞記第二巻』駒敏

また、それ以前の時代に、膨大な量の日本についての記述を残した、織豊時代のイエズス会神父フロイス[7]（Luís Fróis、1532－1597） の記述を取り入れて、調査を行った。するとケンペル以降と指摘されていた名所の誤情報が、遡ってフロイスから始まり、フロイス以降の文献に誤転載され続けたことが、「三十三間堂」において確認されたので後述する。なお本章では、TG 刊行以前に発行された、来京西洋人の著作の全てを網羅していないが、この 3 名の著作は日本についての代表的な著述であり、明治初期の西洋人観光客には、良く認識されていたと考える。

5－3. TG 内の京都記述部分の比較調査

入京が厳しく制限されていたため古い西洋人の京都名所訪問は、日本側主導で行われ、その古い西洋人旅行記には、以下のような名所が記されていた。TG 内の京都記述部分の比較調査を行う前に、古い西洋人旅行記に記述された京都名所を図版 7.にまとめた。

図版 7.から、三十三間堂がフロイス、ケンペル、ツンベルグとも訪問箇所に入っていることがわかる。大仏（方広寺）[Daibutsu, or as it is frequently called Hokoji][8]はケンペル、ツンベルグが訪問しているが、フロイスの時代には、まだ建立されていない。

さて TG に挙がる名所は京都市中で 31 ヶ所、自然体験が 1 ヶ所、その他 3 ヶ所（宇治、奈良、琵琶湖[9]）である。奈良の内容については本稿では扱わない。

図版 8. は、TG に記述のある名所をグループに分け、示したものである。縦列は⑴『覚馬名所案内』にも共通してある名所、⑵は TG にはなく『覚馬名所案内』のみある、⑶は TG にのみ、新出する名所である。横行は KG が受けた影響や、新たな独自の記述が見受けられるものとして、A. 西洋人旅行記、B. 京都博覧会、C. 文明開化の新産業、からの影響と、D. 観光地の取捨選択、E. 付加価値、推薦、旅行体験、F. 意図不明確、に分けた。名

郎、村井康彦、森谷尅久編集、法蔵館。定本『異国叢書』一、駿南社、250 ページ。

[7] JapanKnowledge Lib 所収の『日本大百科全書（ニッポニカ）』「フロイス」から概要をとると、ルイス・フロイスは織豊時代に日本で活躍したイエズス会司祭。リスボンに生まれ、1563 年来日、1583 年にはローマのイエズス会早朝から「日本の布教史」を執筆するよう訓令を受け、フランシスコ・ザビエル以後の布教史の執筆に専念した。膨大な『日本史』の原稿の行方を案じながら 65 歳で病死、フロイスの書簡や年俸はほとんど大部分が早くヨーロッパで刊行され、各国語版が出された一方、『日本史』は久しく原稿がマカオの修道会の倉庫に埋もれたままになり、写本も世界各地を転々としたので、1977~1980 年に日本で初めて日本語に活字化されるに至った（小学館、松田毅一：2018 年 2 月 16 日）。

[8] 図版 7. にある名称は、それぞれの訳者の表現を使用した。

[9] TG では、奈良は京都の中に含まれ、琵琶湖は、京都のすぐあとに、別章の ‘Biwa Lake’ としてある。『覚馬名所案内』では京都の近郊として紹介されるため、分析対象とする。

所の前の数字 1,2,3…は TG の登場順、名所の後の数字①②③…は『覚馬名所案内』の登場順であり、便宜上筆者がつけた数字である。項目の前の数字がないものは、TG の 1 項目で述べられたものでなく、一般並びに俯瞰情報の記述で出た名所や体験である。複数の影響を受けた名所はそれぞれに示した。TG の個々の京都名所に関する記述内容については本稿第 4 章にある。

図版 7.　フロイス、ケンペル、ツンベルグの記述から訪問を確認した京都名所（カッコ内は訪問年）

人物 / 名所	フロイス（1564）『日本史 3 五畿内編 I [10]』	ケンペル（1690、1692）『江戸参府旅行日記[11]』	ツンベルグ（1776）『日本紀行[12]』
訪問した京都名所	三十三間堂、東福寺、祇園社、公方様の屋敷、御所、清水寺、大徳寺、金閣寺、知恩院、東寺	1690 年江戸からの帰路：知恩院、祇園社、清水寺、大仏殿（方広寺）、三十三間堂 1692 年江戸からの帰路：知恩院、祇園社、八坂塔、清水寺、大仏殿方広寺、耳塚、三十三間堂	大仏寺、三十三間堂

（出所：『日本史 3 五畿内編 I 』、『江戸参府旅行日記』、『日本紀行』の記述に確認された寺社を元に筆者作成）

[10] 238－261 ページを参考にした。「公方様の屋敷」は当時の二条通りに面した幕府所在地、「御所」は現在と同じ所在地である、と書かれている。先述したように、キーリングの時代には『日本史』は刊行されていないが、書簡の翻訳は出回っていた。
[11] 224－233、301－309 ページを参考にした。
[12] 253－255 ページを参考にした。

図版 8. TG と『覚馬名所案内』にある京都とその近郊の名所の比較と影響

比較 影響	⑴共通	⑵TG にない	⑶TG に新出
A. 古い西洋人旅行記	2.大仏（方広寺）⑲、5.三十三間堂㉑、6.清水寺⑯、9.耳塚⑳、12.東寺㉙、16.17.衣笠山と金閣㊲、24.知恩院⑤、31.東福寺㉔	祇園④、大徳寺㊱	4.高台寺
B. 京都博覧会	11.西本願寺㉗、15.御室（仁和寺）㉟、24.知恩院⑤、26.27.御苑、宮城－御所③		1.建仁寺、20.修学院離宮、28.桂離宮、お茶屋遊び
C. 文明開化の新産業	18.西陣㊴ 清水の陶器⑰ 33.宇治㉕		1.建仁寺、29.勧業場の織工場、京都府庁（二条城）、裁判所、新産業施設群、京都駅、大阪造幣局、琵琶湖（蒸気船航路）、土産物購入
D. 観光地の取捨選択	7.西大谷⑱、19.上賀茂㊵、21.下鴨㊶、22.銀閣寺⑫、23.若王子⑦、25.円山⑬、32.泉涌寺㉓、（30.川下りの部分で）嵐山㉝、33.宇治㉕、35.琵琶湖（大津、堅田、比良㊸、琵琶㊹、唐崎㊺、瀬田、粟津、石山㊻）黒谷⑧、比叡山㊼	三条大橋②、南禅寺⑥、永観堂⑨、真如堂⑩、吉田⑪、東大谷⑭、黄檗㉖、本圀寺㉘、石清水八幡宮㉚、長岡天満宮㉛、梅宮㉜、稲荷㉒、清涼寺㉞、北野㊳、鴨川（鴨川堤）㊷	10.東本願寺 34.奈良
E. 付加価値、推薦、 旅行体験	3.八坂塔⑮、6.清水寺⑯、17.金閣㊲		土産物購入、将軍塚からの俯瞰、祭（大文字送り火）、29.勧業場の織工場、30.保津川下り

F 意図不明確			8.明暗寺、13.神泉苑、14. 愛宕権現

（出所：TG と『覚馬名所案内』に記述された京都名所をもとに筆者作成）

5－4. 考察

TG と『覚馬名所案内』の比較を図版 7 で行った結果、TG にははっきりと、古い西洋人旅行記・京都博覧会・『覚馬名所案内』からの影響と、新たな付加価値と推薦箇所・行動が示された。『覚馬名所案内』の表現や数字が良く似ている所は、その都度示した。

5－4－1. A. 古い西洋人旅行記による影響

図版 7. で、古い西洋人たちが訪問した場所が特定されたため、その結果をもとに考察する。その中でも特に、三十三間堂、大仏（方広寺）という西洋人の訪問が多かった名所と耳塚について述べる。

A⑴は、TG と『覚馬名所案内』との共通部分であり、古い西洋人旅行記の影響があったことが確認された。図版 7.をみると、3 人の西洋人は共通して、5.三十三間堂㉑を訪問している。鎖国中にオランダ商館長江戸参府に随行した、ケンペルとツンベルグの江戸から長崎への帰り道では、5.三十三間堂㉑の他には 2.大仏（方広寺）⑲が訪問された。ケンペルは 1692 年には、それら 2 社寺に近い耳塚も訪問した。

三十三間堂は、12 世紀創建の宗教都市京都を象徴する国宝である。今回の調査で、三十三間堂の仏像の数の記述から、古い西洋人の参考文献からの影響が確認された。TG には「これらの像は 33,333 体あると思われる [The total number of these idols is supposed to be 33,333.]」との記述がある。江戸時代のシーボルトによる『1826 年の江戸参府紀行』を全訳した斎藤信は、シーボルトが記した 33,333 という数字について「ケンプッァー以来の誤りで、33,033 でなければならない。堂内には 1,001 体の十一面千手観世音菩薩の像があり、観世音菩薩は衆生済度のため必要に応じて三十三身を示顕する、と法華経にあるところから、33,033 体の観音として信仰されている（斎藤（訳）、1981）」と注の中で述べた。そのケンペルの誤りは、1690 年の訪問の際の記述に「仏像の数は 33333 体に及んでいる。それでこの寺は 33333 体仏の寺とも呼ばれている（ケンペル、斎藤信（訳）、1979）」とある。また、1692 年の訪問においても「すべての仏像の頭や手の上にある小さな仏像を加えれば、33333 体になるという」との記述がある。これらのケンペルの記述から、それ以前の誤情報の有無を遡って

調査すると、フロイスの 1565 年の書翰にも、同様の誤りが確認された。その部分は「この堂内に安置する観音像の数は 33333 体あるという（フロイス、柳谷（訳）、1966）」である。数字の誤情報が、フロイスの時代から後々の西洋人旅行記に、そのまま誤転載され続けたのである。

次に三十三間堂と大仏（方広寺）、耳塚の共通点は 2 つある。第 1 に位置的に大変近いことである。『国宝三十三間堂』によると、明治以前三十三間堂と方広寺を含む土地は、広大な妙法院の境内であった（妙法院門跡、2006）。大仏（方広寺）の正面には、おのずから興味深い石塔である耳塚は目につきやすい[13]。第 2 に、これらの 3 ヶ所は、京都を拠点とし、古い西洋人旅行記にも知られている、豊臣秀吉とのつながりが深い[14]。これらの理由から、3 ヶ所が 1 つのセットとして、西洋人観光客の興味を引いたと考えられる。新出の A⑶の高台寺も豊臣秀吉に関係する寺である。

さて長谷川雅世（2015）は、明治時代のイギリス人旅行者たちの旅行記に登場する重要な京都の寺々において、特に京都の大仏を取り上げ、方広寺の特異性は日本三大梵鐘に数えられる釣鐘にあった（長谷川、2015）とした。そして「鐘以外には大仏像が、イギリス人旅行者の興味を引いた（同書）」とし、その理由を「1798（寛政 10）年に落雷による火災のため消失し、明治時代の大仏は縮小された半身だけの像だった。それでも、大仏が方広寺を観光名所にしていたようである（同書）」と述べた。それでもなぜ大仏が明治期に観光名所であったか、という点について、図版 7.に示された西洋人旅行記の影響が考えられる。例えば 1776 年、焼失前の大仏をみたツンベルグは「誠に巨大なその大きさは、驚怖と尊敬の念を起こさしむるに充分であると、私は思った（ツンベルグ、1991）」と述べた。明治時代の大仏は、現実には半身しかなく、大鐘も野ざらしで無残な姿であったが、壮大な姿を伝える古い西洋人旅行記を先入観として持つ、TG や明治初期外国人旅行者にとっては、大仏（方広寺）は訪れるべき、感激を追体験すべき名所であった[15]。

TG には実際の大仏、または方広寺を見た感想はない。内部の盧舎那仏については、「160

---

[13] TG には、耳塚の記述は 5 行ほどと少ないが、KG には、耳塚は絵入りで紹介され、「変わった形の碑は上から、チャ＝天空、カ＝風、カ＝火、ワ＝水、ア＝地の順である。同じシンボルが日本の多くの墓に見られ、耳塚はわかりやすい例である（筆者要約）」と説明がある。

[14] 三十三間堂における桃山期の大整備（妙法院門跡、2006）、大仏（方広寺）創建、朝鮮出兵である。

[15] 同時に『覚馬名所案内』にも、良い状態とは言えない大仏についての記述がある。古い西洋人旅行記の影響、及び京都の人びとが、過去に重要な外国人ゲストを、もてなす場であった記憶が影響した可能性がある。

フィート（約 48.8m）あるとのことです [We are told that it measured 160 feet.]」 と『覚馬名所案内』と同じ数字を記述した。大鐘についての TG の記述内容には不確かな部分があり、実際に大鐘を見に出かけたかは不明である[16]。

A⑴の 24.知恩院⑤については、ケンペルの 1692 年の旅行記に、「とてつもなく大きな釣鐘の所に行ったが、それはモスクワにある二番目の巨鐘と同じくらいで、長さ、つまり高さがあまり長すぎていたので、均整がとれていなかった[17]」と、その大きさとユニークな形状に驚いた様子を述べた。TG においても、「京都の不思議の 1 つ」として、知恩院の大きな梵鐘は必見である、と紹介されている。

A⑵にある祇園④は円山、知恩院に隣接する現在の八坂神社である。大徳寺㊱とともに、削除原因は現在のところ不明である。

5－4－2. B. 京都博覧会による影響

次に B の京都博覧会による影響であるが、『覚馬名所案内』の影響を調査する中で、『覚馬名所案内』の刊行理由である京都博覧会が、大きく京都国際観光に影響を与えたことがわかった。B⑴には 11.西本願寺㉗、15.御室（仁和寺）㉟、24.知恩院⑤、26.27.御苑、宮城－御所③があり、B⑶には 1.建仁寺、20.修学院離宮、28.桂離宮、お茶屋遊びがある。これらは全て京都博覧会の会場、また関連して公開された皇室関連施設、格式の高い寺々であり、京都博覧会の附覧から発生した観光文化体験であった。

京都博覧会の開催された 1872 年までは、多くの西洋人の認識において、京都は帝が居住する閉ざされた都であった。兵庫港開港直前の 1867 年に刊行された、*The Treaty ports of China and Japan*…の中で、Dennys は「帝」について、「大変神聖な存在であり、天照大神の子孫であるこの人物は帝と呼ばれ京都（都ともいう）に住んでいる（筆者訳）」[This personage, who is held to be of an extremely sacred character and descended from the Sun-goddess, is named the Mikado resides at Kioto (or Miaco)…]（Dennys、1867）と述べた。今まで誰も見る事ができなかった施設、建物を訪問することは、旅行先の国での見る価値と行く価値のある、観光旅行の醍醐味であったと思われる。

---

[16]大鐘の寸法については、TG と『覚馬名所案内』と全く違っているが、KG では『覚馬名所案内』の数字に変更されているので、『覚馬名所案内』が後に参考とされたことは確実である。

[17] ケンペルはその寸法を「鐘の厚さは 1 尺、高さが 16 尺〈英訳本では高さ 16 尺 8 寸としている〉、周囲は 28 尺 8 寸であった」としている。

B⑴ではキーリングが京都博覧会の影響を受けて、実際に訪問したことがわかる御室御所と御所を取り上げる。

御室御所は仁和寺のことである。TG には直接見学した様子と感想[18]が記述され、「今まで帝の聖なる場所で非公開だったのが、急に一般公開されたため、数千人の人々が好奇心をもって来場した」と記述し、京都博覧会なしには、仁和寺が有名にはならなかったと考えられる。

御所については、『覚馬名所案内』では御所の利用はまだ初期であったため、詳細な記述はない。TG の時代になると、御所内の実際の見学の様子が明らかになった。京都在住の人から、参観順路についてアドバイスを受けた [A resident of Kioto tells the compiler that stranger entering the above gate, should visit the buildings in the following order]、と記述しているところが興味深い。当時の参観順路[19]は、現在は外から観るだけであるが、御所の建物内にまで開かれており、内部の美術品なども実際に鑑賞した様子が記述された。

B⑶の修学院離宮、桂離宮（桂宮御殿）は『京都の歴史 8』によると、「1879（明治 12）年（京都市、1975）」に一般の人びとの参観が許されたので、『覚馬名所案内』には掲載されていない。修学院離宮は庭園と木々の美しさと、京都の市中やその周辺が俯瞰できること、また桂離宮は最も人気のある場所の 1 つと記述された。両者とも簡潔に書かれおり、TG が実際に両離宮を訪問したかは不明である。

お茶屋遊びについて、京都博覧会での附博覧の 1 つであった「都踊」の影響は大きい。『京都博覧会史略』によると、都踊は明治 5 年の附博覧として創始され「特別入場料を徴取したもので、極めて広義の附博覧であった（大槻喬、1937）」とあり、「開場一番内外人の讃嘆を受け京都名物の一となった（同書）」。都踊として一般の京都博覧会参観客のおもてなしを担った芸舞妓たちは、それ以降外国人観光客に対してお座敷遊びという文化体験を担った。

5－4－3. C.文明開化の新産業

京都の文明開化の産業施設について、当時の最先端国であるイギリス人には、関心を持ったかどうかは定かではない。しかしキーリングは、TG に現地ガイドの案内や説明を反映

---

18 その部分は「大変薄暗い謁見室と帝の寝室、特に扉がしまった状態では、寝室は全く暗闇の中である」である。

19 内侍所、紫宸殿（儀式を執り行う所）、清涼殿、小御所、御学問所、御三間、御常御殿、建春、泉殿、聴雪、御馬場（競馬）であった。

させたようである。

C⑴の 18.西陣㊴には、京都の絹織物産業の進展がわかる部分がある。『覚馬名所案内』では、「外国産の品物よりずっと安価に生産され、価値ある品物として貿易された [As these are much more cheap than foreign ones, They are sent out from this city to others for a great value.]」記述があるが、TG には「安値の海外製品におされて、貿易で伸び悩む様子が見て取れる [Owning to the introduction of foreign goods, sold at considerably lower figures, the trade is now in a languishing condition.]」とあり、貿易の当初は順調に輸出されたものが、その後海外との価格競争に苦心していた状況であった。

C⑶の 1.建仁寺について興味深い記述がある。建仁寺は「1872 年に開催された博覧会会場の 1 つ」と TG には記され、「建仁寺の多数の芸妓 [geisha] が養蚕に従事」した様子を見学した。これは当時、女紅場[20]で芸妓たちが職業訓練を受けていた様子と思われる。

C⑶の多数の西洋風建築物は、将軍塚からの俯瞰により紹介された。鴨川の西側の堤防には、舎密局[21]、染殿[22]、舎密局付属の石鹸製造所があり、舎密局の上部には小さな白い塔、南には集産場[23]、織殿が見えると述べている。南西には大阪造幣局の煙突が見えると述べた。『覚馬名所案内』の銅版地図には「勧業場」はあるが、それ以外の新産業施設は確認できない。また当時最先端の小学校施設[24]を黒い点で示し、文明開化をアピールしたが、TG では触れていない[25]。

勧業場の織工場は、名所の 1 項目して挙げられた。「河原町の角倉了以屋敷跡の新築の立派な準洋式建物では、綿や絹製品が製造され、大量の絹製品がアメリカに輸出された。警察、兵士の制服がここで製造されている、隣接の庭園は特に美しい」と記述された。新産

---

20 女紅場とは、一般の華士族や一般庶民の女性が入学した「新英学校及び女紅場」であるが、「遊郭の女紅場も女子に必要な学問技芸を遊女に授けるため同時に設けられた （住谷悦治校閲、1976）」施設である。

21 「京都最初の化学研究所」で、理化学の講義と同時に、シャボン、ラムネ、リモダーデその他の文明開化を象徴した西洋風の産業施設であった（住谷悦治校閲、1976）。

22 染殿、織殿は京都織物会社の前身で「府は西陣その他の織物業者を刺激奨励して、その事業を改良進歩させるため、平安朝にあった織殿染殿の模範工場を起こした（住谷悦治校閲、1976）」。

23 原文は ‘Kioto Bazaar’ である。集産場は「京都のすべての名産品が陳列されて人々に縦覧（住谷悦治校閲、1976）」された場所であった。

24 遷都の後「京都の衰運を挽回し、もしくは防ぐには子弟に新知識を与えるのが何よりも急務（住谷悦治校閲、1976）」とされて、明治 2 年 5 月には日本最初の小学校が京都に開設された。その年の 12 月までに市内に 51 の小学校（中学校 13）が開かれた。

25 『覚馬名所案内』の地図には、小学校を小さい黒の四角で表し、地図の右下に ‘SMALL JAPANESE SCHOOL’ と説明をつけている。

業施設を紹介しつつも、イギリス人の国民的趣味である庭園鑑賞という付加価値があったので、E⑶にも該当する名所である。なお KG では織工場は記述が省かれることから、TG の時代ののち、京都のイメージは、文明開化の産業都市よりも、「古都」に近づくことが考えられる。

5－4－4. D. 観光地の取捨選択

ここでは『覚馬名所案内』にある名所の取捨選択が明確になった。

D⑴に分類した 35.琵琶湖については、『覚馬名所案内』では、従来の近江八景の美しい風景を紹介したが、TG では、京都とは別章に分けられ、「魅力あふれる美しい風景」と、大津京の歴史、唐崎の松を含む名所が簡潔に述べられた。ここでは、『覚馬名所案内』の「風流で美しい」と思う、近江八景の「見せたい」情報と、西洋人が安全で、スムーズに日本国内を移動するための「欲しい」情報へのシフトが見られる。TG は京都記述部分の概略において「京都は、行って良かった、と称賛される琵琶湖への小旅行ができる圏内」にあるとしながらも、琵琶湖の新情報として、湖港の紹介と、最新の旅行ルートである蒸気船航路を推薦し、京都から敦賀まで抜ける旅行手段を示した。琵琶湖は景観地でありつつ、重要な旅行ルートの役割を担うこととなった。

同じく嵐山㉝は、『覚馬名所案内』では嵐山自体の景観美を述べているが、TG では、主に新観光体験の保津川下りの下船場所であり、京都中心地のホテルに帰るための、大切な交通の便である人力車を回送しておく場所であった。

D⑵の、削除された名所については、はっきりとした理由はわからない[26]。しかし、本章 5－4－3 で述べた、東山にある将軍塚からの京都盆地の俯瞰で、見える範囲が関係した可能性はある。TG は俯瞰ののち、「京都の地勢がわかったので、以下に挙げた名所観光はより楽しくなりますよ」と述べ、個々の名所を紹介する。

D⑶には 10.東本願寺（再建 1895 年）がある。『覚馬名所案内』に無いのは、TG が「1864 年の内戦で大火となり、有名な 3 基の門も含めて建物は焼失した」と説明する、禁門の変が影響したと思われる。東本願寺で興味深いのは、同時代の HT が取り上げなかった、熱心な海外への布教活動を、独自取材で取り上げたことである。キリスト教信仰者たちにとっては、仏教の海外布教活動は大きな関心事であったと思われる。しかし例えば、田中まり（2004）によると、東本願寺についての HT の記述は「再建のための全国からの寄進、髪の

[26] 稲荷㉒については、KG の名所には入っている。

毛で作られた綱」があるのみで、布教活動についてはない。長谷川雅世（2015）は、イギリス人旅行記に頻繁に東本願寺が登場し、「一瞬それは奇妙に思われる」が、その理由は「再建中、あるいは、再建されたばかりの東本願寺を明治日本の仏教信仰の様を象徴するものとして観察した（長谷川、2015）」と論じた。中西直樹（2013）によると、当時東本願寺は日本「政府と協調してキリスト教の防止策を展開」していた。そして 1876 年には上海別院を開き、「毎日のように中国語による現地人対象の布教が行われたようである（中西、2013）」と述べた。TG による記述から、再建中ではあったが積極的に外に出て活動した、東本願寺の様子が明らかになった。

5－4－5. E. 推薦、付加価値

特に推薦する名所や体験については、西洋人の独自視線から付加価値が見いだされ、また読者に向けて強く勧めた場所や体験を挙げた。

E⑴については、3.八坂塔⑮、6.清水寺⑯、17.金閣㊲がある。

八坂塔については、ケンペルの 1692 年の訪問の際、「八坂の五重の塔の傍を通り」とある。TG では「最上階から素晴らしい風景が見られる」という付加価値があった。

清水寺は A⑴にもあり、フロイスが「ここには絶えず巡礼者が殺到し、すぐれた水の泉があり、ーー素晴らしい眺めをもった所で、日本で非常に有名である（柳谷（訳）、1966）」と述べるほど、鎖国以前に訪問した西洋人が感嘆するような名所であった。TG においても 、‘The Kiyomidzu is a delightful and picturesque spot’，と同じ感想を述べている。 新しい付加価値として、TG では縁結びの神である地主神社が登場した。「良き伴侶を探す未婚の男女が訪れる小さな神社」では、おみくじの効果的な結び方まで紹介された。また「清水には沢山の焼き物店が寺の参道にあり、最上の陶器と磁器が調達できる」と土産物情報を書いた。清水寺においては、風光明媚な景色に加えて、従来の寺社仏閣めぐりに、新しい魅力である愛の占いが加わり、効率的な土産物の購入ができるという観光環境が、付加価値として早い時点から組み込まれた。

また、清水寺の拝観人数については、『覚馬名所案内』との比較で、興味深い記述がみられた。『覚馬名所案内』の初版と後期の版との間には、本稿第 2 章（2－5－2）で述べたように、数年間での明らかな参拝者数の増加があった[27]。TG には「数千人」の規模と記述さ

[27] すなわち、『覚馬名所案内』の初版に思われる版では、1 日当たりの参拝者数が 20 人から 30 人、1877 年頃の後期のものでは 1 日あたり 100 人から 200 人、と情報が更新され

れ、それは「1 日あたり」という記述がないため比較はできないが、これら 3 冊が、特定の名所を訪問する人数に関心をもつこと自体も興味深い。

同じく、A⑴にもある金閣寺について、フロイスは「回廊がついた上層は全部金箔が押してあった」きらびやかな金閣内部を見学した。TG には、内部が拝観できた様子はないが、金閣寺は観光寺院として、明治期の早くから内外の観光拝観客対応が整っていた。また興味深い点が 2 点確認された。1 つは拝観料の存在である。TG の京都記述部分の寺社仏閣において、唯一「拝観料は 1 人 2.5 銭[28]で本堂の入口で支払う」システムがあった。2 つ目には、寺内には案内役がいたことである。案内役は「ガイド（少々のチップを期待している）[The guide’ (who expects a trifling fee)…]」と記述された。寺内ガイドに連れられ、実際に見学した時の拝観順路は[29]、現在もほとんど同じである。使用言語は不明であるが、国際観光の早い時点から拝観中に寺内ガイドをつける、という付加価値があった。

E⑶については、まず初めに、土産物購入について述べる。

『覚馬名所案内』では、清水焼の陶器、西陣織のショールなどの絹製品、宇治の茶を挙げている。TG では、粟田焼または七宝焼といわれる磁器、漆塗製品、銅製品、絹、ちりめん、刺繍製品、扇などの特産品を大変有名だと薦め、土産物購入自体が重要な旅の目的として紹介された。これにはケンペルの「京はいわば日本における工芸や手工業や商業の中心地である[30]（ケンペル、斎藤（訳）、1979）」と記述されたことから、京都が鎖国中にも、工芸、手工業、商業の中心地であって、優れたお土産の聖地であったことを、TG は良く認識していたと思われる。KG では「どの訪問者も一日は十分な時間を取って、窯元や刺繍業者に見学に行くべきだ」と、わざわざ追加されることから、TG の時代は、まだ土産物購入がブームとなる初期の段階で、その後より盛んになったと思われる。

眺めに関しては、本章 5－4－3・5－4－4 でも触れた、将軍塚が特に推薦された。『覚馬

た。

28 当時の 1 円の価値については、色々な数字が挙がるが、例えば三菱ＵＦＪ信託銀行株式会社のホームページでは明治時代の 1 円は、「現在の価値に置き換えると 2 万円ほどであったと想定されます。当時の 1 銭が現在の 200 円の価値と同じ[28]」としている。そうすると金閣寺拝観料は 500 円である。矢野翔一監修（2019 年 12 月 18 日）「『円』や銀行の誕生など！明治時代のお金にまつわる豆知識」三菱ＵＦＪ信託銀行株式会社 https://magazine.tr.mufg.jp/90086#　最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。

29「義満が沐浴や歯磨きをした場所や、茶を点てるための取水口といった史跡を案内した。滝の上の平地になった所には、小沼に小さい島があり、昔々にはここに有名な白蛇が住んでいたといわれ、それを示す記念碑がある」と記述された。

30 他にも「京都の工芸品は全国に名が通っていて（中略）旅行者は誰もが自分か他の人のために何かを買い込み、それを持って立去って行く」という記述がある。

名所案内』では、円山地区の高台のホテルからの眺めを薦め、同時に京都盆地を真上から真下に撮影したような、詳細な銅版地図を目次の次に添えた。TG には京都市内の地図はなく[31]、京都盆地と各々の名所の方向がより鮮明に俯瞰できる将軍塚に上るよう強く推薦した。「人が通れるように整備されており全く問題なく登れる[32]」と述べ、キーリング自身が将軍塚に上り、そこからの眺望を気に入ったようだ。

祭りについては、大文字送り火（“Bon” fires）を将軍塚から鑑賞して、「8 月 16 日の夜は特に鮮やかである [The evening of the 16th of Agust (sic.) every year, is particularly brilliant.]」と読者に推薦した。実際に送り火を見ながら、地元の人やガイドに質問して書いたと思われる記述がある。例えば ‘Ichiwa’という地区の始めの一文字を表す文字があるという記述である。現在は失われた送り火の存在[33]が、明治時代の西洋人による英文ガイドブックからわかり、大変興味深い。

キーリングの祭紹介には、祇園祭がない。例えば HT においては、京都の代表的な祭の 1 つとして紹介される。祇園祭は、1879 年の夏、コレラ流行のため、秋に延期[34]された。京都取材旅行期間の可能性も含め、後述する。

30.急流下り（保津川下り）という自然冒険体験は、寺社仏閣めぐりが主な京都観光であった外国人が、飛びつくような心躍る新観光行動であった。出発点の城下町亀山は、明治 2（1869）年 3 月 25 日、「伊勢国亀山との混同をさけるため丹波国亀山を亀岡に改称（京都府立総合資料館、1971）」されたが、TG では ‘Kameyama’ と書いている。

TG は実際の行程管理として、京都での人力車の手配、人力車を舟に載せた場合には費用がかかること、人力車を嵐山下船場まで回送させる知恵、 ‘coolies’である荷物運び人の手配、到着時の茶屋での休憩、軽食、適切な船乗り場の選定などを説明、紹介し、ガイドブックとして読者に多大な安心感と期待感を与えた。しかし記述の中には、不安点も見受けられる。例えば京都から亀岡への道中、人力車からの降車が必要な険しい場所があるという点、「沓掛から山本乗船場まで歩く」という旅のヒントであるが、実際には長距離のため、

---

31 KG には、ごく簡単な京都市内の地図がついている。

32 筆者は 2020 年 5 月 18 日、実地調査で円山公園から将軍塚展望台まで登った。徒歩で 40 分の時間を要した。道は湿って草木が茂り石段の道は手入れがされず壊れかけた所もあったが、それは現在ほとんどの人びとが自動車道を使うためである。調査の結果、TG の述べたように、当時は将軍塚に徒歩で上ることは可能であったと思われる。

33本稿第 4 章（解題）を参照されたい。

34 「明治 12 年（1879）6 月からコレラ流行につき、祭礼 11 月に延期（「祇園祭山鉾巡行　明治からの変遷」祇園祭ボランティア 21（n. d.）」とある。
http://www.gionmatsuri.jp/volunteer/seminer/hensen1.htm 最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。

徒歩では少し、無理があるようにも思われる点である。

TG の保津川下りでは、この自然と冒険の体験を自身が大変気に入り、主観的、また独自性を持って記述された。それらを確実にするために、HT の記述との比較を行ったところ、HT は行程管理、経費などの客観的情報が明確に述べられたが、個人的な感想は見当たらない。TG には川下り中のスリリングな舟の動きや水しぶき、困難に立ち向かう船頭の様子が記され、あたかも旅行体験談を読者が追体験することが目的となっている。文章の最後には「女性の皆さん、この急流下りを怖がる必要はありませんよ。今までに事故があったかどうか、聞いたことはありませんので」と英国紳士のウィットを利かせながら女性も観光者であると明記した。

西洋人の保津川下りについて、保津川遊船企業組合（n. d.）の船乗り場に掲げられた説明によると、「1920 年にはルーマニア皇太子、1922 年英国皇太子 [...the Prince of Romania in 1920 and Prince of Wales in 1922...][35]」が川下りを楽しんだ。また、保津川遊船企業組合のホームページには「明治 28 年頃から、遊船として観光客を乗せた川下りがはじまった（保津川遊船企業組合（n. d.）」と説明があることから、TG は、世界で初めて英語で保津川下りを紹介し、西洋人観光客の保津川下りが、有名になる契機を作った可能性は大きい。保津川下りの始まりについては、不明点が多いので調査を続ける。

最後に F⑶の新出の名所は、8.明暗寺、13.神泉苑、14.愛宕権現である。しかし、TG が実際に訪問したかどうか、またなぜ選んだのか、意図不明確な名所である。東福寺塔頭・善慧院の公式ホームページによると、「明暗寺は、禅宗の一派・普化宗のお寺で、『虚無僧発祥のお寺』として知られて[36]」いる。例えば『大君の都』の挿し絵[37]（山口、1997）にも登場するため、イギリス人には、奇妙で興味をそそる職業であったと思われる。愛宕権現については、TG の「東京」記述部分において、絵のように美しい風景を全方向で見晴らせる場所として、東京の愛宕山を紹介し、実際に登った様子がわかる。そのキーリングの愛宕山への親しみが影響し、京都の愛宕権現を紹介した可能性は考えられる。

以上のような分析と考察を行い、TG には西洋人の嗜好や、観光すべき価値のある観光地、

---

35 Prince of Wales は後のエドワード 8 世（Edward VIII, 1894－1972）である。

36 東福寺善慧院（n. d.）「東福寺　善慧院（明暗寺）について」 http://tofukuji-zennein.com/pg65.html　最終閲覧 2022 年 2 月 24 日。

37 訳者山口光朔は、訳者まえがきに、オールコック自身が「多少画才を有し（中略）写生ないし日本の木版画を模写した（中略）幕末期日本の風俗を知るためのきわめて貴重な史料」だとしている（山口光朔訳（1997）『大君の都（上）オールコック著』岩波書店、8－9 ページ。

観光行動が選択され、編纂者自身の旅行体験記とも思える記述が認められた。

5－5. まとめ

本章では、イギリス人による日本初の英文日本ガイドブックを、京都記述部分に限定して、日本人による日本初の英文京都ガイドブックとの比較分析を行い、古い西洋人旅行記の影響と、京都の人々の国際観光政策が TG に与えた影響、そして TG が西洋人嗜好のまなざしのもと、取捨選択し新たに付加価値をつけ、新観光行動を推薦した経緯と理由を明らかにしようとした。

その結果、TG の選んだ名所は、明治初期からその名所選定が始まったのではなく、すでに古い西洋人の京都名所訪問の記録が、西洋人読者の先入観として、強く影響したことがわかった。そしてキーリングは、それらの名所の数々を追体験したい、という西洋人観光客の思いを、TG に反映したことが明らかになった。実際には大仏（方広寺）はその状態が良くなくても、明治時代初期の京都において、訪れるべき憧れの名所であった。TG は限られた旅行期間内に、西洋人観光客がいち早く、書物でしか知りようのなかった、それらの名所を的確に訪問できるよう、説明を加えて編纂し、それが実際の明治期の西洋人観光につながった。三十三間堂の仏像数の間違いの連鎖は、旅行記がそれ以前の旅行記を参考にし、情報を得て発展していく過程で起こった。

比較対象とした『覚馬名所案内』については、TG の内容に、『覚馬名所案内』の説明内容、英語表現、対象物の寸法など、記述と似た部分は存在した。しかし、同じ名所の調査をすれば、一般的には同様の記述になるので、一概に『覚馬名所案内』から直接、文献として引用したとは言えない。ただし名所選定、及び各々の名所の見どころの参考にされたことは確実である。

編纂者キーリングの京都取材期間について、TG は触れておらず、特定は難しい[38]。しかし、3 つの手がかりを確認した。1 点目は、本章 5－5－1 で示したキーリングの雇いの契約期間において、1879 年 8 月のひと月は、契約から外れていること[39]、2 点目は、本章 5－4

---

[38] キーリングが、祇園祭を実際に見学しないと書けなかったのか、という疑問については、キーリング以前に発行された西洋人文献の中の、祇園祭の記述の有無を確かめる必要があった。そうしたところ、TG の元本である SN に記述があったので、本稿第 6 章で述べる。

[39] ユネスコ東アジア文化研究センター（1975）『資料御雇外国人』によると、それ以前は、1878（明治 11）年、千村五郎（同人社）によって、8 月 1 日から 12 年 1 月 30 日まで、1877（明治 10）年は三重県士族近藤真琴によって、7 月 1 日から 12 月 31 日まで雇われ

－2 で述べた、離宮の参観が同年から始まったこと、3 点目は、本章 5－4－5 で述べた、有名な祇園祭が、同年の夏は延期になったが、大文字送り火は催行されたことである。これらの手がかりから、初版刊行前年の 1879 年夏の可能性はあると考えられる。

本章の調査の過程において、『覚馬名所案内』の影響以上に、『覚馬名所案内』の母体である京都博覧会が、TG の内容に大きく影響したことが明らかになったのは、大きな意味を持つ。京都博覧会の会場となった宮城、離宮、格式の高い寺社仏閣は、京都博覧会の「お墨付き」を得、内外の博覧会参観客に、壮麗な建物、所蔵する芸術品や重要な品々を見せ、「千年の都京都で観るべき」名所として認識された。京都博覧会が継続的に開催されたことは、京都が安定した、信頼できる国際観光地である認識を西洋人観光客にもたらした。

「鳳駕御東遷の後を受け、満都の市民色を失して茫然為すところを知らざるに際し、狂瀾怒濤の大洋に敢然と棹した豪商三井八郎右衛門、小野善助、熊谷直孝の三氏は（中略）1 つには産業振興のため､また 1 つには今日でいう観光都市として生きんがため(原文ママ)、茲に京都博覧会の開設を企劃したのが実に明治 4 年の夏であった」と『京都博覧協会史略』は述べる。その後、京都博覧会、京都の生存を賭けて、国際観光事業成功のためのツールとして制作したのが、『覚馬名所案内』である。

『覚馬名所案内』の序文（本稿第 1 章を参照）には山本覚馬が、観光目的以前の商業・貿易で京都を訪問した西洋人に照準を当て、その嗜好を推量し、日本側からの「見せたい、売りたい」京都をアピールし、その後帰国した西洋人が、自国で京都観光の体験を広め、その結果京都に対する興味と憧れを高めた観光目的の訪日客が、増えることを期待した部分である。TG に京都側の思惑が反映されたことで、京都博覧会の目指す国際観光戦略は成功した。

TG には、当時の産業都市京都の姿が描かれ、観光の付加価値については、占い、ショッピング、寺内ガイド、音楽、花木、庭園など、キーリングの興味と嗜好に基づいた主観的記述が含まれた。附覧から始まった芸舞妓のショーやお座敷遊びは、西洋人の京都観光行動において安心して楽しめる定番となった。特に、川下りという自然体験はキーリング自身の旅行体験記であり、読者にとっては心躍る京都観光の新たな魅力、憧れとなり、京都の観光価値を高めた。

『覚馬名所案内』が参考にした文献について、古い西洋人旅行記の影響や、京都の人び

た記録があるが、夏季休暇の有無についてどちらも記述がない。それ以前の記録では、8 月を除いて、雇われた記録がある（明治 8 年は雇いの記録自体が無い)。

とが、過去に重要な外国人ゲストをもてなす社寺があった記憶が、影響した可能性が明らかとなった。『覚馬名所案内』、TG で挙がった名所とともに、今後も調査を続ける。

TG の京都記述部分は、西洋人が、16 世紀からの京都訪問記から得た知識を先入観としてもった「追体験したい京都」と、明治初期の京都における、国際観光都市という手段で生き抜くための日本側の「魅力ある京都」の売り込みが複合し、編纂者キーリングの新たな感動や感想を率直に描いた新名所、新観光行動が加わったものである。

TG は、京都国際観光の黎明から、一歩前進した明治初期の京都の姿を知るための、貴重な歴史史料であり、旅行体験記である。

第 6 章　*Stray Notes on Kioto and Its Environs*. (1874, 1876, 1878) についての研究

6－1.　はじめに

明治初期の京都観光ガイドブック刊行の歴史についての研究を進める内に、1874 年を皮切りに、少なくとも 2 回の改版・改訂を重ねた、*Stray Notes on Kioto and Its Environs.*（以下、SN）という京都英文ガイドブックの存在が明らかになった。現在筆者が把握する、1873 年代から 1891 年までに刊行された、英文京都・日本ガイドブックの情報については、本稿序論 4. にある。

本稿第 8 章には、SN 改訂第 2 版の項目である「急流」は、TG の「急流」のオリジナルであったことを明らかにした。そのことから研究を進め、SN は TG の元本であり京都名所の大部分が抜き出され、TG として新しい出版物の 1 部になった、と考えるに至った。また特に SN 初版は、『覚馬名所案内』の影響を名所選定において受けた可能性があり、その他 SN には、TG において削除された部分に重要な記述がある、と考えた。これらの仮説をもとに、SN の制作背景・内容を詳細に調査し、SN の歴史的史料としての重要性、刊行前後のガイドブックとのつながりを調べる。

KS[1]について述べると、筆者が SN を未見であった時には TG が元本でそれの再編集物である、と考えていた。KS は、SN 初版・改訂第 2 版と同じく印刷・発行がヒョーゴ・ニュース（*The Hyogo News*, 以下ヒョーゴ・ニュース）であり、京都名所部分については、SN 改訂第 2 版と同じ内容を踏襲している。関西圏の充実した情報を述べているため、SN が 1889 年の段階で、KS としてより発展した形になったと言える。

6－2.　先行研究

SN は前述したように、大変重要な存在であったのにも関わらず、今まで一般的に知られていたとは言い難い。

例えば、長坂契那（2010）は、TG の序文に「既に、『横浜案内』や『東京案内』、『京都案内』などの優れたガイドが出版されている[2]」と書かれた部分を指摘し、京都記述部分については『覚馬名所案内』を指す、とした。

---

[1] KS の寸法は、縦 13.5×横 10.5cm、幅 12cm、本文 163 ページと広告がある。
[2] 原文は、“Some very good guides have already appeared in print such as the Guide to Yokohama, Guide to Tokio, Guide to Kioto, etc.’（1880, Preface）である。

本論第 5 章においては、先述した TG の序文にある「京都案内」について、それが『覚馬名所案内』である、という確証は今一つ得られなかった。そのため TG の内容における不明確点について、さらなる調査の必要性を述べた。

伊藤久子（2009）は、本格的な日本観光ガイドブックの最も早いものについて、「マレーのハンドブック[3]刊行後は、単にそのダイジュスト版のようなガイドも刊行され、キーリングのガイドブック[4]もその類とみなされる傾向があったようだ。しかし（中略）初版はキーリングの方が早く、とくにマレーの第 2 版と第 3 版の間の 7 年間の空白期には、キーリングのガイドブックが版を重ねていて、その需要が高かったことがうかがえる」と、TG の重要性を述べた。伊藤による「キーリングのガイドブックが版を重ね」という部分は、TG 初版からタイトルを変え、その第 4 版 2 刷である KG まで確認できる、キーリングの旅行案内シリーズを指す。この伊藤の論から、HT 刊行後は、HT を「ダイジェスト」した編集物があったものの、TG はオリジナルであるとして TG が元にしたガイドブックについては言及がない。

SN 初版・改訂第 2 版の印刷は、ヒョーゴ・ニュースが行った。堀博・小出石史郎が *The Japan Chronicle, Jubilee Number 1868-1918* (以下 JC)[5] を共訳し、土居晴夫が解説を述べた『ジャパン・クロニクル紙ジュビリーナンバー神戸外国人居留地』(1980)（以下『神戸居留地』）は、ヒョーゴ・ニュース及び、神戸居留民の京都博覧会への興味について詳しい。土居晴夫 (1980) によると、『神戸居留地』の「原本 “JUBILEE NUMBER 1868-1918” は大正 7 年（1918）に神戸の英字新聞『ジャパン・クロニクル』社（The Japan Chronicle）から発行されたが、神戸居留地を外国人側から描いたものとして唯一の貴重な史料と言える」とされる。『神戸居留地』によると「ジャパン・クロニクル紙の前身は 1891 年創刊のコーベ・クロニクル紙で、1899 年にヒョーゴ・ニュース紙の後身であるヒョーゴ・イヴニング・ニュース紙を吸収合併し、1901 年に紙名を改めた。ヒョーゴ・ニュース紙の創刊は 1868 年であるから、この『ジュビリー・ナンバー』は創刊 50 周年記念特別号であり、同時に神戸開港 50 年史ともいえる」とある。

SN 第 2 版を出版したのは、横浜のウェトモア社である。横浜開港資料館（編）によると、「日本だけを対象にした単独のガイドブックの初期のものは、都市案内だった。1873（明

---

[3] 本稿においては、HT 初版・第 2 版である。
[4] 本稿においては、TG、KG である。
[5] JC の寸法は筆者の計測によると、縦 35.0×横 24.0 センチメートル、厚さ 0.7 センチメートルである。

治 6）年に山本覚馬の京都案内が出て、その翌年にグリフィスの『横浜ガイド』と『東京ガイド』（ともに横浜、ウェトモア社、1874 年刊）が出た（2001）」とあり、ウェトモア社は同時期に横浜、東京という都市案内を手掛けていた出版社であった。

The Diaries of Sir Ernest Mason Satow 1870-1879. (Ruxton, 2015)（以下『サトウの日記』）1879 年 12 月 1 日付の日記には、SN についての記述がある。SN はサトウが HT 刊行のため、京都取材旅行中に読んだガイドブックであった。

川内有子（2020）は、『覚馬名所案内』についての論の中で、庄田元男訳『日本旅行日記』から SN の存在を指摘した。川内は SN 第 2 版について、「この本も旅行案内書としての実用性を重視したものではなかったと思われるものの、各名所の歴史やエピソードについてはしっかりと筆を割いており、読み物として制作されたものだと言えるだろう（2020）」と述べた。

これらの先行研究を踏まえ、本研究において SN についての詳細な調査を行い、SN が『覚馬名所案内』と TG の間隙を埋める重要な歴史的史料であることを明確にする。また、SN が『覚馬名所案内』から受けた影響の有無や、SN が TG の元本であることを明らかにする。そして、SN の視点から見た明治初期の京都国際観光の進展についての研究を深める。日本語訳は特に言及のない限り筆者による。必要に応じて日本語訳内の[　] 内に原文を示した。

6－3. 研究方法

始めに SN の概要とその制作背景を調査する。その後 SN シリーズを中心として、前後に刊行されたガイドブックの名所をグループ分けし、名所選定における『覚馬名所案内』の影響の有無、及び本論第 4 章・第 5 章に述べた TG の不明確な点を、SN から比較し検証する。そして京都国際観光の進展を SN から考察する。

6－4. SN について

筆者が計測した SN 改訂第 2 版の寸法は、縦 20.0×横 12.7 cm である。合計 46 ページの冊子で、著者の名前は見当たらず、表紙下に兵庫の「『ヒョーゴ・ニュース』オフィスにて印刷」とある。SN 初版も同じく兵庫にて「印刷」[6]されたが、SN 第 2 版は「横浜：F. R. ウェトモア社の出版」である。

---

[6] 国立国会図書館所蔵本の SN 初版の複写からは確認できないが、国立国会図書館の書誌情報には、「出版事項 Hiogo,：Printed at the"Hiogo News"Office」と記されている。

現在の調査において、初版と第 2 版の内容の違いは見当たらない。ただし 1 ページあたりの文字数は、初版は約 66 文字×48 行、27 ページであったが、第 2 版では約 48 文字×29 行と少なくなり、ページ数は 55 ページに増えた。改訂第 2 版では約 60 文字×46 行である。改訂第 2 版には大幅な訂正・加筆・新しい項目の追加と削除があることを本章の調査で確認した。

6－4－1. 新出史料 SN を知り得た経緯と SN 初版の編集後記

『覚馬名所案内』から TG に至る 7 年間について、より詳細な研究を進めていたところ、1879 年 12 月 1 日付の『サトウの日記』に SN についての記述を確認した。

サトウはこの日、HT 出版に向けた取材旅行のため京都に向かった。急いで京都行の列車に乗ったサトウは ‘forgetting my blanket and the Kiyauto Guide, which I had intended to read in the train’. (同書)（移動中に読もうと思っていた京都ガイドを忘れてしまった）と記した。続く 12 月 2 日付には、該当するガイドブックは荷物とともにサトウのもとに届いていたようであった。サトウは西本願寺見学を堪能したのち、 ‘then Koushiyau-zhi [Koshoji 興正寺] and Hon-koku-zhi [Honkokuji]’ of w[hi]ch latter the “Stray Notes on Kioto” gives a very erroneous account’.（同書） （そして興正寺と本圀寺を見学したが、後者については SN の説明には大きな間違いがある[7]）と記した。

SN 初版の最後には、二重線で本文を終えた後、編集者の編集後記らしき記述がある。これは第 2 版、改訂第 2 版のどちらにも見当たらず、SN 刊行のきっかけを表す重要な部分であるので、日本語訳を示す。

> この冊子の編集が終わりました。私は、これから京都を旅行する方々が、興味を持つだろうと思う名所を色々巡り、それぞれの起源や歴史についての知識がありましたが、何も行動に移していませんでした。実際に見聞きしたことをそのままを書いただけの冊子ですが、私の足跡をたどりながら読んでくださった方々が、後になって日本での夏の休暇を、地球の遥か彼方で楽しく思い出してくださると、この冊子は目的を十分に達成したことになるのです（1874）。

---

[7] なお、該当部分において、本章 6－2 で示した庄田（1992）の訳は「それから興正寺と本圀寺に行ったが、本圀寺の「京都そぞろ歩き」［Stray Notes on Kioto］という案内書はかなり詳細な情報を備えている」である。『サトウの日記』の原文とは相違がある。

この編集後記から、SN の編集者は京都在住であったか、常日頃京都の名所に慣れ親しみ、詳細を調べていた人物であったと考えられる。

6－4－2. SN の時代・制作背景：『神戸居留地』より

SN 初版・改訂第 2 版は神戸、第 2 版は横浜で発行されたことから、SN は神戸居留地を中心とする関西はもとより、横浜、東京方面の西洋人たちにも広く読まれていたと考える。『神戸居留地』より SN の時代・制作背景をまとめる。

「『ヒョーゴ・ニュース』は以前に『ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド[8]』の植字工であったフィロメーノ・ブラガにより週間新聞として、開港 4 ヶ月目の 1868 年 4 月 23 日、創刊号が出された[9]。編集者は米国人ジェームス・E・ウエンライト[10]であったが、その後フランク・ウォルシュ[11]が『ヒョーゴ・ニュース』を買収し、新たな第 1 号を 1869 年 5 月 6 日に出した（同書）。」ブラガがいつまで『ヒョーゴ・ニュース』に関わったのかは不明であるが、SN の刊行時期の 1870 年代は、少なくともウォルシュはヒョーゴ・ニュースのトップとして運営に関与した。実際の記者達についての情報は不明である。

翻って当時の京都の状況は以下のようであった。

> ともあれ聖域京都と奈良は神戸と大坂の居留民の訪問を長い間拒み続けていた[12]。（中略）しかし、この年政府は、この国最初の博覧会を京都で開催し、一般の外国人にも見物を許可した。この時から外国人の京都訪問の許可証が手に入れやすくな

---

8 開港してまだ 1 週間も経たない 1868 年 1 月 4 日火曜日に第 1 号を発行したのが、「ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド」である（『神戸居留地』）。

9 JN の原文は、'The Hiogo News was established as a weekly journal by Mr. Filomeno Braga, a Portuguese, who had formally been a compositor in the office of t*he Hiogo News and Osaka Herald*. Its first issue appeared on the 23rd April, 1868'. である。

10 JC によると、James E. Wainwright である。

11 JC によると、Frank Walsh である。同じく JC によると'Mr. Frank Walsh, who had previously issued a small paper in Nagasaki called the *Nagasaki Times*' であった。またウォルシュは、 'In 1888, Mr. Frank Walsh retired and went back to England, where he died in 1916'. である。

12 入京した最初の外国人については、「1868 年 9 月ワッツという若いアメリカ人（同書、183－184）」が試み、無事に京都に入ったが、「京都で商売をしようとした外国人最初の試みは、あえなく失敗（『神戸居留地』）」したようである。「日本の役人の取扱いはていちょうで、待遇も悪くはなく（同書）」であった。

った。パスポートは各地の県庁で発行されたが、あくまでもそれは商売のためではなく保養、学術研究の目的に限られていた（同書）。

神戸居留地の西洋人が、京都を目指し京都博覧会を観覧した様子が、例として J・K・ドレウェル（Drewell）夫人、P・S・カベルドウ（Cabeldu）氏の受けたインタヴュー[13]にある。ヒョーゴ・ニュースの記者も又、神戸居留民をはじめ駐日西洋人たちの京都観光熱とビジネスへの期待をいち早く察し、京都に赴き取材を行ったことは十分考えられる。

6－5. SN の京都記述部分

筆者は SN 初版の名所を中心として、『覚馬名所案内』から SN、TG において取捨選択された名所を調査するために、以下の A、B、C、D、E のグループ分けを行った。それらのグループを用いて、TG の不明確な記述をオリジナルだと思われる SN の記述で確認する。SN 初版には京都観光の基礎情報と、51 ヶ所の名所、The bridges（三条大橋を含む市中にかかる橋）、amusement（娯楽）と locomotion（交通手段）があり、分析項目に含めた。

6－5－1. 『覚馬名所案内』から始まる名所

グループ A は、『覚馬名所案内』・SN にあるが TG では削除された名所である。このグループは、名所選択において『覚馬名所案内』の影響を直接受けて選択された可能性がある。「嵐山」・「橋（三条大橋を含む）」・「大徳寺」・「伏見稲荷」・「祇園社」・「比叡山」・「本圀寺」・「八幡の石清水」・「鴨川」・「北野」・「黒谷」・「梅宮」・「南禅寺」・「大津・堅田・比良」・「清涼寺」・「真如堂」が該当する。

「伏見稲荷」については、当時の入京の人流と深く結びついているため、本章 6－5－3 に述べる。

「祇園社」は、現在の八坂神社である。TG では削除されたが、重要な項目であったことが次の 2 つの理由により明らかになった。それは第 1 に、本章 6－5－4 で述べる古い西洋人旅行記の影響である。第 2 に、祇園祭についての記述がみられたため本章 6－5－5 に述

[13] JC の ‘Interviews with Old Residents’ によると、両者とも 1872 年の京都博覧会を観覧した。例えばドレウェル夫人は ‘We went in jinrikisha, but returned in state in a carriage which had been displayed at the exhibition. Instead of horses, however, we were drawn by ten coolies’、カベルドウ氏は、 ‘The hotel at Kyoto was situated in very fine grounds and many foreigners availed themselves of the opportunity to see the ancient capital’. と語った。

べる。

「梅宮」においては、『覚馬名所案内』にある ‘Mumenomiya’ が、SN 初版と第 2 版に使われた。しかし、本稿第 1 章「目次」において、梅は「平安以後『むめ』と表記した例がかなり多い」ことを指摘した。『覚馬名所案内』の独特な綴りが、西洋人話者の SN に引き続き用いられた可能性が高い。SN 改訂第 2 版では ‘Umenomiya’ に訂正されたことからも、『覚馬名所案内』の影響を窺わせる。

グループ B は、『覚馬名所案内』、SN、TG まで続く名所である。このグループ B は、第 5 章で指摘した、江戸時代、並びにそれ以前の西洋人旅行記の影響（以下、古い西洋人旅行記）、京都博覧会、『覚馬名所案内』の影響があり、明治初期に定番とされた名所である。それらは、「京都について」・「大仏」・「琵琶湖」・「知恩院」・「御所」・「上賀茂」・「金閣寺（衣笠山を含む）」・「清水」・「清水焼」・「円山」・「耳塚」・「西本願寺」・「西陣」・「西大谷」・「御室御所（仁和寺）」・「若王子」・「蓮華王院」・「泉涌寺」・「下鴨」・「東福寺」・「東寺」・「宇治」・「八坂（塔）」である。

「京都について[14]」の京都の人口についての TG の記述には「誇張された人口（1880）」があった。何を元に調査したか不明であるが、それは SN 初版の原文にあったことを確認した。その部分は次の通りである。‘It was supposed, not having any regular census, to contain over one million houses and two millions of inhabitants; this probably included the neighbouring villages’.(1874) （定期的な国勢調査が行われていませんが、100 万戸以上の世帯と 200 万人以上の住民がいると思われていました。この中には近隣の村々も含まれていたと思われます。）TG は「近隣の村々」の部分を削除して、そのまま人数だけを示したので不明確な文章になった。続けて SN 初版には、「神社」は約 100 社、「神主」は 300 人、「寺」は約 250 寺、「坊主」は 15,000 人を少し下回る数、7,500 人の花柳界で働く女性、とあり、TG はその記述をそのまま使用した。SN 改訂第 2 版ではそれらの数字が修正されたが、TG は初版の数字のままである。SN 改訂第 2 版の新情報は以下の通りであった。

> According to a late census the number of houses in Kioto proper was 60,000, with a population of 240,000; the number of houses in the whole Fu, which includes part of the district of Tamba, Tango, and the large towns of Fushimi and Yodo, was 187,481, containing 792,795 inhabitants, 396,986 being males and 395,809 females. (1878)

[14] 実際の項目はなく、筆者が便宜上つけたタイトルである。

上記の原文は当時の国勢調査を反映させたものだと考える。第1回日本帝国統計年鑑1882年の統計によると、1880（明治 13）年の日本の人口において、京都府は 82.2（万人）であった（浅井建爾、2021）。上記の ‘792,795 inhabitants’ とも近い数字である。神社、寺に関する数字は削除された。花柳界の女性については、名所紹介が終わる最終ページに近い「京都府」についての部分で ‘There are about 500 dancing and singing girls in Kioto, who pay a monthly tax of one yen per head’. (1878) とあり、税金について記述がある。これらの女性並びに ‘The Joro’ 、お茶屋などは税金を払い、それらの税金は全て病院建設の資金になる、との詳細が記された。

「御所」の建設と災害後の再建の歴史についての説明において、TG の記述には、唐突に後醍醐天皇及び豊太閤が登場するが、SN においては、後一条天皇（1008－1036）、後花園天皇（1419－1471）に至るまでの大火が語られ、自然に後醍醐天皇の再建につながるものである。「四神相応の地」についての SN の説明は、TG では省かれた。

「大仏」については、TG の「今でも『文（ぶん）』という文字でわかるかもしれません [which may still be recognized by the character 文（bun）] の部分が、意味が不明瞭であった。しかし以下の SN 改訂第 2 版にはわかりやすい説明があった。原文と日本語訳を以下に示す。

> ‘In 1648, during the reign of Gosai-in, the treasury being empty, Iyetsuna Shogun, great grandson of Iyeyasu, took the image down and melted it into cash. Many of these are still in circulation, and may be distinguished by having the character 文 (bun) on one side, a contraction of the name of the year in which they were made. (1878)’

1648 年、後西院の時代に国庫に金がなくなったため、家康の曾孫である将軍家綱がこの像を取り下げて溶かし、現金にしました。この貨幣は未だ多くが流通していますが、年号を短縮した「文」の字が片面にあるのでわかります。

「知恩院」については、TG では「伝説」や「逸話」などがあると述べながら、それ以上の説明がなく、不足を感じるものである。SN には円光大師の家族、誕生の時の伝説である ‘At the time of the birth a purple cloud floated in the sky, and two white flags fell therefrom, which lighted upon the top branches of a tree’. (1874) （誕生の時、空に紫色の雲がたなびき、2 本の

白旗がそこから落ちてきて、木の上の枝が光った)、や " 'It is only a lone boy that has arrived; but his intelligent features are worthy of Monjiu' "(同書) （やってきたのは少年一人だけであったが、その知的な顔立ちは文殊菩薩に値する）から始まる、円光大師の優れた人物の様子が記述され、詳細な記述があった。

「銀閣寺」については、TG の「禅僧は（中略）貧しくなって、今ではほとんど物乞いのようである。そしてこの名所は徐々に廃墟のようになっている」の部分が不明瞭であった。TG に削除される前の SN 改訂第 2 版の原文を以下に示す。

> The temple in these grounds takes its name from its having been originally covered with silver leaf, though but little of the precious metal remains at the present date. [Since the above was written the Buddhist priesthood have become poorer and poorer,…]（1878）

この境内にある寺はもともと銀箔で覆われていたことに由来した名前がついていますが、現在では貴重な銀の痕跡はほんの少ししかありません。[この事が書かれて以来、僧侶たちはますます貧しくなり（後略）]

「清水寺」については TG に、おみくじを「同じ手の親指と小指を使って結ばなければならない」独特な方法があり、それは SN 初版に書かれていた。SN 初版には、他にも 'There is a curious superstition connected with this temple, viz: that any one jumping down from the platform (butai) in front of the Hondo without being killed, their wish will be gratified'. (同書)という「清水の舞台から飛び降りる」迷信を紹介したが、TG にはない。拝観人数については、TG には「数千人」の記述があったが、SN 改訂第 2 版にはなかったため、TG は何かの文献に基づいたか、または編纂者自らの調査によって情報を追加した可能性がある。

「蓮華王院（三十三間堂)」は TG の調査において、古い西洋人旅行記の影響が認められた名所である。SN から引き継いだ情報であったので、本章 6－5－4 で詳しく述べる。

グループ E は、『覚馬名所案内』だけにある名所で SN にはみられない。それらは「東大谷」・「長岡天満宮」・「黄檗」・「永観堂」である。「東大谷」・「永観堂」は主要な寺院に近接しており、省かれた可能性がある。長岡天満宮・黄檗は京都市内からは遠方であるため、限られた日数の西洋人観光客には紹介しなかった可能性がある。

6－5－2.　SN から始まる名所

グループ C は、『覚馬名所案内』になく SN と TG にある名所である。SN の独自視点から名所を取り上げ、さらに TG においても選択されたものといえる。SN 初版からは、「娯楽 [amusement]」・「東本願寺」・「建仁寺」・「高台寺」・「明暗寺」・「奈良」・「神泉苑」、SN 改訂第 2 版に新出するのは「愛宕権現」・「大文字送り火」・「桂宮御殿」・「勧業場の職工場」・「急流（保津川下り）」・「修学院」である。

「娯楽」については、SN には「能」はないが、TG には加筆されている。

「大文字送り火」のについては、本章 6－5－5 で述べる。

「東本願寺」については、SN 初版では 6 行のみで、約 270 年前に建築された唯一の建物を紹介するにとどまるが、SN 改訂第 2 版では、内戦により境内の建物が失われた経緯がある。海外布教活動について記し、その情報は TG にも受け継がれた。

「明暗寺」については、SN 初版と SN 改訂第 2 版に英語の綴りが異なる。SN 初版、第 2 版では ‘Misanji’、改訂第 2 版と TG では ‘Miyoanji’ である。それは SN 編集者が興味を持ち続けた証拠であり、TG も「明暗寺」を引き継いだ。なぜ「明暗寺」が名所であったのかが不明なため、今後も調査を続ける。

「急流」は、SN 改訂第 2 版に新出した。国際観光としての「急流」の始まりについて重要な点があるので、本章 6－5－6 に述べる。

グループ D は、SN だけの選択である。実際に SN の著者が歩き、嗜好に基づいて記述した名所だと思われるが、TG において削除されたものである。SN 初版から SN 改訂第 2 版には、「平野」・「今宮」・「鞍馬寺」・「誓願寺」・「鹿ケ谷」・「天龍寺」・「等持院」がある。SN 改訂第 2 版にて削除されるのは、「四条河原」・「一乗寺村」・「八瀬」である。SN 改訂第 2 版にのみ記されるものは、「二条城」・「高雄」である。

「交通機関 [Locomotion]」については、SN 初版において駕籠、人力車（近年一般的になってきた）、ポニー（日本の小型の馬）の利用が書かれている。SN 改訂第 2 版では、京都駅からの人力車になる。入京交通アクセスについては、本章 6－5－3 に詳しく述べる。

「二条城」は SN 改訂第 2 版にあり、TG には削除されるが、範囲を KG に拡げると記述がある。しかしその KG の内容は、SN 改訂第 2 版、もしくは HT 第 2 版（1884）の、どちらとも言えない内容であるので、KG 独自取材の文章の可能性、または新たな参考文献を使用したと考えられる。

6－5－3. 明治初期の入京交通アクセスと「伏見稲荷」

まず、SN 初版で示された 1874 年の大阪方面から京都への交通機関についての日本語訳は、次の通りである。「大阪から京都への移動については、日本人は大阪と伏見の間を行き来する、小さな汽船 [small steamers] を利用します。30 マイルの距離があり、約 6 時間かかります。7.5 マイルある残りの行程は、一般的には徒歩で、またはお金に余裕があれば、人力車を使うと良いでしょう。(1874)」

続けて「乾季」とされる季節には大きな汽船は使用できず、 'small passenger boats, called "sanju-koku-funi," が、汽船の 4 分の 1 の運賃で、10～12 時間をかけて伏見港まで遡上したこと、'To foreigners visiting the city the safest and most pleasant method is by land'. （京都を訪れる外国人にとって、最も安全で快適な方法は陸路です）と続く。「大阪から京都の中心部まで、普通の乗り物が 2 台すれ違うほどの幅の道路があり、1 ヶ所だけ淀川を渡る渡し舟を使います。この方法であれば 7 時間以内で移動することができます」と、詳細に入京交通機関について述べる。

次に SN 改訂第 2 版での記述をみると、交通手段の大きな発展が明確である。

> 1872 年には浅い川でも航行可能な汽船 [Steamers of light draft] が導入されましたが、乾季には運航できず、乗客は「三十石船」と呼ばれる小舟 [the small native boats called "Sanju-koku-fune"] に頼らざるを得ませんでした。人力車が一般的になってからは、外国人にとって、快適で信頼でき、外の景色も見える人力車が好まれました。陸路の距離は約 34 マイルあり、人力車では約 7 時間かかります。鉄道においては、1 時間 23 分です。しかし日本の貧しい人たち [The poorer class of natives] の移動と出荷物の輸送には、いまだ河川が使われています (1878)。

神戸から大阪を通って京都を結ぶ京都駅の開業は 1877（明治 10）年 2 月であった。1878 年の時点では、劇的な時間の短縮が鉄路の利用によって可能になり、西洋人は主に鉄道を利用し京都駅に降り立った。時間の余裕と陸路を好めば、大阪方面から人力車を使ったようである。ちなみに JR 稲荷駅の開業は 1879 年 8 月 18 日であった。

SN は旅行者が京都に到着した後、実際に名所を巡る形で書かれている。SN 初版においては「伏見稲荷」は京都での最初の名所ではあるが、ごく簡単な紹介であり、伏見港に上陸し、伏見街道沿いの伏見稲荷大社門前にあった茶屋が、休憩箇所として重要だった。SN

改訂第 2 版では、京都駅に到着後、宿泊地の円山に向かい、その後一番近い京都博覧会開催地の建仁寺（6 ページ）から、京都観光は始まる。そのため、伏見稲荷は 42 ページに紹介され、その後宇治、奈良に続く。最後に京都からのもう 1 つの遠出である琵琶湖で、改訂第 2 版の名所の紹介は終わる。鉄道を使うようになった西洋人にとっては、伏見街道は初版の「京都に上る道」から、改訂第 2 版の「宇治・奈良方面に下る道」と大きく認識が変わったのである。TG では、SN 改訂第 2 版に沿って、建仁寺から名所紹介が始まるが、SN シリーズにおける伏見稲荷大社自体の紹介が不十分であったことに影響を受け、伏見稲荷大社は削除されたと考える。伏見稲荷大社及び稲荷山を中心とした本格的な名所紹介になるのは、本章 6－4－1 で述べたサトウによる 1879 年の独自の実地調査を経た HT 初版[15]からである。実際に TG には記されないが、KG にまで調査を広げると「伏見稲荷」の記述がある。しかしその内容は SN ではなく、HT 初版の内容を抜き出して新しく編集[16]したものであることが本章の調査で明らかになった。

SN 初版にある ‘Fushimi Inari’. の原文を以下に示し、SN 改訂第 2 版との文章の比較を行った。原文の上付下線（筆者による）部分は、改訂第 2 版において削除、変更、加筆があった部分である。改訂第 2 版においては、下線 a.は削除された。下線 c.については、‘between Kioto and Fushimi’ に変更された。下線 d.は ‘Sanho’ の後に ‘or Mitsunomini, “Three mountain tops”’ という説明が（ ）内に加筆された。下線 a.と c.により、入京外国人の用いる交通手段が、鉄道によって大きく変化したことが明確である。下線 b.の「道沿いにある大きな茶屋」については、「料亭玉屋」であろう。「駅前の料亭玉屋は、元和初年（1615～[17]）開業の老舗（深草稲荷保勝会編、2002）」であり、1869（明治 2）3 月 29 日に木戸孝允（桂小五郎）が昼食休憩を取った茶屋である（同書）。

> [a.] The traveler, after reaching Fushimi, enters upon the road leading to Kioto. The first place of interest upon this road is the Fushimi Inari. [b.] A Large wayside tea house, where jinrikisha drawers invariably rest for a short time, on their journey [c.] to the city, points out this spot. This hostelry is situated at the foot of the Inari hill, upon which stands the temple dedicated to the rice deity. It was built in the early part of the eighteenth century, and is considered one of the

15 しかし、HT 初版・第 2 版の「伏見稲荷」の紹介内容には不明確点がある。本章 6－5－4 を参照されたい。
16 HT 初版・第 2 版の不明確点を含んでおり、内容が良く似ているためである。
17 原文ママである。

principal temples belonging to the Shinto sect. From the hill [d](which is also known as Sanho) may be obtained a favorable view of the Yodo river, Uji and the Uji river. Its distance from the centre of Kioto is about two miles and a half. (1874)

旅人は伏見港到着後、京都に続く道を進みます。この道の最初の名所は伏見稲荷です。人力車の車夫が旅の途中少し休む、道沿いにある大きな茶屋が、伏見稲荷の場所を指しています。この茶屋は稲の神様を祀る、稲荷山の麓にあります。伏見稲荷は 18 世紀初頭に建てられたもので、神道に属する最も主要な聖堂の 1 つと考えられています。この丘（三峰と呼ばれる）からは、淀川、宇治、宇治川の素晴らしい風景が望めます。京都中心部からの距離は、約 2.5 マイルです (1874) 。

6－5－4. 古い西洋人旅行記の影響

祇園社（八坂神社）は TG では削除されたが、SN に重要な記述があった。それは、古い西洋人旅行記についての記述が認められたことである。その部分は、 ‘In front of this temple-properly called the- “Kanjin Gion no Yashiro”-and on each side of the main entrance, are tea houses called collectively the “Nikenchaya.” When the Dutch went to Kioto, in olden times, they rested there’. (1874) （「勧進祇園社」と呼ばれるこの神社の門前には、正門の両側に「二軒茶屋」と呼ばれる茶室が並んでいます。その昔、オランダ人が京都を訪問した際、ここで休憩したそうです）である。古い西洋人たちの旅行記を編集者は読んでおり、それがガイドブックに反映された一例である。祇園社についてはもう 1 つ重要な記述があるので、本章 6－5－5 に述べる。

蓮華王院（三十三間堂）については、SN においても、蓮華王院（三十三間堂）の仏像の数は 33,333 であったと記される。原書である SN に基づき、TG においても誤ったままの情報が記された。SN の原文は、‘Each idle is surrounded by a number of smaller ones, and the total number of these figures is supposed to be thirty-three thousand three hundred and thirty-three’. (1874) （それぞれの仏像の周りには小さな仏像が多数あり、その総数は 33,333 体とされています）である。

これらの記述から、古い西洋人旅行記の影響が SN にあったことを確認した。

6－5－5. 京都の祭

「大文字送り火」については、TG の記述からは ‘Ichiwa’ の場所を確実に突き止められなかった。しかし、SN 改訂第 2 版は ‘Farther to the West is the character I（い[18]）the first in Ichiwa, the name of the district;’ と、ひらがなの「い」を入れて書いてあるので、「市原」[19]であることが確実である。

TG には大文字送り火については詳細があるが、もう 1 つの京都の代表的な祭である祇園祭についての記述がないことが疑問であった。SN 初版には、祇園社（八坂神社）の中に、祇園祭についての記述があった。その部分は以下の通りである。

‘The prayers offered up to this god proved efficacious in stopping an epidemic which had raged at Kioto. Since then an annual festival has been held during the eighth month in commemoration thereof’.（この神に祈ったところ、京都で猛威を振るっていた疫病が見事に収まりました。それ以降、毎年 8 の月には、そのことを記念する祭が行われています。）(1874)

6－5－6. 西洋人初の「保津川下り」

本稿第 5 章において、「TG は、世界で初めて英語で保津川下りを紹介」した可能性があるとしたが、西洋人の保津川下りの始まりの年を含めて不明点が多く、継続して調査中であった。SN 改訂第 2 版に新出した記述内容には、TG において削除された部分に、SN による「西洋人乗船の初めての年」を確認した。これは保津川下りの歴史において、重要な発見である。詳しくは本稿第 8 章にあるが、その中から本研究に必要な点を 2 点述べる。

第 1 に、「1876 年」が西洋人乗船の初めての年であった。原文は、‘we do not think we can do better than quote from an account written by one of the first travelers who made the journey in 1876’.（1878）（1876 年にこの舟旅をした最初の旅行者の一人が書いた手記を引用するのが、この旅の説明としては一番良いでしょう）である。TG は上記の英文だけを削除し、体験部分のみを引用した。

第 2 に、TG の「女性の皆さん、この川下りを恐れる必要はありませんよ。事故があったとは今まで聞いたことがありません（1880、89）」の部分は、SN 改訂第 2 版の ‘We had been

---

18 原文ママである。原文に「(い)」の部分は日本語である。

19 原文の ‘Farther to the West’（はるか西に）の部分について、位置的には気になるが、『京都大事典』【大文字五山送り火】の項に「享保 2 年（1717）の『諸国年中行事』には市原の『い』、鳴滝の『一』が載る。さらに西山には『竹の先に鈴』、北嵯峨には『蛇』、観空寺には『長刀』があったという」とあるので、市原である。

informed by a friend that an accident never had occurred to one of these boats’ を再編集し、‘Ladies’ を TG で新しく追加したものである。

6－6. まとめ

SN は明治の最初期に、京都博覧会を参観する西洋人用として、京都名所を詳細かつ興味深く紹介した「都市案内」であった。

SN の制作背景として、印刷・発行は神戸・横浜という代表的な外国人居留地で行われた。特に、距離的に京都に近い神戸居留地民たちの興味は大きく、SN 初版にだけ記される「編集後記」において、京都博覧会を目指す滞日西洋人の京都観光熱の需要に迅速に対応した、との経緯があった。ヒョーゴ・ニュースは、初版及び内容に大きな変化がある改訂第 2 版の印刷元として、SN に大きく関与したであろう。

名所選択において、SN が『覚馬名所案内』の影響を受けたと考える点は 2 点ある。第 1 に『覚馬名所案内』独特の綴り（「梅宮大社」）が継承された点である。第 2 に、本章 6－5－1 で示した『覚馬名所案内』には記され、TG において削除された名所が 17 ヶ所あるのに対し、SN においては 4 ヶ所のみであった点である。引き続き調査が必要である。

SN の特徴については、名所案内だけでなく、名所にまつわる伝説や逸話を紹介したことである。例えば、「清水寺の舞台から人びとが飛び降りた」、「京都は四神相応の地である」といった話は、SN 編集者が京都を良く知る人物であったことを物語る。

改版による特徴としては、主に SN 改訂第 2 版において大幅な情報の刷新が行われた。その中でも 1876 年に行われた「西洋人初の」保津川下りを、すぐさま新しい観光デスティネーションとして取り上げた。「伏見稲荷」・「交通機関」から、入京のための人流が大きく変わったことを詳細に記した。

TG は、全体的に SN の文章を省略して記述したために、その文章は不明確点を含むものであった。本研究により TG は SN の「京都観光」情報を抜粋してまとめた出版物であったことは確実となったため、今や編纂者のキーリングが京都を訪問したかどうかも危ぶまれる。しかし例えば「二条城」については、他の参考文献や独自取材の可能性も含めて調査が必要である。

SN が現在までの研究において、あまり知られない存在であった背景に、「都市案内」情報誌が次々と刷新されるために、人々の手元に長く残らなかった可能性がある。また旅行期間の限られた西洋人旅行客にとって、TG に「ダイジェスト」された情報で十分だったこ

と、加えて日本観光熱が高まり、「都市案内」ではなく「日本旅行ガイド」の必要性が高まった可能性がある。TG ののち、人々の関心は日本アジア協会の英知を集め、信頼性の高い HT に移った。しかし SN はその後、神戸外国人居留地及び関西圏に住む西洋人たちの日帰り、及び短期間の遠出用に特化した都市案内ガイドブック、KS へ発展した。

本章では、未見であった史料 *Stray Notes on Kioto* の初版、第 2 版、改訂第 2 版と前後の英文京都案内を調査し、以下の 3 点を確認した。第 1 に、SN は国際観光都市京都の黎明期における重要な歴史的証言者であること、第 2 に、SN は西洋人による日本観光ガイドブックの嚆矢、TG の元本であり、TG の京都記述部分は SN の内容を抜き出して作成された出版物であること、第 3 に、SN は『覚馬名所案内』と TG にある間隙を埋めるものであり、現在までの研究において、西洋人による初の京都英文ガイドブックであるということである。本章において、これらの重要な点について精査し、明らかにした。

第７章　英国皇孫京都観光（1881）に関する研究

7－1.　はじめに

軍艦 ‘Bacchante’[1]に乗って世界旅行中の英国ヴィクトリア女王の孫、アルバート・ヴィクター王子（Prince Albert Victor, 1864－1892）と後に航海王（The Sailor King）と呼ばれたジョージ王子(Prince George of Wales, 後の George 5 世、1865－1936）（以下、皇孫たち）は横浜に寄港した。東京では明治天皇の接遇を受け、1881 年 11 月 5 日には「神戸に上陸し、京都・大津・伏見・宇治・奈良・大阪等を巡覧して 11 日神戸に復し、更に舞子海浜を遊覧（宮内庁、1971：569)」する関西旅行を行った。その旅程において、京都は 4 泊を過ごす主要な観光地であった。

明治最初期の京都における時代背景を振り返ると、鳳駕東遷直後の京都は、「千年にわたる帝都としての地位を失い、いわば廃都ともいうべき事態に（京都市、1971：17)」陥ったが、官民あげて京都復興に取り組み、その 1 つの打開策として京都博覧会を開催した。京都博覧会の第 1 目的は国際貿易の収入であり、「第二の使命は京都を日本随一の観光地として汎く外国人にも宣伝紹介すること（大槻喬、1937：16)」とあるように、国際観光の振興であった。京都が閉ざされた都から 180 度の方針転換を行った第 1 回京都博覧会（1872）では、京都府の外国人入京規則に基づく「入京印鑑」（大槻喬、1937：21）を携えた外国人参観者が 770 名を数えた。本井康博（1996）によると、「一般の外国人の入京（ただし一時的）は（中略）第 1 回京都博覧会の時から（103)」であった。外国人京都博覧会参観者のために『覚馬名所案内』が制作された。

その後居留地に住む外国人は「1874（明治 7）年に至り『病気療養』と『研究調査』という条件つきで、日本における外国人の内地旅行権を獲得した（楠家重敏、1988：221)」が、京都に入る際には入京手形（パスポート）[2]が必要であった。皇孫たちの入京は、京都が外国人に開かれて 10 年を経ない時であった。

上林ひろえ（2015）は、1881（明治 14）年に、皇孫たちが現在の京都府亀岡市の「保津

---

1 『サトウの日記』1881 年 12 月 24 日に、‘The Detached squadron arrived on the 21 and today the two princes…’（2015、392）とある。5 隻の軍艦は、 Australian National Maritime Museum（2018）によると、‘HM Ships BACCHANTE, CARYSFORT, CLEOPATRA, TOURMALINE and INCONSTANT’ である。

2 *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*（1881）の ‘3. Passports. (xiii)’ にある。

川下り」（以下、川下り）を含む京都観光旅行を行い、その旅行にアーネスト・サトウが随行し、「彼は、*A Handbook for travelers in central & northern Japan* という 1 冊のガイドブックを出版（同書：245）」していることを指摘したが、英国皇孫の京都観光については、踏みこんだ調査はなかった。研究の余地が十分にあるので、本稿では特にイギリス人側の資料をもとに、皇孫たちの京都観光の詳細を調査し、明らかにする。当時の国際的要人の観光旅程は、その時代における受け入れ側の「見せたい京都」でもあり、西洋人京都観光のモデルとなった可能性がある。京都国際観光の黎明期の研究において不可欠である。

研究の結果、以下の事柄が確認された。まず皇孫たちの京都旅行にサトウが随行したのは、皇孫たちの来日後であり、サトウ自身は皇孫たちと実際に会うまで、自分が皇孫たちの京都旅行に随行するとは予想していなかった。皇孫たちの京都旅行は少人数で、東京滞在に比べて私的に行われ、日本・京都府側は十分な迎え入れ準備を行い、その中には京都観光の目玉として当時の新観光「川下り」が用意された。日本の歴史文化と京都の観光名所を良く知るサトウは、皇孫たちに深く信頼され、日本・京都府側と調整を行い、当日柔軟に 10 代の若き英国皇孫たちの喜ぶ訪問先を選択する役割を担った。選択された観光名所は、サトウとホーズによる HT に紹介された名所であり、皇孫たちの旅行記 *The Cruise of Her Majesty's Ship "Bacchante", 1879－1882*（以下、『バッカンテ号の巡航』）の内容には、HT が文献として大きく影響した。

7－2. 参考文献

『バッカンテ号の巡航』には、皇孫たちが京都を含む関西方面を観光した様子が述べられた。『バッカンテ号の巡航』の作者は皇孫たちであるが、表題に 'with additions by John N. Dalton' と王子 2 人の個人教師であるダルトン（John. N. Dalton）の名がある。英国王室側の視点から、訪問先や旅行の感想などが述べられている。

サトウについて、楠家（2021）は「1872 年に横浜で創立した日本アジア協会に多くの論考を投じ、アストン、チェンバレンとともに明治期のイギリス人三大日本学者と称された（253）」人物であると述べた。日本アジア協会は 1872 年 7 月 29 日、ロンドンの王立アジア協会の影響を受けて設立された。サトウは来日当初から熱心に日本語を学び、日本の知識の習得に励んだ。それは、早期には外交官として情報を収集する目的でありながらも、次第に日本学において『日本アジア協会紀要』（*Transactions of the Asiatic Society of Japan*、以下 TASJ）に、「日本の歴史や言語、宗教、地理など約 20 編の論文を発表（横浜開港資料

館、2001：80)」するなど、精力的に研究を行った。神道についても「伊勢神宮（The Shinto Temples of Ise）（1874 年、TASJ 第 2 巻)」、「古神道（純粋神道）の復興（1883、TASJ 第 3 巻)」などの発表がある。また同じく楠家（1998）は、サトウが 1870 年代に旅行記や文化論を著すことが多くなったのは、「のちにサトウがホーズと共編してまとめ上げた *"A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan"*（1881）の基礎資料となるもので、この時期から総合的な日本案内書を執筆することを企図していたことがうかがえる（50)」と述べた。

『サトウの日記』は、サトウの 1870 年から 1883 年の日記を編集し、注釈をつけたものである。サトウの視点による第一次資料であり、皇孫たちの随行中での出来事や感想が綴られている。

日本・京都府側の報道資料として、『西京新聞』(1881 年 11 月 6 日、8 日、9 日）がある。皇孫の京都観光の行程を報道したが、実際の皇孫たちの行程との違いがあった。

高木博志（2016）は、文明開化期の京都の実際の街の様子、文化について詳しい。

小山騰（2010）は、ヴィクトリア女王の血族によって繋がりをもち、明治時代に来日したヨーロッパ王室の人びとについて詳しい。小山によると「日本の明治時代（1868－1912）に相当する時期に、王室および上流階級の間で刺青が流行した（11)」とあり、皇孫たちは 2 人とも日本で刺青を入れていることがわかる。

『明治天皇紀』第 5（1971）には、1881 年 10 月 25 日、明治天皇が英国「両親王に対顔あらせられ」(561)、日本の皇族たちと共に、皇孫たちを接遇した内容が記録されている。皇孫たちの日本滞在については、父である英国皇帝より「但し英国皇帝は、公式に皇孫として礼遇せらるゝを辞し、仮令饗宴等を催させらるとも、其の豊優ならざらんことを望ませらる、天皇之れを諒したまふ（同書、561)」という依頼があり、天皇はそれを了承した。

HT（1881）は、2 月刊行であるため、11 月の皇孫たちの旅行の際には刊行されていた。HT の内容は『バッカンテ号の巡航』執筆に、全体的に参考にされたと思われる。

「川下り」遊船の始まりについては、先述した上林、また『新修亀岡市史』(2004）に、『日出新聞』(1920（大正 9）年 4 月 11 日付）の記事の指摘がある。タイトルは「保津の舟遊」、そして「筏は古い歴史を有せるが遊船として客を下す事は明治 7 年始めて南桑田郡篠村字山本の浜より西洋人を下したるが始まりにて」という重要な情報がある。

これらの先行文献を受け、本稿の研究の目的は以下の 2 つである。それは、①実際の皇孫たちの京都観光旅行の詳細、②皇孫たちの京都観光旅行にサトウ、日本・京都府側と HT

初版が与えた影響である。

7－3. 研究方法

英国皇孫側の『バッカンテ号の巡航』を『サトウの日記』を用いて比較し考察する。京都旅行の部分については、日本・京都府側史料である『西京新聞』の記事を先に挙げ、英国側の資料と比較する。「川下り」の部分では特にサトウらによる HT 初版・第 2 版と、その後のチェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850－1935）とメイソン(W. B. Mason, 1853－1923）による HT 第 3 版以降の内容もいれて考察する。『西京新聞』は原文のまま、大部分を新字体に改めた。英文に付随する日本語抄訳は筆者による。

7－4. 結果と考察

7－4－1. 皇孫の京都旅行とサトウの随行

まずサトウが皇孫たちの随行員を務めた経緯を明らかにする。

『バッカンテ号の巡航』の 10 月 24 日、皇孫たちが横浜港から鉄道に乗り、東京駅で降車した場面では、‘Mr. Kennedy[3], (with whom were Mr. Satow[4], Mr. Buchanan[5] and Mr. Hodges[6] the secretaries of Legation)…met us at the station’.（1886：19） とあり、 サトウはイギリス公使館員の 1 人として東京駅で出迎えた。公式行事の合間を縫って、サトウは単独で浅草、愛宕山、招魂社など東京観光案内を務めた。11 月 1 日には、‘The Honourable Mr. Marsham (cousin of the captain), and Mr. Satow have come on board and are going with us as far as Kobe’.（同書、69）とあり、公使館員ではサトウだけがバッカンテ号に乗り込み、神戸に同行した。 ‘He has been not only a most agreeable companion during our stay in Japan, but also of invaluable service to us on account of his special knowledge of everything connected with Japanese history, language, and literature’. (同書、73) とあるように、皇孫たちとダルトンは、サトウの人柄と日本に関しての圧倒的な知識と理解を知って、絶対的な信頼をサトウによせた様子がある。

『サトウの日記』をみると、10 月 27 日の東京観光案内中に、 ‘Dalton has proposed that I

---

[3] *The List of British Diplomats in Japan* によると、Mr. James G. Kennedy の役職は “Secretary of Legation” （桑田優編、2003：50）であった。
[4] サトウの役職は ”2nd Secretary” , “Japanese Secretary” である（桑田優編、2003：50）。
[5] Mr. George W. Buchanan は “2nd Secretary” である（桑田優編、2003：50）。
[6] Mr. George J. L. Hodges は “Kanagawa” の “Constable” である（桑田優編、2003：50）。

should go with them to Kobe'.（Ruxton、2015 : 393）（ダルトンに神戸への同行を依頼された）、とする記述がある。10 月 30 日には、 'It is decided that I go to Kobe to make myself useful if the princes land & go up to Kioto'. (同書、393) と同行が決定した。この部分では、サトウは関西への旅行ではなく、「京都」という都市名を旅行の目的地と書いた。10 月 31 日には、 'It was finally settled that I should go down in the "Bacchante" , so I had to rush back to Yedo, eat a hasty dinner, and get back to Yokohama by the last train, to sleep at the Grand Hotel'. (同書、393) と、バッカンテ号乗船が最終決定されたので、急ぎ旅の支度を整え横浜で前泊し、翌朝の 11 月 1 日、バッカンテ号の横浜港 8 時半出港に間に合わせた。これらの記述からサトウの京都行は予期せず、急遽の依頼に応じて随行が決定したという背景が明らかになった。

さて、英国側にとって、上陸前の現地での衛生状態のチェックは必須であり、神戸港においても医師が先に下船し確認を行った。『バッカンテ号の巡航』において、 'the sanitary conditions of the place' (1886、73) とあり、『サトウの日記』には、'The doctor went ashore to get statistics of cholera' (2015、393) と、神戸上陸前には医師が先に上陸し、コレラの流行具合や衛生状態を調査した。

その後『バッカンテ号の巡航』には、 'This was found to be extremely satisfactory: which on being reported to the admiral, he kindly gave us seven days' leave of absence from to-morrow morning.' （1886、73）、また『サトウの日記』にも同様に 'the admiral gave leave for the princes to go for a week to K[yoto]'. （2015、394）と、名目上であっても、提督は「東洋艦隊見習士官（宮内庁、1971：561）」である皇孫たちに、京都とその近郊を観光するための 1 週間の休暇を許可した。11 月 5 日の『サトウの日記』には、 'The party consisting of the two princes, Dalton, three midshipmen[7], Dr. Turnbull & myself, 'with Nagasaki [Michinori] and Sannomiya [Yoshitane]' （2015、394）と記し、一行は皇孫たちとイギリス人 6 名、日本人 2 名の随行という少人数であった。『バッカンテ号の巡航』によると、長崎と三ノ宮は日本側の接待係である。11 月 5 日に、 'Mr. Nagasaki and Mr. Sannomiya were waiting with jinrikishas to take us up to the station. They had previously arrived at Kobe by mail steamer from Tokio, and have already arranged everything for our trip to Kioto and Nara'. （1886、74） とあり、日本国側接待係は郵便汽船で先発し、京都を含む関西の皇孫の旅行の直前確認を行った。『西京新聞』によると、「英国皇孫接待事務委員宮内権少書記官長崎省吾君（『西京新聞』、明治 14 年 11 月 6 日第

[7] 小山（2010）によると「士官候補生」である。先述した「東洋艦隊見習士官」と同じで、皇孫たちの同僚にあたる。

1401 号)」と長崎の役職がある。

『西京新聞』によると、皇孫たちは 11 月 5 日午前 10 時 51 分に七条停車場に到着し、宮内庁の馬車にて本願寺に入りその日は外出しなかった。京都府知事北垣国道の馬車が先導し、皇孫たちのあとに東伏見宮の馬車が続いた（明治 14 年 11 月 6 日、第 1401 号)。外出については 11 月 8 日付の紙面に、11 月 5 日は午後 3 時に突然出発し、「西大谷清水寺幹山陶器場八坂神社円山鉱泉場等を巡覧（『西京新聞』、明治 14 年 11 月 8 日、第 1402 号)」した、とする訂正が載った。長崎らは接待掛や官吏数名で「馬車人力車の連続」の手配を行った（同記事)。

『バッカンテ号の巡航』には、迎えの馬車に乗込み、西本願寺に入る前に東寺を見学した記述がある。宿舎である西本願寺を午後 1 時半に出発し、清水寺、複数の陶器店を見て、幹山陶器場では小型の陶器を数点購入した。その際 ‘We tried our own hands at the lathe and turned out one or two little brown teapots in clay’（1886：79）と、ろくろを使った「陶器づくり体験」を行った。サトウはすでに幹山と知り合い[8]であった。その後、一行は将軍塚から京都盆地を俯瞰し、「祇園[9]」に着いた。待っていた神職から説明を受け、知恩院を見学した。その後 ‘Down this, we rattle in the jinrikishas’ （同書、83）とあり、人力車で京都市内を走った。 ‘(we) are amused to find the same exhibitions here as in an English fair’.（同書、83） とあり、以下にその場面の記述がある。

> There are toy-shops and jugglers who seem to attract the children chiefly; the shops, at which rice cakes are being sold of every sort and kind and shape, seem to be doing a flourishing trade. There was one stall where dolls were standing to be pelted with balls (in the manner of Aunt Sally at home); if you knocked down so many, you carried off a doll as a trophy of your skill. (同書、84)

この記述によると『バッカンテ号の巡航』では、祇園社から人力車に乗って ‘English Fair’ のような場所に到着した。

『サトウの日記』には以下のように書かれている。

---

8 幹山陶器場については、『サトウの日記』1879 年 12 月 4 日に、‘Kanzan is a modern settler at Godeu zaka [Gojozaka], and makes chiefly for the foreign market’ とある。

9 英文では ‘we arrived at the temple of Gi-on (which is Shinto)’ であるので、祇園社（八坂神社）である。

Kanzan's shop to Gion, where some cockshys [target for throwing sticks or stones] amused the youngsters mightily while Dalton, Turnbell & I climbed the Shiyau-gun-dzuka [Shogunzuka 将軍塚],（中略）then down to the street W. end of the hill to the back of the Chi-on-Win [Chion-in 知恩院] where we fell in with the others. (2015、394)

これらの記述には時間的、また場所的にも異なる部分がある。実際には、『サトウの日記』に沿い、皇孫たちは地元の人達で賑わう歓楽街に人力車で向かい、同僚である 3 人の士官候補生たちとともに、射的のような遊戯を一般人に交じって楽しんだと考えられる。その間、付き添いであるはずのダルトン、サトウ、ターンブル医師（Turnbull）は将軍塚に登り、京都盆地の眺望を楽しんだようだ。2 組が別行動するためには、長崎、三ノ宮が皇孫たちに随行した可能性が高い。歓楽街の場所については、新京極通であると考える。高木博志（2016）によると、当時新京極通は京都屈指の繁華街であった。高木の示す 1881 年当時の新京極の復元地図（2016、33）には、『バッカンテ号の巡航』で描かれる饅頭を売る和菓子屋、劇場、揚弓、室内射銃などの店が立ち並ぶ。皇孫たちは、10 代の少年らしい娯楽のひと時を新京極で得て、その時の愉快な印象をダルトンに詳しく語ったようである。サトウらによる HT には、京都の歓楽街として、 'Theatres and other places of amusement, in Shi-jo and Shin Kio-goku' （1881、349）の紹介がある。

『バッカンテ号の巡航』によると、夕食後は日本人画家たちが皇孫を訪問し、墨と筆を使った日本画をその場で描くパフォーマンスを行った。この内容は『サトウの日記』には書かれていない。

11 月 6 日は、『西京新聞』（明治 14 年 11 月 8 日火曜日）第 1402 号によると、「翌 6 日午前 10 時大教正大谷光尊君の案内にて両御堂飛雲閣を縦覧し寄て上の御所北野神社金閣寺集産所[10]大仏豊国神社三十三間堂東本願寺枳殻邸等を巡覧遊ばさる（中略）午後 6 時御帰還あらせられ」であった。

『バッカンテ号の巡航』では、一行は人力車で御所[11]内まで入り、複数の御殿の内部を長

---

10 『覚馬伝』によると、集産場は、またの名をバザーと言う。「京都のすべての名産品が陳列されて人びとに縦覧された（1976：106）」場所であった。

11 御所は京都博覧会の主要な会場であったが、1881（明治 11）年の第 7 回京都博覧会は会期が 3 月 15 日から 6 月 22 日までの 100 日間であったので、皇孫たちは京都博覧会を参観していない。

時間参観したため、‘now made haste to find our jinrikishas and start for Kitano-ten-jin’ (1886、88)、とあるように北野天神、金閣、その後京都市中心部に戻り、買い物をした。『サトウの日記』にも同様の訪問箇所が書かれ、それ以外の訪問箇所はない。サトウは‘On our way back got separated from the rest of the party, & did a little shopping’（2015、394）、とあり、別行動する自由があった。『サトウの日記』によると、‘After dinner there were dramatic performances, but prince George made me come & sit by him while he had a tiger tattooed on his arm, and I lost it all’（同書、394）とある。ジョージ王子は 6 日の晩に刺青を腕に入れる[12]際、日本人の刺青師やスタッフばかりの中にいるのを不安に思ったのか、サトウを頼りにした様子である。小山（2010）によると、ジョージ王子は「明治 14 年日本で龍（登り龍または降り龍）を彫った[13]（145）」とある。それは、「万が一死亡して海底に沈んだ時に人物確認に役立つ（同書、182）」という、勇ましい海軍軍人らしい理由であった。先ほどの『サトウの日記』の文章によると刺青の柄は「トラ」である。サトウは観劇の機会を失ったことを残念に思った、とその時の気持ちを正直に記した。

11 月 7 日、『西京新聞』は「丹波亀岡辺を遊覧して小船に乗込保津川を下りながら嵯峨嵐山を望み天龍寺清凉寺仁和寺広隆寺等を見て御帰館する（11 月 8 日、第 1402 号）」と報道した。下船場の嵐山からの旅程は『バッカンテ号の巡航』、『サトウの日記』の両方に、太秦広隆寺、御室御所（仁和寺）がある。この日は京都府知事北垣国道が自ら、「午後 3 時頃馬乗にて嵐山へ出張（『西京新聞』、11 月 8 日、第 1402 号）」し、皇孫たちを嵐山で出迎え、八坂神社南門の中村楼に皇孫たちを招き接待した。北垣国道はサトウとは旧知の間柄[14]であった。西洋料理の夕食ののち、花見小路歌舞練場にて「芸妓 60 名一様に出で立ち都踊を笑覧（『西京新聞』、11 月 9 日、第 1403 号）」させ、帰館は夜 12 時頃になった。『西京新聞』報道にあった天龍寺、清凉寺の訪問については、『サトウの日記』からは確認できなかった。

本稿は皇孫たちの京都旅行に焦点を当てているが、11 月 8 日の大津・琵琶湖方面の観光についても興味深い点があるので簡潔に述べたい。11 月 8 日は『バッカンテ号の巡航』に

---

12 『バッカンテ号の巡航』によると、刺青を行ったのは、11 月 8 日、京都を離れる日の朝であった。‘Had the tattoing on our arms finished before breakfast, and then at 8:30 started for the railway, to go by train to Otsu and Lake Biwa’. (99 ページ) これは「川下り」の翌朝のことである。

13 小山（2010）によると、アルバート・ヴィクター王子は「明治 14 年日本で鶴（舞鶴）の刺青を入れた（145）」。

14 『サトウの日記』の 1872 年 6 月 9 日付に、‘dinner with Kitagaki [Kunimichi 北垣国道] of the Kaitakushi [Hokkaido colonization office, founded in 1869 開拓使] at his house’.（47） とある。

よると、唐崎の松を鑑賞し、坂本から比叡山の登山を試みたが、山頂からの見晴らしが望めない天候のために諦め、滋賀院で昼食を取った。‘several country gentlemen had lent suits of old armour and other family curios for the day. In one of these suits George arrayed himself as a young knight, all the pieces, from the helmet to the greaves, exactly fitted him, as the Japanese are a smaller race than Europeans’. (1886, 100-101) とあるように、ジョージ王子は武将の鎧兜一式を着用体験した。

『バッカンテ号の巡航』に書かれた名所の名前の意味が興味深い。それは ‘the Shinto temples of Hiye-no-jinja, or “the spirit of the cold mountain”’, (同書、101) の部分である。HT には、‘The original name was Hiye no yama, perhaps meaning ‘Cold Mountain,’ and the temple of Hiye at Sakamoto at the E. foot of the mountain’, (1881, 382)とある。音声から比叡山と坂本の日枝神社を「冷え」としたようである。これは HT 第 9 版（1913）においても ‘The original name of Hiei-zan was Hie-no-yama, perhaps meaning the Chilly Mountain: and the Shinto temple of Hie at Sakamoto at the E. foot of the mountain’, (342) とあり、同様の意味が継承された。

『サトウの日記』によると、行程は大津まで列車を使い、人力車で唐崎と坂本を訪問した。

本章 7－4－2 には 11 月 7 日と 8 日の「川下り」関連部分を述べるので、その後 11 月 9 日の、京都を離れ奈良へ向かう道中について述べる。

『西京新聞』の 11 月 9 日付には、「本日は宇治を経て奈良へ赴ふかれしが直ちに大坂[15]へ御出になるもはかりがたきやに承る」とある。つまり皇孫たち一行は宇治から奈良へ行かれる予定だが、途中で変更して大阪へ直行されることになるかも知れない、というあいまいな旅程の報道であった。

『バッカンテ号の巡航』には、宿舎であった本願寺を 9 時 20 分に出発し、東福寺、伏見稲荷大社（Shinto temple of Inari-no-Yashiro）、平等院を見学して昼食休憩を取り、その後は奈良に直行した。『サトウの日記』を見ると、この日の時間配分について、 ‘Left at 9.20 and got to Tou-fuku-zhi at ten.（中略）‘Left Inari at 10.30 and got to Uji at 20 to 12. (中略)　Left Uji at 5 to 2 and reached Nara at 10 to 6’. (2015、395）と大変細かく出発時間を記録している。

『バッカンテ号の巡航』には東福寺、伏見稲荷大社、宇治平等院、昼食を取った菊屋について詳しい記述がある。東福寺については『サトウの日記』に、『バッカンテ号の巡航』と同じく兆殿司によって描かれた達磨について記され、有名な紅葉についてサトウは、‘The

15 「大坂」については、原文ママである。

maples were in full colour, and in the little dell were numerous temporary platforms & sheds for visitors to enjoy the view from while sipping tea'.（395） と述べていることから実際に立ち寄ったと考える。サトウの書き留めた、「東福寺に 10 時に到着し、稲荷を 10 時半に出発、宇治に 11 時 40 分に到着」という時間配分から、伏見稲荷大社での見学はごく短時間であったか、もしくは街道沿いから見えただけだったかと思われる。『バッカンテ号の巡航』には、'Inari means "rice-man," and is dedicated to the goddess of food', (1886、103) などの由緒と祭神などの説明部分があり、HT の内容と良く似ている。『サトウの日記』には、伏見稲荷大社の見学については何も書かれていない。

さて、平等院についてであるが、『バッカンテ号の巡航』には、'It was noon by the time we drew up in front of the Kiku-ya tea-house at Uji, where we are to have lunch, over-hanging the swift-flowing river Ujigawa', (1886, 104) とあり、皇孫らは宇治川に沿って建つ「菊屋[16]」で人力車を降り、平等院見学に向かった。そして平等院について歴史や仏像など細かい記述がある。『サトウの日記』には、'Of course inspected Biyau-dau-Win & curios there, but could not get inside the hon-dau, as the custodian of the key was away'. (2015、395) とある。サトウにとっては平等院の見学は必須であり皇孫らを案内したが、その時鍵の保管者が不在であったので、本堂の中には入れなかった、という興味深い記述である。『バッカンテ号の巡航』には、菊屋での昼食の後 'After lunch we tasted some of the tea which is grown about here, and which is the best in Japan: it is called "chrysanthemum dew," and is of the lightest straw colour, European palate; it is made with lukewarm water on the top of which the tea leaves are thrown in'.(1886、106) と、詳しく宇治茶について記述した。この 'Chrysanthemum dew' について『サトウの日記』には、'Bought some tea, kiku no tsuyu, Chrysanthemum Dew, at 5 wen the catty of 200 me: the best being 6 wen'. (2015, 395) とある。茶の銘は 'Kiku no tsuyu'[17] であった。

『西京新聞』のあいまいな報道と、到着時間を細かく書き留めたサトウ、そして国賓に相当する皇孫が来訪したにも関わらず平等院の本堂に入れなかったこの日の旅程から、皇孫たちの旅行が京都府の手から離れ、全面的な旅程がサトウに任されたことが考えられる。

16「中村藤吉本店の歴史」によると、中村藤吉平等院店（旧菊屋萬碧楼）は「江戸期からの宇治を代表する料亭旅館菊屋の遺存建物として『重要文化的景観』に選定」されている（https://www.tokichi.jp/history.html　最終閲覧 2021 年 9 月 21 日）。

17 日本語表記については調査中である。

7－4－2. 皇孫たちの「川下り」

本章 7－2 で述べたように、西洋人の川下りの始まりは 1874（明治 7）年、という新聞記事（『日出新聞』1920 年 4 月 11 日）はあるが、確実な裏付けは現在のところなく、調査を継続している。英文ガイドブックにおいては、1878 年刊行の *Stray Notes on Kioto and Its Environs* 改訂第 2 版、38 ページに ‘The Rapids’ があり[18]、今までの調査において、「川下り」についての英文記述の最古である。「川下り」の詳細は本稿第 8 章にある。

本項では、初期の西洋人の「川下り」について、皇孫たちの体験を調査する。

『バッカンテ号の巡航』では、 ‘Afterwards, at 9 A. M., got under way in a long string of jinrikishaw for the rapids of the Katsura-gawa’ (1886、96) である。「川下り」の英語名称は HT と同じ「桂川の急流」である。 ‘passing through some tea-plantations and woods of large green bamboos, which reminded us of Trinidad and Jamaica, （中略）the hill became still steeper, and we all got out and walked, and of course enjoyed the view.（中略） We arrived at Yamamoto at 12:30’.（同書、96） とあり、イギリス連邦の国々と似た茶畑や緑の竹林などの風景を楽しみ、皇孫たちも険しい上り坂は人力車を降りて歩いた。

‘Arrived by the river side, we waited until the jinrikishas had been transferred to the flat-bottomed boats which were here waiting’. （同書、96） とあるように、人力車は舟に積まれた。‘In one long straight reach where the river broadened out a bit like a valley in Wales or Scotland,’（同書、97）と、皇孫たちの母国のウェールズやスコットランドの谷に似たような川の広がりを記している。そして皇孫たちに親近感がもてる興味深い場面が、‘we had some fun racing the boats containing the jinrikisha men. They had started ahead of us, but we now passed two or three of them’. （同書、97） の箇所である。車夫たちを乗せた舟は、嵐山に先着して皇孫たちを出迎えるために、先発したのであろう。しかし皇孫たちの舟は、彼らの舟に追いつき追い越せの競争を楽しんだようである。 ‘For the two hours we were descending the rapid’ （同書、96）とあるように所要時間は 2 時間であった。その後皇孫たちは、昼食休憩を渡月橋の眺めの良い三軒家で取る。『サトウの日記』の興味深い箇所は、‘To Kameoka [亀岡] in kuruma and down the [Hozugawa] rapids, a very delightful morning, no danger but some excitement and splashing of water’. (2015、394)という短い記述である。刺激的で水しぶきがあったが、危険は全くなかった、という感想があった。

---

[18] 1876 年刊行の *Stray Notes on Kioto and Its Environs.*第 2 版には、「川下り」についての記述はない。

『バッカンテ号の巡航』における「川下り」の行程については、サトウとホーズの著した HT 初版の内容に良く似ていることが興味深い。

サトウ自身の皇孫観光以前の「川下り」体験については、『サトウの日記』からは確認できなかった。日記のない部分に行われた可能性と、皇孫たちとの「川下り」が初出であった可能性があるが、筆者はサトウらの HT 第 2 版（1884）の加筆部分に注目する。それは HT 初版には見られないが、HT 第 2 版には「川下り」を推薦する言葉や、川下り中の風景・見どころの説明が確かめられるからである。例えば ‘Of the numerous small rapids and races, the following are a few of the most exciting ‘Koya-no-taki (‘Hut Rapid’)’（同書、385）の部分である。この ‘Koya-no-taki (‘Hut Rapid’) の部分は「小鮎の滝（保津川遊船企業組合、2019 : 3）」が正しい。HT 第 2 版のこの部分の編著者は、船頭が舟を操りながら口頭で案内する ‘Koya-no-taki’ をメモし、「小鮎」を音声的に「小屋」と誤って聞き取って、第 2 版に新情報として加筆したようだ。HT 第 2 版での誤訳はそのまま転載が続き、チェンバレンらの第 9 版（1913、341）にもそのまま、訂正することなく残った。

11 月 8 日は、滋賀県の観光であるが、この日の記述も「川下り」に関係している。この日『バッカンテ号の巡航』にだけ ‘then back to the station at Otzu (sic.), where we met Prince Louis of Battenburg and Mr. Blake from the Inconstant. They have been down the rapids this morning and have collected several boxes and baskets full of curios’.（1886、101）の記述があるが、滋賀県での観光を終え、大津駅に戻ったところ、‘The Detached Squadron’（Ruxton、2015 : 392）の 1 隻、護衛艦インコンスタント Inconstant 号に乗船する、従兄弟のルイス・バッテンバーグ王子（Prince Louis of Battenburg）と、ブレイク氏（Mr. Blake）に遭遇したのである。彼らはその日の午前に「川下り」を行ったとあるので、皇孫と王室関係者の「川下り」は少なくとも 2 回行われたようだ。但し、このルイス・バッテンバーグ王子と出会ったことを裏付ける記述は『サトウの日記』にはない。

7－4－3. 『西京新聞』の報道と日本側・京都府側の準備

『西京新聞』の報道と英国側の資料を全体的に比較すると、『西京新聞』では日本・京都府側のプレスリリースをそのまま伝えた感がある。実際の取材の有無については、『バッカンテ号の巡航』や『サトウの日記』ともに、取材を受けたという記述はない。また、新聞報道の旅程を読んだ筆者の第一印象は、報道通りの観光箇所は時間的にも全て訪問できるとは思えないほど多いというものであった。皇孫たちの旅程は、日本側の接待掛が先行し

て準備を行った事を考慮すると、日本・京都府側が、観光箇所を多めに準備し旅程の作成を行い、その中には当時急速に西洋人観光において知名度が向上していた「川下り」を、新京都観光として提示したと考える。その「知名度の向上」の背景としては、本章 7－4－2 で挙げた訪日観光客には必須な読み物である、HT を含む英文ガイドブックが重要な役割を果たしたことは確かであろう。

また、山本らによる『覚馬名所案内』にある名所は、一概には言えないものの、ほぼ日本側・京都府側が提示した名所であることも興味深い。『西京新聞』報道の中で『覚馬名所案内』にみえないのは、幹山陶器場（具体的な店名はなく、'The Earthenware of Kiyomizu'）、円山鉱泉場（「円山」はあり、金閣を模した三楼の建物[19]は『覚馬名所案内』の銅版画にある、鉱泉場は 1873 年に営業を開始した吉水温泉だと思われる）、集産場[20]、豊国神社（明治 13 年復興）、東本願寺（蛤御門の変による火災の影響）、天龍寺（火災の影響[21]）、である。実質太秦（広隆寺）が、『覚馬名所案内』にない項目である。

『バッカンテ号の巡航』では『覚馬名所案内』にある東寺・東福寺、また『覚馬名所案内』にない広隆寺が細かに描写された。この点については本章 7－4－4 に後述する。

7－4－4. サトウの名所選択

サトウの選択した名所には、サトウの好みと HT が大きく影響した。サトウは駐日英国外交官の身分であると同時に、当時の京都府知事北垣国道とはすでに知り合いであり、旅程はサトウによって柔軟に変更、選択して支障なかったように考える。皇孫たちの実際に訪問した京都名所は、HT（1881）の中に全て掲載されていた。それらは西本願寺（313）、東寺（314）、清水（323）、将軍塚（326）、祇園（325）、知恩院（327）、御所（301）、北野（305）、金閣（306）、保津川下り（340）、広隆寺（309）、仁和寺（308）、東福寺（318）、稲荷社（316－317）、平等院（336）である。その中でも、東京にて皇孫たちが親好を深めた明治天皇が幼少の頃居住した御所は、英国王室に属する皇孫たちにとって、特に時間をかけて観るべき場所であった。サトウは HT（1881）に、推薦する店の 1 つとして陶器購入については幹

---

19 高木博志（2016、42）に写真がある。

20 HT（1881）には、'A small bazaar (the Kwangio-ba Buppin Atsukai-jo) has been opened in Teramachi-don north of Sanjo- dori' である。HT（1884）には、カッコ内が 'the *Shu-san-jo*' となる。

21 「元治元年、蛤御門の変に際して長州軍の陣営となり、兵火のために再び伽藍は焼失」である。臨済宗天龍寺派宗務本院（2021）「天龍寺について」、http://www.tenryuji.com/about/index.html　最終閲覧 2021 年 5 月 29 日。

山（299）を挙げている。

HT の影響は『バッカンテ号の巡航』の記述、皇孫たちの実際の行程に顕著に見られたことがわかった。

7－5. まとめ

本稿では、英国皇孫たちの京都観光旅行の詳細を、英国皇孫側の旅行記とサトウ自身の日記を比較させることによって、その詳細を明らかにしようと試みた。そして皇孫たちの旅行に、サトウ、日本・京都府側とサトウらの HT 初版が与えた影響について調査した。

本稿の調査で得た重要な気づき・発見は以下の 6 点である。

第 1 に、『バッカンテ号の巡航』は皇孫たちの公式世界旅行記録であるが、実質的な作者であるダルトンによって、皇孫たちが興味を抱いた事柄の他に、実際には訪問しなかった名所や行動について、自らの見聞とサトウの随行中の説明、HT を含む文献を合わせて書いた旅行記であった。

第 2 に、『西京新聞』の報道にある名所訪問は、日本側・京都府側が準備したモデルコースであり、サトウの名所選択と合わせて、皇孫たちが古い寺社仏閣めぐりに飽きてしまわぬよう、京都ならではの文化体験を可能にするものであった。

第 3 に、「川下り」においては、皇孫たちは自然冒険の愉快さと満足感を得た様子が明らかになった。

第 4 に、日本・京都府側の準備がなくなり、旅程がサトウに一任されたと考える部分が、11 月 9 日の京都から奈良までの旅程である。

第 5 に、ジョージ王子の刺青については、王子自身の「日本旅行中にするべき」真剣な願いであったが、興味のなかったサトウとの間に温度差がみられた。

第 6 に、サトウらの HT において、音声から英訳した名所の名前の訳に少なくとも 2 ヶ所に誤りがあり、そのままチェンバレンらの第 9 版まで継承されたことがわかった。

これらのことから、英国皇孫の京都観光旅行は概ね日本・京都府側が準備した、当時最先端の西洋人京都観光プランに、日本文化と新旧の京都名所に詳しいイギリス人サトウが、10 代の皇孫たちの好みを考慮し、優れた調整力を発揮しつつ取捨選択したものであったことが明らかになった。当時の京都国際観光における西洋人の嗜好と、その後の一般的な西洋人観光に影響を与え、「訪れるべき」名所に発展する最も初期の段階を確認した。

第 8 章　「保津川下り」国際観光の始まりと発展

8－1.　はじめに

明治初期の英文京都ガイドブックには、‘The Rapids’（急流）という興味深い項目がある。これは現在の京都府亀岡市の保津川下り（以下、「川下り」）を指し、明治初期に新しく生まれた名所であることを、本稿第 4 章、第 5 章、第 6 章、第 7 章において触れてきた。「川下り」は寺社仏閣巡りが中心の京都観光において唯一、急流を和舟に乗って下り、絵のように美しい自然景観を堪能するという動的で新しい観光であり、西洋人たちを魅了した。

明治初期の英文ガイドブックには、ある程度整った形の観光「川下り」があるが、「川下り」はいつ始まりどのような経緯を経て、西洋人に好まれて発展したのか、という点については、現在に至るまで詳細な研究はなかった。

上林ひろえ（2015）は、観光としての「川下り」の起こりについて調査を行い、江戸時代の保津川下りについては、日本人乗客において観光として存在したことを確認した。外国人観光客については 1874（明治 7）年に西洋人の川下りを行った、という『日出新聞』（1920（大正 9）年 4 月 11 日付）の記事を指摘し、「実際に明治 7 年（1874）に『西洋人』が川を下ったのならば、どうやって保津川下りを知り得たのか疑問であるが、残念ながらその詳細を得ることはできなかった（244）」と述べた。上林は、英国エリザベス女王の孫であるアルバート・ヴィクター王子とジョージ王子が「川下り」を行ったことについて触れ、「明治 14 年にイギリスの王室がなぜ保津川下りを知っていたのか（2015：245）」、そして、その旅行にはイギリス領事館員であるサトウが随行員であり、そのサトウは「同年優れたガイドブックを出版している（同書：245）」ことを指摘して、保津川下りとサトウとの関係を示唆した。

上林の問いは大変興味深く、筆者の本章における問いとほぼ同じである。皇孫たちの「川下り」を含む京都観光旅行とアーネスト・サトウの随行については、本稿第 7 章にあるため、本稿では西洋人の観光「川下り」の起源と「川下り」の明治期の進展に焦点をあて、英文ガイドブックを詳細に比較・調査し、確認できた情報を集め研究を深めることとする。

『日出新聞』記事の「1874 年、西洋人によって始まった」については、現在のところ裏付けとなる史料は見当たらない。しかし、本稿第 6 章の調査において、未見であった SN シリーズの研究を行い、SN 改訂第 2 版に‘We do not better than quote from an account written by

one of the first travelers who made the journey in 1876' (1878, 38) （1876 年に初めて急流を下った内の一人が書き留めた体験談を引用するのが最良でしょう）、という記述を発見した。SN シリーズは京都博覧会開催に伴って、西洋人の京都観光のニーズに合わせて制作されたと推測される。特に「川下り」の記載については、初版・第 2 版にはなく、改訂第 2 版に初出するので、西洋人の間では 1876 年には最も初期の「川下り」が行われたことは確実であり、その時の体験を語った大変貴重な証言が SN にあった。また、その 'journey' を行った人の手記が書かれた部分を含む SN の記述は、今まで「川下り」記述の嚆矢とされていた TG において、SN 改訂第 2 版の内容を抜き出し、新たな出版物として刊行したものであったことが確実となった。本稿第 5 章（5－4－5）において TG の特色の 1 つとした「旅行記のような記述」の元は、SN で紹介された実際の体験談から切り取ったものであった。

この他にも、SN 初版は『覚馬名所案内』から、名所選定について影響を受けた可能性があり、SN の後に続くガイドブックに大きな影響を与えた可能性がある。例えば、HT 初版の京都部分を執筆するために、サトウが行った 1879 年 12 月の取材旅行においても、サトウが SN を読んでいたことが『サトウの日記』にある。

「川下り」の詳細を知ることは、京都国際観光の黎明期を論ずる上で不可欠である。特に SN とその他の英文ガイドブックを用いた「川下り」の記述からの研究はあまり見られず、大きな余地があるので、本章にて調査を深める。

8－2. 先行研究

先述した上林（2015）にあった、遊船の始まりについては、『新修亀岡市史』（2004）に『日出新聞』の記事がある。1920（大正 9）年 4 月 11 日付の『日出新聞』によると、タイトルは「保津の舟遊」である。「筏は古い歴史を有せるが遊船として客を下す事は明治 7 年始めて南桑田郡篠村字山本の浜より西洋人を下したるが始まりにて」という重要な情報がある。その後「明治 35 年[1]、京都鉄道の開通して亀岡に停車場の設置されたる以来、専ら保津川下りの乗客は保津村の橋畔より発停し、全く山本浜は衰退して終うたのを、今回嵐峡乗船株式会社を起して山本浜の再興を企てせられた（『日出新聞』、1920 年 4 月 11 日）」とある。この記事は嵐峡乗船株式会社が設立（同記事、402）された時に出された記事であり、歴史的に最初の西洋人川下りに言及した記事であった。

[1] 『新修亀岡市史』資料編第 3 巻によると「明治 35 年」の所には「（明治 32 年）（2000 : 402）」とあり、カッコ内が正しい。

長谷川雅世（2015）は、来京西洋人の古都京都の寺社仏閣巡りについて、旅行記などの感想を調査し、当時寺社仏閣だらけの京都観光に「不満を漏らしているイギリス人は少なくない（193）」と述べた。

アーネスト・サトウは、『サトウの日記』の中に、1881 年 11 月 7 日に皇孫たちに随行して「川下り」を行った感想を述べた。その内容は ‘To Kameoka [亀岡] in kuruma and down the [Hozugawa] rapids, a very delightful morning, no danger but some excitement and splashing of water’. (2015、394) である。

日本文・英文で書かれた『保津川遊船の栞 *The Hozu Rapids. A short guide for The tourists.*』（1926）[2]（以下 *Short guide*）には、四季それぞれの「川下り」の楽しみ方が丁寧に描かれ、川下り中の見どころが書かれている。運賃などについての言及はない。発行所の保津川遊船株式会社の地名は「保津浜」である。

原田禎夫（2017）は、近代化の流れのなかで、物資輸送は鉄道や道路網が発達し、水上運送に取って代わったが、「京都府の保津川や熊本県の球磨川などいくつかの河川では、河川舟運は観光川下りに姿を変え、地域の重要な観光資源となるとともに、水運文化を現在に伝えている（145）」と述べた。

豊田知八（2015）は、保津川下りに使用される舟は「高瀬舟」と呼ばれる日本古来の川舟であり、今から約 400 年前に舟運を開いた嵯峨の豪商・角倉了以以来の操船技術とその技術を守るための船頭の養成・育成方法・航路設備技術などについて述べた。

小谷正治（1984）は大正時代に船頭であった人達から、西洋人乗客の当時の乗船の様子、接客の思い出などを聞き取った。また、保津川遊船の経営の変遷についても詳しい。

保津川遊船企業組合発行の『京都府亀岡市保津川下り』（2019）には、保津川下りの概要と、現在の企業組合が把握し、まとめた記録と写真を掲載する。同企業組合営業統括理事の豊田覚司氏によると、現在の企業組合は経営母体の変遷のため、最も初期の記録は見当たらない（筆者、2021 年 3 月 2 日：採録）とのことである。

川内有子（2020）は、『覚馬名所案内』の研究において、サトウが SN を「読み応えある京都案内書として携帯し（中略）英語で書かれた京都案内書としては The Guide [3]に続いて 2 番目に古いこの本は、同様に 70 頁に満たない薄い冊子で、地図は収載せず、京都の街を

[2] 初版は 1923（大正 12）年である。写真を入れた日本文 16 ページ、英文は文章だけで 21 ページある。

[3] 本稿における『覚馬名所案内』である。

歩きながら紹介するというスタイル（304）」であると『覚馬名所案内』の調査の中で、SN 第 2 版について述べた。

これらの先行文献を受け、本稿の研究の問いは 3 つある。それは①SN に描かれた最も初期の「川下り」の様子、②英文ガイドブックからみた初期の「川下り」の発展、③「川下り」が西洋人観光において好まれた理由、である。

8－3. 研究方法

新出史料であるヒョーゴ・ニュース印刷の SN 改訂第 2 版、次にキーリング編纂の TG、そしてサトウとホーズ編著の HT (1881)、HT 第 2 版（1884）、チェンバレンらの HT 第 3 版（1891）、最終版であるチェンバレンらの *A Handbook for Travellers in Japan (Including Fermosa), Ninth Edition.*（1993）（HT 第 9 版）を使用して、各々の記述にある特徴、時系列での「川下り」の発展の様子について調査する。英文に付随する日本語訳は、特に翻訳者を記さない限り筆者による。

8－4. 結果と考察

SN においては、「川下り」の原文を引用し、日本語訳をつける。次に TG においての加筆点や削除点、TG の特徴を述べる。HT においては改版ごとに進展する「川下り」の様子を述べる。それぞれの項目ごとに考察を行った。

8－4－1. SN 改訂第 2 版 (1878)

神戸居留地にヒョーゴ・ニュースにて刊行された SN 改訂第 2 版は、『覚馬名所案内』の知名度に比べて、現在まであまり研究の場で知られていなかった。しかし、『覚馬名所案内』と同じく京都とその近郊に特化した英文ガイドブックであるため、重要な史料である。筆者が『サトウの日記』（1879 年 12 月 2 日付）の記述の中に SN の名前を見つけた詳細は、本稿第 6 章（6－4－1）にある。SN シリーズを探し、その内容を調査したところ「川下り」の始まりについて、重要な記述があることを確認した。

SN においての「川下り」に関する発見は 2 つある。第 1 に、西洋人による初めての「川下り」が行われた年が書かれていたことである。これは、SN 初版（1874、ヒョーゴ・ニュース印刷）、SN 第 2 版（1876、横浜 F. R. Wetmore 印刷）になく、SN 改訂第 2 版（1878、ヒョーゴ・ニュース印刷）にだけ書かれている。該当部分は下に示した原文の下線 c.の‘we do

not think we can do better than quote from an account written by one of the first travelers who made the journey in 1876'. （1876 年にこの舟旅をした最初の旅行者の一人が書いた手記を引用するのが、この旅の説明としては一番良いでしょう）である。この部分の直後から、生き生きとスリル溢れる「川下り」の感想が綴られた。

第 2 に、1878 年の時点において、すでにおおかた整った乗船場までの行き方と嵐山から京都市内への帰り方が述べられたことから、SN で述べられた最初の「川下り」である 1876 年から、1878 年の SN 改訂第 2 版刊行までの期間内に急速に「川下り」を含む往復の観光行程は定まっていったかと思われる。

第 3 に、この SN の「川下り」記述は、その後に刊行された TG に大部分を抜き出され、新たに編集された。TG の該当部分については、本稿第 4 章（30.「急流下り [The Rapids]」）を参照されたい。

内容を把握するために「川下り」の SN にある原文を以下に示し（下線は筆者による）、そのあとに日本語訳をつけた。

The Rapids.

A most delightful day may be spent in a trip to [a]Kameyama and down the rapids of the Oigwa. Kameyama was formerly a place of some importance, the residence of a daimio, and boasted a castle and keep of considerable strength.

The castle was pulled down last year, but the moat and a part of the walls are still left. It is situated in the province of Tamba, about six ri from Kioto, to which there is a fine broad road over the hills. Jinrikisha can be engaged at Kioto to go all the way to Kameyama, although there are one or two stiff climbs up which the traveler will find it necessary to walk. On reaching Kameyama he can either make at once for the river, hire a boat, put his jinrikisha on board, and proceed on his journey to [b]Arashiyama, partaking of what refreshments he may have brought with him on board; or he can go to one of the numerous tea-houses with which the town is provided, and partake of luncheon before going on board, In either case the boat establishment opposite the old castle site is recommended as the best place to hire a boat, for if taken lower down the stream the traveler enters the rapids at once and loses the advantage of the contrast of a little smooth sailing first. The boats used for the passage are about forty feet long and from seven to eight feet beam, and in describing the trip [c]we do not think we

can do better than quote from an account written by one of the first travelers who made the journey in 1876—"We start at a quarter to one o'clock, the first mile of our journey being down the plain, when we enter a narrow gorge, where the river becomes rocky and the current rapid. A man then takes his place at the bow, with a bamboo, and to him and the man at the stern is left the management of the boat, little propelling power being needful. [d] We had been informed by a friend that an accident never had occurred to one of these boats, but even with that comforting assurance we could hardly divest ourselves of some slight fears as we saw the boat rushing at an alarming rate to what appeared certain destruction on the rugged rocks which seemed to encircle us on every side, but with a prod of the bamboo in front and a judicious use of the yulo behind, we managed to escape every danger, seemingly by a miracle. We hardly know anything more magnificent in its way than this river gorge. The high banks on its sides are beautifully wooded, and as it twists and turns in all directions, [e] we appear to be entirely surrounded by rugged rocks and verdant hills-the verdure being slightly relieved by the bloom of the azaleas which are sprinkled over rock and hill- with what is almost a roaring cataract under our feet. Our boat grazes the rocks occasionally, but she suffers little damage, only springing a slight leak at her stern, which is caulked at one of the quiet pools between the rapids. After a delightful passage of about two hours and a quarter we come to the end of our river journey at Arashiyama. " The time occupied over the descent varies according to the quantity of water in the river, and is generally done much quicker than on the above occasion, when the river was rather low. On reaching Arashiyama, the return to Kioto may be accomplished in about one hour in jinrikisha.

If there is a large party going and none of them are averse to a walk of a few miles through a delightful country, the jinrikisha can be discarded at Kutsukake and the reminder of the journey accomplished on foot. It will be necessary in this case to send the jinrikisha to Arashiyama to wait the arrival of the boat, as they are difficult to be got there, of course reserving as many of the coolies as are necessary to carry provisions and all supplies. By adopting this mode the expense of an extra boat may be saved, as the jinrikisha take up a good deal of room and are often in the way. (1878, 38—39)

[日本語訳]

急流

亀山までの旅と大堰川の急流下りで、とても楽しい一日を過ごすことができます。亀山はかつて大名の本拠地があった重要な場所で、かなり強固な城と天守閣を誇っていました。その城は去年取り壊されましたが、城を取り囲む堀と石垣の一部が残っています。亀山は京都から約 6 里離れた丹波の国にあり、丘陵を越える立派な広い道路があります。人力車は京都で雇い、亀山まで全行程において乗車できますが、険しい上り登り坂が 1、2 箇所あるので、その際は歩く必要があります。亀山に着いたら、すぐに川のほとりに行き、舟を借りて、人力車を乗せて嵐山まで旅を進めます。その際には、舟の中に持参した食べ物を持ち込むことができます。あるいは町に数多くある茶店で昼食をとってから、船に乗り込むこともできます。どちらにしても舟を借りるには、城跡の向かいにある舟貸屋が一番良い場所にあるのでお勧めします。というのは、少し下流から乗り込むと、すぐに急な流れに入ってしまい、最初に舟が少し静かに滑り出し、それから急流に入るという対照的な流れを体感できる乗り心地の良さがなくなるからです。この舟旅に使われる舟は、長さが約 40 フィート [約 12.2m]、幅が 7〜8 フィート [約 2.1〜約 2.4m]あります。1876 年にこの舟旅をした最初の旅行者の一人が書いた手記を引用するのが、この旅の説明としては一番良いでしょう。[4]

「私達は 1 時 15 分に出発し、最初の 1 マイルはなだらかな流れを下ったが、狭い峡谷に入ると川には岩が多くみられるようになり、流れが急になった。船首には竹の棹を持った船頭がいて、船尾の男に船の航行を任せているが、舟は勝手に進んでいるようだ。私たちはある友人から、この急流を下る舟には一度も事故が起きていない、という情報を得て一定の安心感は持っていたが、それでも険しい岩が四方から取り囲み、確実に舟が破壊されるのではないか、と思う速度で進む光景から、わずかな不安を拭い去ることはできなかった。しかし、前方で竹の竿を使って石を突き、後方で櫂を上手に使う船頭たちの動きによって、私達は奇跡のように全ての危険から逃れることができた。この川の峡谷ほど壮大なものはない。両側の切り立った岩には美しい木々が生い茂り、あらゆる方向に伸びているため、私たちは険しい

[4] 原文は改行がないが、日本語訳においては、旅行者の記述からの引用部分をはっきりさせるために、引用の始まりから終わりまでを便宜上改行し、文末を敬体ではなく、常体とした。

岩々と緑の丘に囲まれているように見える。その景色は、ツツジの花が散りばめられたように咲き、緑一色の丘の色彩を少し和らげている。しかし、乗船する私達の足元には逆巻く激流があるのだ。私達の舟は時折岩をかすめるがほとんど損傷することなく、船尾にわずかな水漏れがあっただけで、それも急流の間の静かな流れの時に直された。約 2 時間 15 分の愉快な舟旅の後、嵐山に到着した。」

「川下り」の所要時間は水量によって異なるが、一般的には川の水量がかなり少なかった今回よりも、もっと早くに終了します。嵐山到着後、京都への帰り道は、人力車で約 1 時間かかります。

もし大人数であって、一行の誰もが田舎の風景の中を数マイル楽しく歩くのが嫌でなければ、沓掛で人力車を降りて、その後徒歩で乗船場へ向かう方法もあります。この場合、人力車を嵐山に回送させ、舟の到着を待たせる必要があります。予約無しでは、人力車は嵐山ではあまりつかまらないからです。もちろん、食料やすべての携行品を運ぶのに、人足は必要人数を確保することが大切です。この方法だと大きくて邪魔になることが多い人力車を、舟に積み込む追加料金が節約できます。

8－4－2.　TG (1880)

TG は SN の「川下り」を全体的に抜き出した情報を使用したことが明らかになったので、本項では TG の「川下り」内容の特徴について、本章 8－4－1 にある SN 原文の上付下線を用いて説明する。

第 1 には、SN の日本語地名を英語に訳している。下線 a.の‘Kameyama (tortoise Mountain)’、下線 b.の‘Arashiyama (Wild Mountain)’である。

第 2 には、重要な部分の削除があった。それは下線 c.の 1876 年の最初の「川下り」に関する部分であるが、下線 c.を削除し、手記のみを本文として載せた。そのため TG の記述だけを読めば、キーリング自身の旅行体験であるかのような感覚になる。また TG が「1876 年」を削除したため、最も初期の西洋人「川下り」の始まりの年は、本研究以前まで不確定であった。

第 3 に下線 e.の緑の岩々にツツジの花が散らばって美しい様子を著す部分である。編纂者キーリングは、TG の序文において、‘In the following pages, a detailed description of beautiful places and grand scenery has been avoided,’ (1880, Preface) （本文には、その場所の美しさや素晴らしい景色についての細かい描写は避けました）と述べた。キーリングの編纂方針・

特徴が現れた部分であると言える。

第 4 に大きな特徴として、編纂者キーリングのウィットに富んだ文章を指摘する。それは ‘Ladies need not fear making the descent as an accident is never known to have taken place’. (89) （今まで事故は起きたことがないので、ご婦人方もぜひ急流を楽しんでください）の記述である。これは、SN の下線 d.の言い換えであるが、 ‘Ladies’ を入れて SN にはない個性を出している。読者の夫婦・女性がこれを読み、「川下り」を楽しみに来京したことが推測される。

8－4－3. HT 初版（1881）

HT 初版は、客観的な文章で感想は見られないのが特徴である。例えば「朝 9 時に三条大橋付近を出発し、樫原、沓掛などの地名を入れた行程管理が書かれ、山本浜には 3 時間で到着する」、の箇所である。前述した SN、TG とも人力車の舟積み込み料金が発生するので徒歩の推奨をしたが、HT にはその料金について言及がない。旅のヒントとして急な上り坂のため車夫が人力車を引けない時は降車して歩くものとする。乗船場に到着後舟をチャーターするが、その料金については、 ‘The charge for a large boat is 3 yen’. （340）（大型の舟は 3 円です）と定額料金を示した。また、‘It is advisable to reach Yamamoto before noon, if possible, as the boatmen make a double charge after that hour, on the ground of their not being able to re-ascend the river the same day.’ （同書）（山本浜には正午までに到着した方が良いでしょう、というのは、船頭たちは同日、舟を乗船場まで遡らせて回収する必要があるので、それが無理な時は 2 倍の料金になってしまうのです）という情報がある。これは SN には書かれておらず、正午を過ぎての出発については、新しい料金を舟の運営側で取り決めたと思われる。

8－4－4. HT 第 2 版（1884）

HT 第 2 版は、初版に続けてサトウとホーズが編著者である。第 2 版の加筆部分には、推薦する言葉である ‘This delightful expedition is much to be recommended’, （この心躍る遠出をお薦めします）や、川下り中の風景、見どころの説明が加わった。

例えば ‘Of the numerous small rapids and races, the following are a few of the most exciting’ :Koya-no-taki (‘Hut Rapid’)’ （多数急流の見どころはありますが「小屋の滝」と呼ばれる地点は、一番スリリングな見どころの 1 つです）である。実はこの「小屋の滝」は、

「子鮎の滝（保津川遊船企業組合、2019：3）」が正しい。船頭の音声での案内を聞いて、「小屋」と考えた可能性がある。

HT 初版から第 2 版にかけた情報の更新は、‘It is still, however, in places so steep that it is often necessary to walk, and a new road, which will avoid the hill completely, is now being constructed’.（未だ険しくて人力車が進めない道を徒歩で行かなければいけませんが、この丘を完全に避けることができる新しい道路が建設中です）である。また神戸、大阪方面からの旅客は、向日町駅から人力車が便利との的確な旅のヒントがある。自身の乗車してきた人力車の舟への積み込みについて、‘There is no extra charge for taking them in the boat’（乗車してきた人力車を舟に載せるのに余分な費用はかかりません）という新情報を載せた。これは HT 初版には記述はなく、HT 第 2 版になってから「不要」の記述があるので、1884 年以前は人力車積み込み料金が存在しており、舟側が観光客からの要望を鑑みて、無料にした可能性も考えられる。

8－4－5. HT 第 3 版（1891）

第 3 版の著者はチェンバレンとメイソンに交代し、表紙に‘Revised and for the most part re-written by …’とあるように大幅に改訂された。「川下り」の冒頭には‘This expedition makes a pleasing variety in the midst of days spent chiefly in visiting temples’.（この遠出は、寺社仏閣巡りばかりの日々の中で、楽しい変化をもたらしてくれます）と述べられた。

HT 第 2 版から第 3 版にかけての情報の更新として、‘The distance from the Kyoto Hotel to the vill. Of Hozu, where boats are engaged for the descent of the rapids, is under 6 ri;　[約 23.6km]…’（京都ホテルから急流を下る舟が待つ保津村までは 6 里以内です）とあり、出発地点として示されたのは新しく開業したばかりの「京都ホテル」である。京都ホテルは、田中泰彦（1994）によると、1890（明治 23）年に開業し「開業披露の新聞記事は常盤楼となっていますが、正式名は京都ホテルであったよう（51）」である。同書の左ページにある石田有年作の銅版画には‘Kyoto Hotel Tokiwa’とある。また乗船地として、地名「保津」が始めて載った。人力車の 1 日料金は変更無く 1.5 円である。大型の舟の川下り料金は、初版では 3 円であったが、値上がりして 3.5 円である。

改版を重ねるたびに、鉄道路線、道路の拡張、新トンネルなど交通路線が発達し、「川下り」乗船場までの道のりが格段と便利になっていく様子が確認された。

8－4－6. HT 第 9 版（1913）

項目のタイトルは ‘Rapids of the Katsuragawa and Arashiyama’ である。交通機関として、人力車で二条駅、列車に乗って亀岡下車、亀岡駅からは徒歩又は人力車、という行程を薦めている。「保津」が乗船場で舟がある。 ‘The charge for a large boat is 6 1/2 yen, with 1 yen additional for each extra man in flood-time, unless the river be so high that they decline to go altogether.’（大型の船の運賃は 6 円 50 銭[5]で、洪水時には船頭が 1 人増えるごとに 1 円が加算されます。しかし川の水位が高すぎると全員が乗船見合わせとなります）というシステムであった。12 時を超えての乗船にかかる費用は、船頭 1 人当たり 50 銭の追加料金[6]である。第 9 版においても正午までの到着を呼び掛けており、その為 ‘Visitors from Kobe or Osaka must change at the Kyoto station into a Kameoka car’（神戸・大坂からの来られる方は京都駅から亀岡行の列車に乗り換えて下さい）との時間短縮のヒントを加えた。

HT 第 2 版にある名勝 ‘Koya-no-taki’ の訳については、HT 第 9 版にも訂正はなく、そのまま誤記載された。

桂千代造（発行、1926）の *Short guide* には、‘This fall is followed by another great one called Koaiga-taki, or Ayu-fish Fall’ とあり、HT の影響は見られず、HT は参考文献ではなかったと考える。

8－5. まとめ

本稿は西洋人観光「川下り」に焦点をあて、1878（明治 11）年から 1913（大正 2）年までに刊行された英文ガイドブックから、その最も初期の乗船とその後の発展、西洋人が好んだ理由について調査を行った。『日出新聞』の「1874（明治 7)」という情報については、今後も調査を続けることが必要であるものの、本稿の調査により、未見の史料であった SN の文中に「1876 年」という年が特定された。そしてその手記の内容、すなわち最も初期の「川下り」の様子が明らかになった。手記の中には「私たちはある友人から、この急流を下る舟には一度も事故が起きていない、という情報を得て一定の安心感は持っていたが」という一文があり、その友人はこの手記の人物より前に「川下り」を行った可能性もある。しかし、「一度も事故が無い」と言うからには、日本人たちの観光「川下り」が先行する形で、一定の乗船実績があったことは確実である。上林（2015）は「明治の日本人にとって

[5] 第 7 版（1903）では 5.5 円であった。
[6] 第 7 版の頃から同料金の追加料金であった。

は急流を下ることや、保津峡谷の景色の美しさは当たり前のことであり、観光としては考えていなかったのに対し、外国人にとってそれは新鮮なもので、わざわざ出かけてでも行きたい観光であったと考えられる（255）」と論を締めくくっている。本稿の調査からは、上林の「当たり前のことであった」に加えて、従来の「遊船」「舟遊び」という概念は、明治初期からの西洋からもたらされた「観光」の概念とは相違があったと考察する。

次に、SN における「川下り」の情報は TG のそれにおける殆どの情報源であった、と本稿の調査で判明したことも重要な発見であった。詳しくは本稿第 6 章（6－6－2）を合わせて参照されたい。TG は 7 年に及ぶ HT 改版の合間に、自身の改版を続け「川下り」を有名にした大きな役割があったと言える。

さて、TG の編著者キーリングの「女性」についての言及は特筆すべきである。当時も今も、西洋人の生活スタイルとして、既婚男性は夫人を同伴するのが常であったので、新しい観光名所にも、夫婦がともに楽しめるものが求められた。「川下り」は一見危険なように見えるが女性も安心して楽しめる、と TG の読者は感じ、「川下り」はより身近な旅行目的地になった。

ここに 1 つの貴重な史料がある。1890 年当時の駐日西洋人の日本での生活の様子を書いた、神戸外国人居留地行事局長兼警察署長夫人イーダ・トローチック(Ida Trotzig, 1864－1943) の日記の翻訳である。夫ヘルマン (Herman Trotzig, 1832－1919) が取得した 2 日間という短い休暇中に、小さい子どもベルダを預けて京都を旅した。その目的は「川下り」であった。夫妻はこの半年前に京都を訪問しているが、その時には「川下り」はしていない。イーダ夫人の日記を以下に抜粋する。

> それから間もなくヘルマンが、嵐山へ急流下りに行きたくないかと尋ねた。私は、あれから随分になるので是非もう一度行ってみたいと思っていたからとても嬉しかった。「急流下りをするなんてとてもすばらしいわ、水がたくさんあるといいわね」私は声を弾ませた。「春には雨がたくさん降ったから、きっとすばらしい状態だと思うよ。お前も気に入るだろう」ヘルマンがいった（草山巌、翻訳：伊達正俊、瀬戸山光、1987：77）。

夫妻は 1891 年 6 月 10 日に 1 泊したのち、翌日 6 時前に中村屋旅館を人力車で出発した。途中激しい雨があったが、全行程を人力車でこなし、保津に到着した。「しばらく休憩し、

サンドイッチにワインの昼食を済ませ、底の平らな長い舟で岩の間を縫う保津川下りを楽しんだ（同書、78)」と日記は綴られた。

このイーダ・トローチック夫人の日記から、「川下り」には自然の清らかな水がふんだんに溢れ、安全で心地よいイメージがあり、神戸居留地からはちょっとした休日にも出かけられる、程よい距離にある訪問箇所だとわかる。その「川下り」を、夫婦 2 人だけの楽しい遠出の目標にした姿があり、当時の西洋人が見出した保津川下りの魅力があった。

HT 初版から第 9 版までのシリーズは、明治初期から 32 年間にかけて、500 から 600 ページもの厚さの日本の旅行案内書として、西洋人旅行客に信頼されたガイドブックであった。安心して行って帰れる「川下り」の行程や、知っておくべき舟・人力車等の適正料金、交通機関等の情報をその都度更新し、旅行客に大きな貢献をした。

本研究から導き出された保津川下りの進展と好まれた理由は、大きく 6 つある。

第 1 には、「川下り」が既存の静的な京都観光名所が全く持ち得なかった、程良いスリル感と自然景観を楽しむことのできる動的な観光アトラクションとして魅力があったことである。

第 2 は、日本での最主要観光都市の 1 つである京都に近接しており、乗船場までの道のりが初期には人力車と徒歩、その後鉄路が亀岡まで伸び、劇的に乗船場に向かいやすくなったこと、日本国内の他の川下りに比べて、体験しやすい交通環境があったことである。

第 3 は、「川下り」に使用される簡素な和舟に乗込む不安と、船頭の優れた操作技術等の安心感のギャップ、という魅力である。

第 4 は、「川下り」中、乗船客を取り囲む自然環境とスリリングな川の水流の強弱を間近に体験できることと、適度な乗船時間である。

第 5 は、いつでも乗船できる便利さである。予約方法については、SN、TG、HT に全て記述がないことから、いつもは物資輸送用の舟が、天候不順や水流が少ない時を除いて、すぐに観光舟として転用が容易[7]であったと考える。また船頭たちの仕事は物資輸送から、舟下り中の見どころを乗船客に案内し[8]、安全の担保も含む観光運輸サービス業に大きく変化した、と考える。

---

[7] 本章 8－2 で示した原田禎夫（2017）の論である。

[8] 豊田知八（2015）によると、操船方法の伝承として、新人船頭は 2 年間かけて基本的な操船技術を学ぶ。その教育の中で、新人船頭は、主要な急流部である「小鮎の滝」や「獅子ヶ口」などの箇所や地形、風景を覚え、「その場所でどのような仕事をしなくてはいけないか、口頭で指導を受ける（235)」。

最後の第 6 は、英文京都ガイドブックの貢献である。西洋人に向けて「川下り」の魅力と、女性の乗船についての安全性を含む情報の更新、旅のヒントを迅速にわかりやすく記述し、情報を発信した。

保津川下りは、京都国際観光の黎明と発展には欠かせないものであり、西洋人は京都での寺社仏閣見物とともに、「川下り」を楽しみにやってきたことを確認した。明治初期の英文ガイドブックは「川下り」の観光化に貢献し、「川下り」は京都を代表する人気アトラクションとなった。1881 年には、英国皇孫の観光箇所として選択された。その後例えば、1881 年に乗船したジョージ 5 世の息子、後のエドワード 8 世[9]をはじめ、国際的な要人たちが「川下り」し、メディアに取り上げられたことも「川下り」を有名にした契機となった。そして「川下り」は京都観光への憧れと、「体験すべき」観光という位置づけをもたらすことになった。

保津川遊船企業組合（1973 年創立）は、原田禎夫（2017）によると、船頭衆の組合組織であり、「このような運営形態は、我国の観光川下り事業者でも唯一のもの（147）」である。

以上のように、新史料 SN を含めた英文ガイドブックの視点から、「保津川下り」の国際観光の始まりと発展を考察した。

---

9 後のエドワード 8 世が 1922 年に乗船した写真が保津川下り乗船場に掲げてある。「Boarding Photo: The Prince Edward (Duke of Windsor イギリス皇太子エドワード 8 世乗船写真（1922 年・大正 11 年)」保津川遊船企業組合所蔵。

第９章　「伏見稲荷大社」西洋人観光の始まりと発展

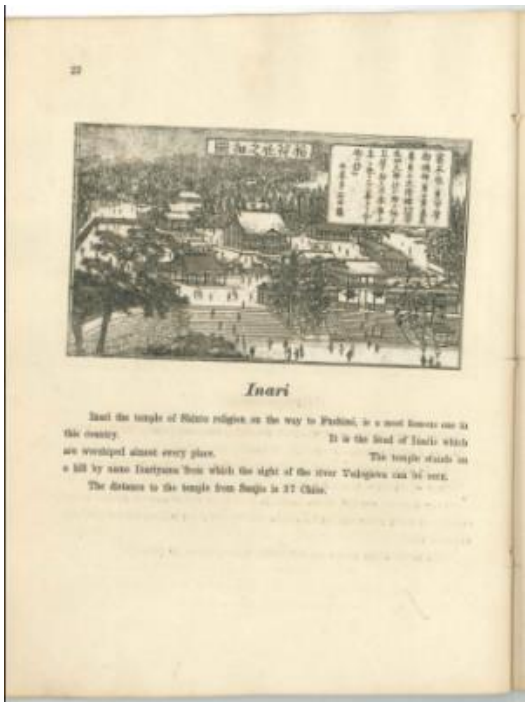
9－1.　はじめに

「伏見稲荷大社」（以下「稲荷」とする）は、明治期の英文京都観光ガイドブックである、『覚馬名所案内』には‘Inari’、SN シリーズには‘Fushimi Inari’、KG には‘Inari no Yashiro’、HT シリーズには‘The Shintō Temple of Inari (Inari no Yashiro)’として紹介される。

現在までの研究において、日本初の英文京都ガイドブックである、日本人制作の『覚馬名所案内』の原文には「稲荷」は以下の通りに記される。図版 9. は、『覚馬名所案内』の「稲荷」のページである。

> Inari the temple of Shinto religion on the way to Fushimi, is a most famous one in this country. It is the head of Inaris which are worshiped almost every place. The temple stands on a hill by name Inariyama from which the sight of the river Yodogawa can be seen.
>
> The distance to the temple from Sanjio is 37 Chios.　（1873、22）

図版 9. *Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Countries for the Foreign Visitors. 1873.* 「稲荷」（22 ページ）



Inari

画像提供：宇治市歴史資料館。

このように『覚馬名所案内』には、「稲荷」は街のあちこちに祀られ信仰される「稲荷」の総本宮であり、日本では大変有名な神社であること、稲荷山からは良い風景が見られる、と紹介した。

それでは西洋人は、「稲荷」についていつ認識し、観光を始めたのだろうか。研究を進めると、観光を目的とした西洋人による「稲荷」訪問は明治期から始まった可能性が現れた。そして「稲荷」の知名度を上げ、「稲荷」観光を推進したのは明治期の英文ガイドブックであった、と考えるに至った。具体的には『覚馬名所案内』の後は、HT シリーズの貢献が大きかったと考える。

「稲荷」が西洋人にとっては明治期の新名所であった、という仮説の根拠が 2 つ挙げられる。第 1 に、古い西洋人京都名所訪問記に「稲荷」は見当たらない。京都は長く、外国人にとって閉ざされた都ではあったが、そのような状況においても、鎖国以前のイエズス会修道士[1]、鎖国中のオランダ商館長随行員など、少数の西洋人が日本側主導のもと名所見学を行った。彼らの旅行記や、それらの記述を抜き出し新たに出版された書籍によって、明治初期の日本に興味をもつ外国人たちには、一定の情報と認識があったと思われる。詳しくは本稿第 5 章（5－5－2）を参照されたい。また本稿第 5 章（5－5－3）の 図版 7. には、古い西洋人旅行記に記述された日本側の仕立てた京都観光名所として、知恩院・祇園社・清水寺・大仏殿（方広寺）・三十三間堂・八坂塔・耳塚などがあり、それらの寺社仏閣は、明治初期の英文ガイドブックの名所選択や記述内容にも大きく影響した。しかし「稲荷」の場合、「駕籠に乗って伏見 [Fushimi] を通過し、われわれを待つ 2 隻の舟へ直行した[2]」が、伏見街道沿いにある「稲荷」については、訪問した記述が確認できない。現在のところ、他の古い西洋人文献からも「稲荷」情報は見当たらない[3]。

第 2 に、『覚馬名所案内』のすぐ後に続く SN シリーズにおいては、「稲荷」自身ではなく、伏見街道沿いの茶屋と上京するための交通手段が、むしろ重要であったような記述がある。TG には記載自体がない。しかし、その後の HT 初版・第 2 版には、「稲荷」が名所としては

---

[1] ルイス・フロイスである。詳細は本稿第 5 章（5－3）にある。

[2] 今井正（翻訳）（1973）『エンゲルト・ケンペル日本誌』《上・下巻》霞ヶ関出版、410 ページ。

[3] ケンペルが 1692 年 10 月の帰国に際して日本から持ち出した資料の 1 つに「全 50 図、いずれも金地で画かれている」『諸国名所図会』があり、その中に「稲荷」がある。榊原悟（1991）「諸国名所図会」『ケンペル展 ： ドイツ人の見た元禄時代』国立民族学博物館，ドイツ－日本研究所 編、国立民族学博物館、112 ページ。

っきりと登場する。HT 初版・第 2 版の著者の 1 人、アーネスト・サトウの日記からは、サトウ自身が稲荷山を取材し、その内容を日記に詳細に書き留めており、その内容から、初期の HT シリーズに取材が反映されたことは確実である。合わせてそれらの情報には、新名所を開拓した調査だからこそと思われる、不確かな記述が存在するのである。HT シリーズは、チェンバレンとメイソンに引き継がれた後、最終版の第 9 版に至るまで、大幅な訂正と改訂を行い、新情報を更新して、西洋人旅行者の観光行動を加速させた。

本章では、時系列に明治時代に刊行された英文ガイドブックの「稲荷」部分の英文を史料紹介する。SN、HT 初版・第 2 版、KG の内容の特色とともに、特に HT シリーズの第 3 版、第 6 版、第 9 版（最終版）における情報の進展から、「稲荷」国際観光の始まりと進展を読み解くことを目的とする。日本語訳は筆者による。

9－2.　SN 第 2 版・SN 改訂第 2 版

本稿第 6 章（6－5－3）「明治初期の入京交通アクセスと『伏見稲荷』」において、SN シリーズからは、「稲荷」を名所と認識しつつ、それよりも伏見周辺が交通の要衝であり、休憩箇所の茶屋である「玉屋」が旅行者にとって重要であったことを確認した。初版と第 2 版に記述の違いはないので、SN 第 2 版の原文を用いて、SN 改訂第 2 版において削除、変更、加筆があった部分を明らかにする。上付下線は筆者による。原文を示したのち、日本語にて原文の要約と下線部分の説明を行う。

> [a]The traveler, after reaching Fushimi, enters upon the road leading to Kioto. The first place of interest upon this road in the Fushimi Inari（改訂第 2 版にでは削除）. A Large wayside tea house, where jinrikisha drawers invariably rest for a short time, on their journey [b]to the city（改訂第 2 版では‘between Kioto and Fushimi’に変更）, points out this spot. This hostelry is situated at the foot of the Inari hill, upon which stands the temple dedicated to the rice deity. It was built in the early part of the eighteenth century, and is considered one of the principal temples belonging to the Shinto sect. From the hill [c]. (which is also known as Sanho 改訂第 2 版では、or Mitsunomini, “Three mountain tops” を加筆) may be obtained a favorable view of the Yodo river, Uji and the Uji river. Its distance from the centre of Kioto is about two miles and a half.　（1876、6）

［下線 a.］ 伏見港に到着後、旅行者は京都に続く街道に入る。街道沿いにある初めての名所が伏見稲荷である。車夫は道沿いの大きな茶屋で休憩を取り、その後［下線 b.］京都に向かう。（改訂第 2 版では「京都と伏見港の間」に文章が差し替え）。茶屋は稲の神を祀る神殿がある稲荷山の裾にある。建物は 18 世紀初めに建てられた、神道において最も重要な社である。［下線 c.］ ‘Sanho’ と呼ばれる丘からは、（改訂第 2 版では、「サンホウ」と第 2 版で記した箇所を「ミツノミネ＝3 つの山の峰（三ノ峰）」と訂正）、淀川、宇治、宇治川の美しい風景が見られる。京都中心部から 2.5 マイルある。

上記から 1876 年の第 2 版と 1878 年の改訂第 2 版の間に、上京する人々の流れが変化したことが考察できる。大坂と京都を結ぶ京都駅の開業は 1877（明治 10）年 2 月である。「稲荷」については、十分な観光地案内だとは言えない。

9－3. *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*（1881）、（1884）

サトウとホーズによる、初版と第 2 版（1884）の「稲荷」記述部分は、ほぼ同じ文章[4]であるので、本章では第 2 版にある「稲荷」の英文を用いる。

サトウが SN を読んだことは、本稿第 6 章（6－4－1）にて確実である。しかし、読んだ時期は、サトウの「稲荷」取材の日時より遅いので、SN を読んだので興味を持った、という訳ではなかったであろう。サトウは日本国内に従来からある名所図会や文献なども読んでいたと思われるが、『覚馬名所案内』を含めて、先行文献については記述がなく不明である。しかしサトウは、幕末にも伏見を往来しており、「稲荷」の存在に興味はあっても、多忙であり訪問の機会がなかった可能性もある。例えばサトウは、幕末の 1868 年 1 月 27 日、大阪に滞在しており「京都方面で大きな火災が見えた（楠家重敏（訳）、2021：40）」として、鳥羽伏見の戦いの勃発地としての伏見を知っていた。いずれにしてもサトウは「稲荷」に着目し、HT に載せることを目的として京都取材旅行を行った。

『サトウの日記』によると、サトウは 1879 年 5 月 9 日に神戸港から京都に入った。5 月 10 日、「とても良い夢から朝早くに目覚め、5 時前まで横になっていた。それから喜久を起

[4] 初版には、 ‘The temple, erected in 1822’ とあるところを、第 2 版では ‘The temple, re-erected in 1822’ と訂正がある。また ‘5 deities’ を ‘five deities’ と訂正がある。この 2 点のみが初版から第 2 版の訂正点であり、それ以外、初版から第 2 版で変更や追加の文章はない。

こして 6 時には出発した[5]」とあり、従者の井上喜久三郎[6]を伴って朝一番に「稲荷」を訪問した。通訳ガイドの同行は『サトウの日記』からは確認できない。サトウは、‘honshiya’を過ぎたところで、収穫したタケノコを運んでいた地元の男性から、お山で観るべき場所を聞いた。男性は美しい風景が望める場所と、無数の赤い鳥居 [infinite red archways] を推薦した。地元の男性の生の声は、サトウにとって重要であり、実際に印象深い光景だったと思われる。現在の「千本鳥居」に当たると思われるこの記述は、HT シリーズの初期に初めて紹介されたのがきっかけとなった。現在の「稲荷」観光の大きな魅力の 1 つが、HT というガイドブックから見いだされたと考える。該当する原文は以下の通りである。

> Here I met a country man carrying young bamboo sprouts to market who told me that by climbing 18 cho one way I should have a fine view, and the same thing by climbing 3 ch. another way, up r. of the said temple, thro' infinite red archways. (Ruxton, 2015: 302)

HT 第 2 版には、『サトウの日記』にある記述と同様の不確かな記述がある。それらは、お山巡りの道順、ご祭神、‘the Takeda no Yashiro[7]’、‘the Kaza no Yashiro[8]’という社の名前などである。全く新しく、観光名所を紹介するにあたっては、言語的な苦労も含め、優れた日本学者のサトウであっても、完全な記述とはいかなかったと思われる。初めに、第 2 版の日本語要約を以下に示すが、便宜上日本語要約の前の【　】内に、文章の要点を入れた。HT 第 3 版（1891）以降削除された部分に下線（筆者による）を引いた。原文は日本語要約の後に示す。

伏見港に至る道沿いにある稲荷社（いなりのやしろ）

---

5 原文は ‘Woke early from a delicious dream, and lay till a little before five, then roused [servant] Kiku, and so managed to start at 6’.（Ruxton, 2015:301）である。

6 横浜開港資料館（2001）『図説アーネスト・サトウ―幕末維新のイギリス外交官―』、90 ページには、「サトウの主な国内旅行」に、従者として同行した人物の名が挙げられているが、本稿に該当する旅行時期には従者の名はない。しかし、『サトウの日記』（2015、301）には Kiku と明記されたことから、井上喜久三郎が同行したと考える。

7 『サトウの日記』にも同様の英語のスペルで示されている。伏見稲荷大社発行の機関紙『朱』編集係の方より、「田中社」であろうとの助言を頂いた。

8 サトウの日記には ‘the Kaga no yashiro’ とある。サトウは、日本語の音声を聞いて日記に ‘Kaga’とメモし、HT に執筆する際に ‘Kaza’ と書き、該当する漢字を「風」と考えた可能性がある。伏見稲荷大社発行の機関紙『朱』編集係の方より、「荷田社」であろうとの助言を頂いた。

【概要】

この神道の社は、日本全国にある数千の稲荷社の総本宮として知られている。

創建は西暦 711 年、神社の背後の山に稲の女神が祀られた、と言われている。

弘法大師は、東寺近くで稲束を担った老翁に出会い、この老翁が稲荷の神だとわかったので、東寺の鎮守 [Chin-ju]とした。

従って「いなり」は稲の人 [Rice-man] を象徴し、「稲が成る」という意味の 2 つの漢字で書かれる。主祭神である女神と付随する神々の社は、1246 年に現在の場所に移された。

多くの刃物師・鍛冶師に信仰されている。

【祭り】

伊勢神宮に年に一度、専用の門から、神々の聖なる乗り物 (神輿 [mi koshi])が 4 月 29 日に稲荷を出発し、5 月 20 日に旅から戻る。大祭は 4 月 9 日に行われる。

【観光の行程】

大鳥居から参道を通り、階段を上ると、本殿 [Chief Chapel (Hon-den)]、左側には絵馬の奉納所、右手には神楽 [Kagura] の舞台がある。その先には台座に乗ったキツネの石像が一対あり、本殿に着く。

【本殿の特徴】

本殿の壁や柱は赤や白で塗られている。正面に御簾 [Curtains (misu)] が垂れ下がり、6 つの部屋それぞれに、鉄製の鏡が吊るしてある。

板張りの縁側の端には金色の金色のコマイヌとアマイヌ [A pair of gilt koma-inu and ama-inu] の像がある。

【稲荷の歴史と主祭神】

「稲荷」は、将軍家斉によって 1882 年に再建。主祭神は、‘素戔嗚尊’ [Susano no Mikoto] と山の神の娘である食物の女神、宇迦之御魂大神 [U-ga-no-mi-tama]。第二祭神は、帝の御殿の化身である大宮能賣 [Omiyanome]、天界から降りてきた瓊瓊杵尊 [Ninigi no mikoto] に会い、自分の治める国に招いた猿田彦 [Saruda hiko] 。その後 1270 年頃に加わったのが、収穫の神である大年神 [O-toshi no kami]、日本列島を擬人化した神である大八嶋神 [Oyashima no kami] であり、全部で五祭神である[9]。この説明は、主祭神以外は一般的な神道の書物と大きく異なっている[10]。

---

[9] これらの祭神の名前は『サトウの日記』にはない。

[10] 神々の名称について、京都市編纂（1915）『新撰京都名勝誌』京都市役所、456～459 ペ

【行程続き】

左方向には、神輿 [sacred cars] を保管する建物がある。左の大きな階段を上ったところに、上殿 [Jo-den] がある。右に行くと無数の赤い「鳥居」 [innumerable red Torii] があり、それを過ぎると下の宮 [Shimo no Miya] がある。マツやカシの木、ピンク色のツツジ[11]（5月初旬に咲く）の道を上ると、「タケダノヤシロ [Takeda no yashiro]」がある。この場所からは京都が一望できる。

【眺望】

嵐山の向こうに丹波の山々が見え、愛宕山 [Atago san] が鉄道駅[12]のホームの屋根越しに見える。比叡山は真北にある。鴨川は京都の街を縦断し、上賀茂から下流に大きくカーブしている。伏見の街の風景では、大きな沼地（大池）[the great swamp（O-ike）]と八幡があり、山崎が右手に見える。

【行程続き】

上の神社 [Kami no Jin-ja]または奥の院 [Oku-no-In]（＝至聖所 [Holy of Holies]）への道は、見晴らしの良い場所の下にある茶店を通り過ぎ右に折れ、カザノヤシロ、訳すと風の社 [the Kaza no Yashiro, or Temple of the Wind]、そして中の神社、訳すと真ん中の社 [Naka no Jin-ja, or Middle Temple] [13]を通る。女神が 711 年に初めて出現した地を巨石が示している。快晴の日には大阪城が見える。タケダノヤシロに戻るには、「長者の社」を通って下る方法もある。長者の社付近には、巨石があり、巡礼者に深く信仰されている。御膳谷 [the Go-zen-dani] を通り、丘の東側を回ると、茶屋が何軒かある。

【快適な観光へのヒント】

茶店では色々な見どころを説明してくれるガイド（5 銭）を斡旋しているので、連れていくことを勧める。

【観光所要時間】

大鳥居から本殿の下までを快適に山を一巡りするには、大体 1 時間ほど必要だ。

ージ、並びにアーネスト・サトウ（2006）『アーネスト・サトウ神道論』（2006）庄田元男編訳、平凡社、を参照したが、合致しないところがあり不明確である。

[11] 『サトウの日記』によると、サトウの「稲荷」訪問は 5 月 10 日であったので、ツツジの美しい季節であっただろう。

[12] 国鉄稲荷駅の開業は 1879 年 8 月 18 日であるので、取材旅行（1879 年 5 月）の時点でも駅舎は完成間近であったと思われる。または、京都駅舎を指す可能性もある。

[13] 現在の二の峯「中社」を指すと思われる。

HT 第 2 版（1884）の「稲荷」原文

Inari no Yashiro, on the road to Fushimi.

This popular Shin-tō temple, the prototype of the thousands of Inari temples scattered all over the country, was founded A. D. 711, when the Goddess of Rice[14] is said to have first manifested herself on the hill behind. Kō-bō Daishi is said to have met an old man in the vicinity of Tō-ji carrying a sheaf of rice on his back, whom he recognized as the deity of this temple, and adopted as the 'Protector' (Chin-ju) of that monastery. Hence the name Inari, which signifies 'Rice-man[15],' and is written with two Chinese characters meaning 'Rice-bearing.' The first temple consisted of three small chapels on the three peaks of the hill behind, whence the worship of the goddess and her companion deities was removed to its present site in 1246.

It is much visited by cutlers and smiths. There are two entrances, one of which is reserved for the use of these gods when they start on their annual journey to visit the Temples of Ise. They leave on April 29 and return on May 20, performing the journey in their sacred cars (mi koshi). The chief entrance is by the great red torii on the main road, then up a flight of steps to the Chief Chapel (Honden), which faces W., passing l. the ex-voto shed and r. the kagura stage, and further on two stone foxes on pedestals, protected by cages to prevent them from being befouled by birds. The pillars of the portal are plain, but the rest of the walls and pillars are painted red or white. Curtains (misu) hang down in front, and before each of the six compartments is suspended a large metal mirror about 18 in. in diameter[16]. A pair of gilt koma-inu and ama-inu guard the extremities of the verandah; they have bright blue manes and on the legs, locks of hair tipped with bright green.

The temple, re-erected in 1822 by the Shōgun Iyenari, is dedicated in the first place to U-ga-no-mi-tama, the Goddess of Food, child of Susanō no Mikoto and the daughter of the

---

14 英語では 'rice' 1 語で「稲」、「もみ」、「米」、「ごはん」を表す。「このような日英の相違は、長年米を主食としてきた日本人の食文化と、米を野菜の一種と考えられている英語圏の食文化との違いに由来する（竹林滋（2002）『研究社新英和大辞典』、研究社、2113 ページ）。」

15 兼岡理恵（2020）「『山城国風土記』逸文・伊奈利社条のドイツ語訳―カール・フローレンツ『日本の神話』―」『朱』第 63 号、伏見稲荷大社、72 ページに［Reis-Mann］があり、大変興味深い。

16 約 45.7cm である。

Mountain-god, the secondary deities, according to the present accepted belief being Omiyanōme, who is a personification of the Mikado's Palace, and Saruda hiko, the monkey-faced god who met Ninigi no mikoto as he was descending from heaven and welcomed him to his dominions. To them were afterwards added, about the year 1270, the Harvest-god Ō-toshi no kami, who revealed himself in the form of a crane carrying a grain of rice in his bill, and Ōyashima no kami, the islands of Japan personified, thus making five deities in all. This account differs greatly from that usually given in books on Shintōism, which assign other names to most of the secondary gods.

To the l. is a building in which the sacred cars are usually kept. They are celebrated for the great value of their decorations, in gold, silver, copper and iron. L. of this again are some wide steps, which lead up to another small temple called the Jō-den, dedicated to the same five deities.

A path from this to the r. through innumerable red torii passes the 'Shimo no Miya, and ascending through a pine and oak wood, full of pink azaleas (which blossom early in May), reaches the Takeda no yashiro, which commands a fine view towards Kiōto. Over Arashi yama some of the mountains of Tamba are visible, and Atago san shows above the railway sheds, while Hi-yei-zan rises due N. The Kamo-gawa is seen traversing the city, making a remarkable curve as it descends from Kami-Gamo. Over the town of Fushimi the view lies towards the great swamp (Ō-ike) and Yawata, with Yamazaki to the r. The way to Kami no Jin-ja, the Oku-no-In, or Holy of Holies, turns to the r. through the tea-house below this point of view, and passes the Kaza no Yashiro, or Temple of the Wind, and the Naka no Jin-ja, or Middle Temple. A huge boulder which lies here marks the spot where the goddess made her first appearances in the year 711. On a fine day the castle of Ōzaka is visible hence. An alternative way back to the Takeda no Yashiro is by descending past the Chō-ja no Yashiro, close to which are some remarkable pointed rocks, objects of great reverence to pilgrims, thence through the Go-zen-dani, and round the E. side of the hill. It is advisable to take a guide from one of the tea-house (5 sen), who will point out and explain the various objects of interest. An hour can be thus agreeably spent in making the whole circuit from the great torii below the main temple and back again. The principal festival is celebrated on April 9. （365－366）

9－4.　KG（1890）

KG の初版である TG は、HT 初版より 1 年早い刊行であったが、「稲荷」の項目はない。しかし第 4 版 2 刷である KG には「稲荷」が記された。

KG の「稲荷」についての内容は、本章の調査によって HT 第 2 版の内容から、情報を抜き出し、新たに短く編集したことが確実である。HT 第 2 版の「確定できない社の名前[17]」があることが根拠の 1 つである。原文を以下に示し、HT 第 2 版の原文と同じ部分を下線（筆者による）で示す。

KG（1890）の「稲荷」原文

> INARI NO Yashiro. — A very Interesting spot to visit, with a guide, should the tourist have abundance of time, is the Shinto Temple of lnari no Yashiro on the road to Fushimi. It was founded A.D. 711 and re-erected in 1822 and is the prototype of the thousands of Inari temples scattered all over the country. The grounds are extensive and a day is well spent in visiting (after having passed through the Innumerable torii forming two alleys) the Takeda no Yashiro, the Kaze [18]no Yashiro (Temple of the Wind), and the Naka no Jinja (Middle Temple); then returning to The Takeda no Yashiro by descending past the Choja no Yashiro.
> The principal festival at this temple is celebrated in April.

9－5.　*A Handbook for Travellers in Japan (including Formosa)*（1913）

HT は第 3 版（1891）からは *A Handbook for Travellers in Japan* と題名を変更し、第 9 版（1913）まで同じ編著者、チェンバレンとメイソンによって刊行された[19]。

HT 最終版である第 9 版の内容を読み解き、「稲荷」観光の進展を考察する。

まず、原文の要約を以下に示し、便宜上日本語要約の前の【　】内に、文章の要点を入れた。その後に原文があるが、上付き下線（筆者による）で示した箇所は第 3 版から第 9 版までに加筆された部分であり、本章 9－6 で説明する。

---

[17] 前述した（注 28）‘the Takeda no Yashiro’と‘the Kaze no Yashiro’である。
[18] HT 第 2 版の綴りは ‘Kaza’ である。
[19] それぞれの改版は、第 4 版（1894）、第 5 版（1899）、第 6 版（1901）、第 7 版（1903）、第 8 版（1907）、第 9 版（1913）である。

【周辺情報】稲荷社 [The Shinto Temple of Inari (Inari no Yashiro)] は伏見への道沿いにあり、鉄道の駅に隣接している。周辺には伏見人形を商う店が多数ある。

【概要】（第 2 版に同じ）

【能】稲荷は有名な鍛冶師である小鍛冶を助けた、と言われている。小鍛冶は歴史的に名高い刀の一本をここで鋳造し、その刀の切れ味を確かめるために、この地の岩を切ったと言われている。この伝説は能 [Lyric Drama] にもなった。そのため、この社は多くの鍛冶師、刃物師の信仰を集めている。

【祭り】5 月初めに 2 回行われる祭（日時は毎年変わる）を見るのが良い。行きの神輿行列は、御旅所[O Tabisho, or “Travelling station”] まで、そして帰りの日は御旅所から戻る。年間を通して巳午の日 [on the days of the Horse and the Serpent] には、熱心な信者による稲荷山の巡拝（オヤマスル） [‘the circuit of the mountain (o yama suru)] など、毎月の神事の見学を薦める。これらの日には参拝者が波のように夜間、山を上に下に行進する様子が見られる。

【行程】（第 2 版と同じ本殿の説明～千本鳥居まで）

【千本鳥居の、より詳細な説明】そこから 400 以上もの木製の「鳥居」[torii] を通り過ぎる。大小の鳥居は近接して建てられており一方が上り、もう一方が下り用の並行した柱廊である。

【行程続き】この鳥居を通ると奥の院である。おもちゃの鳥居がたくさんある。古いお札用の納札所がある。奥の院を過ぎて左手に進むと、キツネの穴を巡る洞めぐり、または「山にある穴巡り」 [‘Hora-meguri, or “Circuit of the mountain Hollows,” on account of various fox-holes by the way.’] が始まる。

【観光のヒント】山を一巡りするよりも、というのは距離において 1 里にはなるし、少なくとも 1 時間はかかるので、時間に余裕のない人は峰の 1 つの頂上にあり、伏見や淀川の眺望が開ける小さな茶屋（ササヤマテイ）がある所で右に折れると良い。この場所までは神社の境内入口から 15 分ほどで到達できる。

【行程続き】文字が彫られた巨石群、無数の鳥居が石の前に並んでいるところを通り過ぎる。これらの「巨石の社 [these “boulder shrines”]」の集まった各々に、大きな茶屋がある。頂上は一の峰、または末広さんと言われる。元来た道でなくもう一方の道を歩くと頂上から少し下がり、南に向いた眺めは特に美しい。

【眺望】宇治方面では、宇治川・木津川・桃山・伏見・八幡・山崎・巨椋池 [the swamp of Ogura]、その反対側には鴨川・桂川・淀川が見える。

【行程続き】下り坂に、長者社 [Choja no Jinja] がある。そして雌のキツネがお産をした場所だと言われる、キツネの穴、お産場 [‘O Samba] がある。お産場の 2 町ほど少し上に行くと、京都の街が見渡せる場所がある。

【観光の快適さ】稲荷山の道は全行程において歩きやすい。

【観光情報】良質のマツタケ [‘the best mushrooms (matsu-take)’] が収穫できることで有名である。

6 月 5 日には、甲冑を身につけた騎手による競馬と馬術の妙技が見られる。騎手たちは藤森神社からやってくる。

ホテルからは車夫 2 人曳きの人力車で 1 時間 15 分かかるが、南東に醍醐寺「三宝院」がある（以下、「醍醐寺」の紹介に続くので省略）。

HT 第 9 版（1913）の「稲荷」原文

The Shintō Temple of Inari (Inari no Yashiro) stands on the road to Fushimi, [a].close to the railway station. [b.]The streets in the neighbourhood are crammed with little earthenware dolls and effigies called Fushimi ningyō.

This very popular Shintō temple, the prototype of the thousands of Inari temples scattered all over the country, was founded in A. D. 711, when the Goddess of Rice is fabled to have first manifested herself on the hill behind. Kōbō Daishi is said to have met an old man in the vicinity of Tōji carrying a sheaf of rice on his back, whom he recognized as the deity of this temple, and adopted as the “Protector” of that monastery. Hence the name Inari, which signifies “rice-man,” and is written with two Chinese characters meaning “rice-bearing.” [c.]Inari is said to have assisted the famous smith Kokaji to forge one of his mighty swords, and to have here cut the rock with it in order to try its blade,－a legend which forms the subject-matter of one of the Nō, or Lyric Dramas. Hence this temple is regarded with special reverence by swordsmiths and cutlers. [d.]The best time to visit Inari is on the occasion of the double annual festival held on two days in early May, which fall differently each year. On the first of these, the procession of sacred cars goes to what is called the O Tabisho, or “travelling station,” near the temple of Tōji,

and on the second it comes back again. Throughout the year, on the days of the Horse and the Serpent, devotees make the circuit of the mountain (O yama suru), and crowds of them may be often found marching up and down all night long.

The chief entrance is by the great red torii just off the main road, then up a flight of steps, and through a large gate flanked by huge stone foxes to the empty Haiden, or Oratory. Passing l. the ex-voto shed (some curious pictures), ascending some steps flanked by two stone foxes on pedestals, with wire cages to prevent them from being defiled by birds, and passing r. the Kagura stage, one reaches the chief shrine. The pillars of its portal are plain; but the rest of the walls and pillars are painted red or white. Two gilt and gaudily coloured koma-inu and ama-inu guard the extremities of the verandah. Behind, to the r., is a white godown in which the sacred cars are usually kept. Their decorations in gold, silver, copper, and iron, possess great value. The plain building to the extreme l. is the temple office (shamusho).

A path to the l. leads up to a second level space, where stand various insignificant shrines; then up another flight of steps to a shrine called Kami no Yashiro, and thence e. up through more than 400 red wooden torii, great and small, placed so close together as to form two nearly parallel colonnades, one ascending, the other descending. This leads to the Oku-no-in, a tiny shrine packed with toy torii, and having square spaces in front to receive the visiting cards of the faithful. Behind it is a rubbish heap of old toy torii and fox images such as are kept in all households and replaced yearly. Beyond the Oku-no-in, begins l. what is termed the Hora-meguri, or "Circuit of the Mountain Hollows," on account of various fox-holes by the way.

[Rather than make the entire circuit, which is fully a ri in length and will take at least 1 hr., visitors pressed for time will do well to strike off r. to a place where there is a little tea-house (Sasayama-tei)[20], on the top of a minor hill commanding a view of Fushimi and the Yodogawa. This point can be reached in 1/4 hr. from the entrance to the temple grounds.]

On the way are passed large stone boulders with inscriptions, and walls round them, and numerous torii in front of each. At each of these "boulder shrines" is a large tea-shed. The top is called Ichi-no-mine, or more popularly Suehiro-san. One descends another way, the view just below the summit being particularly fine towards the S., including Uji with its river, the

20 「ササヤマテイ」という茶屋の存在については、不明なので現在調査中である。

Kizugawa, Momoyama, Fushimi, Yawata, Yamazaki, and on the other side the swamp of Ogura, the Kamogawa, the Katsura-gawa, and the Yodogawa. On the way down are a shrine called Chōja no Jinja, a number of sacred boulders as before, and [f]some fox-holes called O Samba, supposed to be the places in which the vixen give birth to their young. Just above the latter, 2 chō off the road, a fine view of the city is obtained. The path is good the whole way. This mountain is celebrated for producing the best mushrooms (matsu-take) in Japan.

[g]On the 5th June, horse-races and equestrian feats by men in armour may be witnessed at Inari, the riders coming up thus far north from another ancient temple, slightly off the Nara road, called Fuji-no-mori, where a festival is held on that day. (324－325)

9－6. HT 第 2 版と HT 第 9 版から見る、西洋人「稲荷」観光の始まりと進展

本項では、サトウらの HT 第 2 版と、チェンバレンらの第 9 版に至るまでの文章の変化について考察する。チェンバレンらは、自分たちが得た新情報に基づき、改版ごとに削除・加筆を行い、第 9 版に完結させた。チェンバレンらの第 3 版（1891）、第 6 版（1901）と、第 9 版（1913）の文章を照らし合わせ確認する。

まず、編著者が替わり大幅な改訂 [Revised and for the most part re-written] があった第 3 版においては、サトウが日本学者として重要だと考えた「稲荷」の祭神、また不確かな社の名前やお山めぐりのルートなどの記述は削除された。しかし、創建の歴史や宗教施設の説明は残された。加筆点としては、鍛冶師、刃物業者の崇拝について、謡曲『小鍛冶』を挙げて説明を追加した。その部分は下線 c. の ‘Inari is said to have assisted the famous smith Kokaji to forge one of his mighty swords, and to have here cut the rock with it in order to try its blade,－a legend which forms the subject-matter of one of the Nō, or Lyric Dramas’. である。

新編著者のチェンバレンらも著名な日本学者であり、HT をより実用的なガイドブックに整えた。稲荷の宗教行事については、下線 d. の ‘The best time to visit Inari is either on the 9th April, when the annual festival is held, or on the days of the Horse and Serpent in each month, when devotees make the circuit of the mountain (o yama suru)’. と加筆した。チェンバレンらが「キツネの穴（下線 f. some fox-holes called O Samba, supposed to be the places in which the vixen give birth to their young）」と述べ説明を加えた部分は、現地の人から取材したまま書いたと考えられる。風景の楽しめる小さな茶屋 「ササヤマテイ」、眺望については、京都盆地を流れ

る河川や地名（宇治・木津川・桃山・伏見・八幡・山崎・巨椋池・鴨川・桂川・淀川）を多数挙げた。また長者の杜、稲荷山の特産品として、マツタケ・伏見人形が紹介された。

HT 第 6 版では、稲荷への新交通アクセスについて下線 a.「鉄道駅に近接（close to the railway station.）」との記述が増えた。また「稲荷」訪問に最適な日として、HT 第 3 版の情報からより詳細な情報（下線 d.）に、以下のように変更された。

> The best time to visit Inari is on the occasion of the double annual festival held on two days in early May, which fall differently each year. On the first of these, the procession of sacred cars goes to what is called the O Tabisho, or "travelling station," near the temple of Tōji, and on the second it comes back again. Throughout the year, on the days of the Horse and the Serpent, devotees make the circuit of the mountain (O yama suru), and crowds of them may be often found marching up and down all night long.

「奥の院」が新しく記述され、サトウが HT 初版において、現地の人が推薦したことがきっかけで記述した無数の赤い「鳥居」の立ち並ぶ様は、以下の第 6 版の詳細な説明（下線 e.）により、「千本鳥居」だと確実になった。

> then up another flight of steps to a shrine called Kami no Yashiro, and thence e. up through more than 400 red wooden torii, great and small, placed so close together as to form two nearly parallel colonnades, one ascending, the other descending.

西洋人が好む激しい動きのある「競馬」神事、藤森神社との関わりについて新しい説明と行事案内が加筆された（下線 g.）。その部分は以下にある。

> On the 5th June, horse-races and equestrian feats by men in armour may be witnessed at Inari, the riders coming up thus far north from another ancient temple, slightly off the Nara road, called Fuji-no-mori, where a festival is held on that day.

第 9 版では、もはや茶屋で案内係を雇わずとも、安全に巡って元の場所に戻れる、整った稲荷山散策ルートが記された。鳥居前町には伏見人形などの土産物を販売する店が立ち

並び、賑わう様子を紹介した。下線 b.の ‘The streets in the neighbourhood are crammed with little earthenware dolls and effigies called Fushimi ningyō.’ である。

HT シリーズは、1881 年から約 30 年もの間、500 から 600 ページもの日本の旅行案内書として刊行された。不確かな部分は削除され、改版ごとに「旅行環境の変化や交通機関の整備などに対応[21]」し、西洋人の関心を引き立てる名所情報が更新・加筆された。そのことは「稲荷」の記述の変遷からも明らかである。

9－7. まとめ

本章では、西洋人「稲荷」観光の始まりとその進展を取り上げて調査し、以下の 6 点を明らかにした。

第 1 に、英文ガイドブックに「稲荷」が初めて掲載されたのは、『覚馬名所案内』である。しかし後続のガイドブックに与えた影響についてははっきりしなかった。『覚馬名所案内』で取り上げた「稲荷」は、古い西洋人旅行記の裏付けがなく、西洋人たちの認識は低かったことが考えられる。

第 2 に、「稲荷」は「古い西洋人旅行記」による裏付けがなかったため、SN シリーズにおいては、交通の要衝としての記述に留まった。SN は「京都博覧会」を観覧しようとする観光のニーズに応え、交通アクセスに重きを置いて「稲荷」自身の観光に踏み込んだ表現がなかったと考察する。TG は SN から大半の情報を抜き出して新たに編集した出版物であったのにも関わらず、SN にある「稲荷」は削除し、掲載しなかった。交通の便が伏見港の船便から鉄道の京都駅利用に変化したことが関係したと思われる。

第 3 に、西洋人による初めての本格的な「稲荷」紹介は HT である。「稲荷」観光の魅力と、安心安全な旅の情報が、英文ガイドブックの改版ごとに更新され、大きく西洋人の「稲荷」観光の進展に影響を与えた。

第 4 に、HT の「稲荷」はサトウの現地調査を経て紹介された。そのため「千本鳥居」を初めて英文で紹介したのは、サトウである。

第 5 に、TG の第 4 版 2 刷である KG は、HT 初版・第 2 版の「稲荷」の項目を抜き出し、新たに編集した出版物であった。

---

[21] 荒山正彦（1991）「明治期における英文日本旅行案内書の刊行―明治初期地理学史の一側面―」『大阪大学日本学報』第 10 号、130 ページ。

第 6 に、「稲荷」の魅力は、快適な自然環境の中での散策、日本固有の宗教を肌で感じられること、見晴らしの良い眺め、壮麗な建造物、その土地ならではの土産物などであった。

終論

1. 本研究の要約

第 1 章の『覚馬名所案内』の資料翻訳においては、『覚馬名所案内』が、京都博覧会参観者に焦点を当てて制作されたことが、例えば「御所」の紹介の英文から明らかである。名所を讃える言葉が頻繁にあり、観光を促進しようとする心意気がみられた。同時に、地図の記載から京都が最先端の教育、インフラ設備が整う優れた都市であることをアピールした。1873 年において、それぞれの観光名所への距離を測る始点は、三条大橋であった。

第 2 章では、日本初の英文京都ガイドブックである『覚馬名所案内』の制作背景と改訂についての研究を行った。『覚馬名所案内』の 2 つの代表的な版として、最も初期とされる宇治市歴史資料館所蔵本と、鉄道が開通した明治 10 年頃刊行と推測される同志社大学図書館所蔵本の内容を比較し、新情報に伴い「改訂」された部分を確認した。後期の版には、「写真」のように詳細に名所を描いた銅版画を採用し、該当部分の英語を ‘engraving’ から ‘photograph’ に訂正したことで、最先端の技術を使用していることを明記した。

『覚馬名所案内』は改版によって新情報が更新され、わずか数年のうちに京都が観光都市として進歩したことが明らかになった。英文については、英語話者の英文校正を受けたかは疑問であり、英語を学んだ日本人のみで文章を書きあげたと考える。それは文法や使用される言葉に不明確な箇所が見受けられたからである。『覚馬名所案内』は、西洋人に先駆けて京都を自らの手で世界に紹介した貴重な史料である。京都はその中でも優れた先進的都市であることをアピールする目的があった。

第 3 章では、出版者丹羽圭介に関する、筆者が未見であった史料から『覚馬名所案内』のより詳細な制作背景について、京都府立京都学・歴彩館に所蔵された丹羽の講演録・談話及び、丹羽の曾孫が保管する史料並びに聞き取りを行った。丹羽の言葉から『覚馬名所案内』の英文は丹羽が作成したこと、ルドルフ・レーマンのみならず、レオン・ヂュリーの指導があったことが明らかになった。また印刷作業について、山本八重と丹羽英（ヒラ）の協力は知られていたが、彼女たちと新英学校及女紅場の女子生徒達が、職工として『覚馬名所案内』の実際の本作りに大きく関わったことが明らかになった。山本の『管見』にある、国際的視野と女子教育の重要性に基づき、強固なリーダーシップを取って、『覚馬名所案内』を生み出した。日本人だけの制作ではなく、山本を信頼する国際的な人々のネットワークが、『覚馬名所案内』制作をサポートしたことが明らかになった。

丹羽圭介は、幼少の時から自ら師を求めた。山本と丹羽についての結び付きは『覚馬伝』から良く知られているが、丹羽の講演録からは、丹羽が福沢諭吉から受けた影響も見受けられた。

第 4 章では、TG における京都記述部分の資料翻訳を行い、第 5 章では、その内容についての研究を行った。

TG の内容は西洋人初の京都記述として、驚くほど京都観光名所や観光行動を熟知し網羅するものであった。名所の選定には、古い西洋人旅行記・『覚馬名所案内』の刊行理由である京都博覧会の影響が見られた。京都博覧会の附覧である娯楽や京都観光旅行中の土産物について記述があった。最先端の商業・工業都市京都の姿もみえた。「保津川下り」について新鮮な旅行体験談のように紹介し、「女性も体験できる」と断言した。'Ladies'（女性たち）も観光者であり、「保津川下り」は夫婦や家族連れで安全に楽しめるとガイドブックの中で TG は初めて明言し、「保津川下り」が観光として広げるきっかけとなった。全体的に所々説明不足や、文章が途切れたような不可解な部分があるため、TG には更なる調査が必要であった。

第 6 章では、筆者が未見であった SN シリーズを用いた研究を行った。先行研究においてもあまり知られていなかったため、京都国際観光の初期について重要な発見が多数あった。

まず、SN シリーズは『覚馬名所案内』と TG の間隙を埋める重要なガイドブックであったことが明らかになった。また、SN シリーズは TG の京都記述部分の元本であり、SN の情報は TG に必要部分のみを選択され、切り取って新たに作られたものであった。TG が切り取った部分には、西洋人が最も初期に「保津川下り」をした年が「1876 年」だという重要な情報があった。本稿第 5 章（5－1）において、TG の序文にある「優れた『京都案内』」は、『覚馬名所案内』ではなく、SN シリーズを指していたことを明らかにした。神戸在住の外国人居留民たちは、京都博覧会によって開かれた京都観光を熱望し、京都を熟知した編集者が制作した。SN は HT の編著者の 1 人、アーネスト・サトウに、1879 年の京都取材旅行の際に読まれていた。SN の内容が参考にされたかどうかは今後の研究とする。SN には、1870 年代の京都を目指す観光客の利用する交通機関の情報とその変遷が詳細にあった。名所選定については、『覚馬名所案内』の名所を参考にしたと思われる節はあるが、一概には確定できない。

第 7 章は、英国皇孫たちの京都旅行（1881）についての研究である。

皇孫たちの京都旅行におけるサトウの関わりは、皇孫たちの日本到着後に皇孫側から随行を依頼されてのことであった。皇孫たちの京都観光名所として日本・京都府側の準備した名所は、大部分が『覚馬名所案内』に掲載されていたが、実際にサトウが選択し訪問した名所は全て HT 初版にあった。このことからサトウは皇孫たちの旅程を演出し、日本をよく知るサトウの視点にたった、1881 年における最先端の西洋人京都観光モデルコースであったと言える。皇孫たちが京都を離れ奈良へ向かう旅程は日本・京都府側の手厚いサポートを離れサトウが旅程の主導権を握ったと思われる記述があった。皇孫たちは「保津川下り」、「新京極通における娯楽」を楽しんだが、京都において自らが望んだことは「刺青を入れる」ことであった点は重要である。

第 8 章は、「保津川下り」の国際観光の始まりと発展について調査し、「保津川下り」の観光名所としての成功について論じた。「保津川下り」は、既存の「静的」な寺社仏閣巡りとは真逆の、スリルあふれる「動的」な観光であった。最も初期には人力車と徒歩で向かい乗船場までの時間がかかったが、交通機関は劇的に進化し乗船場へのアクセスが向上した。「保津川下り」は、小舟に乗り込む不安感と、船頭の確かな操船技術による安心感のギャップが魅力であった。「保津川下り」は適度な乗船時間であり、舟は物資輸送用から観光用に転用しやすく、営業を続けやすかったと考える。英文ガイドブックが西洋人に向けて「川下り」情報を更新し続け、読者の「追体験」を促進したことは重要なポイントである。

第 9 章では、「伏見稲荷大社」における国際観光の始まりと発展について調査した。

現在までの研究において、国際観光名所としての「稲荷」を初めて英文で紹介したのは『覚馬名所案内』である。2 番目には、サトウらの HT 初版が初めて「稲荷」の紹介を行った。SN シリーズには、古い西洋人旅行記に「稲荷」訪問の記録がなかったため、『覚馬名所案内』からの影響は見られず、人力車の休憩箇所である「稲荷」前の茶屋の存在が大きかったようである。HT の情報は『覚馬名所案内』と同じものを含んでいるが、影響については一概に言えない。本稿第 9 章（9－3）にある‘Takeda no yashiro’、’the Kaza no Yashiro, or Temple of the Wind’については、日本語を聞き取り、その意味を英語にして伝えようとするサトウの努力が伝わる不明確な記述である。しかし、チェンバレンらによる HT 第 3 版による大幅な改訂から第 9 版に至るまで、情報は訂正・削除・加筆の上更新され続けた。TG には「稲荷」の記述はなかった。しかし、KG（TG の第 4 版 2 刷）においては、HT 初版・第 2 版の「稲荷」の内容を抜き出し、新たに編集した出版物であったことが判明した。

2. 考察

本稿において、英文ガイドブックに記された京都国際観光の黎明期の詳細を明らかにしようと試みた。

本論の研究目的の第 1 は、『覚馬名所案内』の内容と制作背景の詳細な調査であった。制作チーフである丹羽圭介の証言を新史料から引き出し、より詳細な制作背景を明らかにした。『覚馬伝』は、『覚馬名所案内』について「文章は山本覚馬。新島八重子夫人も文選・植字をされたと伝えられている。恐らく日本最初の英文植字工であったと思う（1976、100）」と記した。本稿の調査により、新島八重については日本最初の英文植字工であったという裏付けが取れたと言える。しかし、山本覚馬が実際に日本文を作成したかどうかについては、今後も裏付けとなる史料を探すことが必要である。

『覚馬名所案内』は当時の最先端である活版印刷・英文の冊子であったが、ページの半分に詳細な銅版画を用いたことから、江戸時代の『都名所図会』にも似た「日本型ガイドブック」の様式を踏襲したとも言える。

第 2 は、『覚馬名所案内』が後続する西洋人による英文ガイドブックに与えた影響の有無と、西洋人刊行による英文ガイドブックの記述内容を比較して、京都観光の変遷を調査することであった。名所選定において、SN には断定するには至らないが、『覚馬名所案内』の影響はあったと考える。SN の制作背景については、それまで‘Treaty Limits’（内地旅行の制限）[1] があるために、入京を拒まれていた神戸・横浜外国人居留地に住む人々が、京都博覧会及び京都観光を楽しんだ様子及び交通機関の変遷が明らかになった。『覚馬名所案内』の銅版地図に伏見（Fusimi）及び宇治川の流れが詳細に示された理由は、SN シリーズの交通機関の記述により明確になった。

TG の『覚馬名所案内』からの影響は、本稿の調査においては、ベールがかかったように明確にはならなかった。しかし、『覚馬名所案内』の母体である京都博覧会の影響は認められた。TG は、日本の主要な都市を合わせた日本ガイドブックの必要性を感じ編纂されたが、京都については SN シリーズの情報を編纂者の視点において切り取り、新たなガイドブックとした。その点において、軽視されることはやむを得ないが、「保津川下り」について本研

[1] サトウらの HT 第２版の ‘2. Treaty Limits.’ には ‘At Kōbe: 10 *ri* in any direction, that of Kiōto excepted, which city is not to be approached nearer than 10 *ri*.’ (1884, 16)とある。条約港の 1 つである神戸から半径 10 里内には旅券無しで居住できる。しかし京都は除外され、「入京手形」が必要であった。本稿第 7 章（7－1）を参照されたい。

究対象のガイドブック中唯一「女性」を観光対象者として認識し、乗船中の安全を担保したことことは、新観光名所の可能性を広げた大きな意味があったと考える。

HT の日本各地の情報においては日本アジア協会員たちの大きな貢献があったが、京都記述部分においては、主にサトウが実際に調査活動・執筆を担当したことが明らかになった。サトウは江戸時代の末期において、身の危険を伴った京都市中を自由に闊歩し、寺社仏閣や地元の人たちに観光的見地から聞き取りを行った。SN を読んだことは、名所選定を含めて、何かしらの影響を及ぼした可能性があるが、大方は独自取材によるものだと考える。しかし日本通のサトウと雖も、全く新しい観光名所を紹介するという難しさが、特に伏見稲荷大社の紹介には見受けられた。

第 3 に、特に西洋人により観光として発見・開拓された新観光名所について、本稿では「保津川下り」「伏見稲荷大社」の 2 ヶ所を挙げた。これらの名所は、日本人には良く知られた名所であったが、ともに西洋人によって「観光」として見出された。前者は自然の中でのダイナミックな乗船体験、後者はエキゾチックな日本固有の信仰を感じながらの自然散策・眺望という魅力があった。現在までの研究において、サトウが現地取材中に見出した伏見稲荷大社の「千本鳥居」は、歴史的に初めて HT 初版に記されたと考える。HT シリーズにおいて「千本鳥居」及び伏見稲荷大社の「お山巡り」はより詳細に取り上げられ、西洋人観光の「観るべき」憧れの名所に成長したと言える。

さて、ガイドブックに記された情報はすぐに古くなり改訂が必要な存在になるが、だからこそ明治初期の京都国際観光の姿は、度々改訂される英文ガイドブックによって保全された。英文ガイドブックは、京都の国際観光の黎明とその初期の段階をつぶさに記録する媒体であり、その時代の証言者であり、前後に情報面でのつながりを持った。文字によって「観るべき」京都をプロデュースした結果、明治初期の西洋人観光客たちはガイドブックの通りに名所や産業施設を訪問し、街や川べりを散策し、土産物を購入し、能やお座敷遊びなどの伝統芸能を楽しんだ。旅行者の口コミ・旅行記からの新情報は、ガイドブック制作者たちの改版・新刊へのモチベーションとなった。そして、各々のガイドブック制作者たちは、自身の嗜好に基づき歴史的・芸術的・宗教的観点から観光情報を記し、名所の文化的価値を高めた。

『覚馬名所案内』の生みの親である京都博覧会は、今日の国際観光都市としての京都の地位を確立させた礎であったと考える。京都博覧会開催の目的は、産業の開発振興と京都を日本随一の国際観光地にすることであり、その目的達成の 1 つのツールであった『覚馬

名所案内』においても寺社仏閣の紹介だけではなく、ビジネスと観光で外貨を得ようとする姿勢がみえる。西洋人たちにとっても古い西洋人旅行記の記述を認識して、京都の主要名産品・工芸品を鑑賞・購入することは旅の大きな楽しみであり憧れであった。今日においても、上質で価値ある品物を内外の観光客に提供することは、京都が国際観光都市として存続するための大きな付加価値であると考える。

以上のように本研究において、京都観光の黎明であった『覚馬名所案内』と、それ以降の英文京都ガイドブックを歴史的に追い比較研究を行い、明治期に始まった西洋人観光の最も初期の歴史をより詳細にした。明治初期の英文京都ガイドブックは、当時の京都の国際観光の黎明と発展を如実に表象する歴史的史料であることを明らかにした。

主な参考文献

青山霞村（1928）『山本覚馬伝』同志社。

浅井建爾（2021 年 5 月）『教養としての日本地理』（株）エクスナレッジ。

荒山正彦（1991）「明治期における英文日本旅行案内書の刊行—明治初期地理学史の一側面—」『大阪大学日本学報』第 10 号、123-138 ページ。

アーリ. J、ラースン. J、加太宏邦訳（2014）『観光のまなざし［増補改訂版］』法政大学出版局。

伊藤久子（2009）「研究余話：旅行ガイドブックの著者キーリング」『日本英学史東日本支部紀要』第 8 号、 71-73 ページ。

今井正（翻訳）（1973）『エンゲルト・ケンペル日本誌』《上・下巻》霞ヶ関出版。

宇治市歴史資料館『幕末明治・京都遊覧－銅版画の世界－』2018 年。

大島中正、ジュリエット・カーペンター、枝澤康代、坂本清音、杉野徹（訳）（2020）『山本覚馬建白「管見」－釈文、訓み下し文、現代語訳、英語訳－』同志社女子大学史料センター。

大槻喬（1937）『京都博覧協会史略』京都博覧協会。

小谷正治（1984）『保津川下り船頭夜話』文理閣。

桂千代造（発行）（1926）『保津川遊船の栞 *The Hozu Rapids. A short guide for The tourists.*』保津川遊船株式会社。

兼岡理恵（2020）「『山城国風土記』逸文・伊奈利社条のドイツ語訳—カール・フローレンツ『日本の神話』—」『朱』第 63 号、伏見稲荷大社。

亀岡市史編さん委員会（2004）『新修亀岡市史本文編第 3 巻』亀岡市。

神田孝治（2012）「Ｖ観光社会学の視座 観光客のまなざし」『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。

上林ひろえ（2015）「保津川下り－江戸時代に観光としての保津川下りはあったのか－」『角倉一族とその時代』思文閣出版。

川内有子（2020）「初の英文京都ガイドブックと京都の国際観光地化における耳塚」『立命館大学人文科学研究所紀要』295－317 ページ。

川内有子（2020）「1860 年代における西洋人の「忠臣蔵」へのまなざし:開国以前の日本人表象とフォークロア研究の興隆」『アート・リサーチ』立命館大学アート・リサーチセンター、第 20 号, 11－20 ページ。

京都市（1975）『京都の歴史 8』学芸書林。

京都市（1971）『京都の歴史 8』京都市史編さん所。

京都市（編纂）（1915）『新撰京都名勝誌』京都市役所。

京都商業会議所百年史編纂委員会（編）（1985）『京都経済の百年』京都商工会議所。

京都博覧協会（1903）「京都博覧会沿革抜粋」。

京都博覧協会（1903）「京都博覧会諸統計一覧表」『京都博覧会沿革誌』。

京都府（1872 年 11 月 9 日）「改暦ノ布告」『明治 5 年太政官布告第 271 号』。

京都府教育会（1940）『京都府教育史・上』。

京都府立京都学・歴彩館「*The guide to the celebrated places in Kiyoto & the surrounding places for the foreign visitors*」（請求番号 K1 特||291.62||Y31）京の記憶アーカイブ。

草山巌（1987）「私の日本見聞録 1888～1892―神戸外国人居留地行事局長兼警察署長夫人イーダ・トローチックの手記―」（翻訳：伊達正俊、瀬戸山光）『神戸市史紀要神戸の歴史』第 18 号、53－81 ページ。

楠家重敏（訳）（1988）『チェンバレンの明治旅行案内―横浜・東京編―』 新人物往来社。

楠家重敏（1998）『イギリス人ジャパノロジストの肖像』日本図書刊行会（発行）、近代文芸社。

楠家重敏（2021）『変革の目撃者（下巻）―アーネスト・サトウの幕末明治体験―』晃洋書房。

楠家重敏（2021）「解説 A　A Diplomat in Japan の史料学」『変革の目撃者（下巻）―アーネスト・サトウの幕末明治体験―』晃洋書房。

工藤泰子（2008）「明治初期京都の博覧会と観光」『京都光華女子大学研究紀要』第 46 号、77－100 ページ。

工藤泰子（2009）「近代名所案内記にみる京都の観光空間」『京都光華女子大学紀要』、第 47 号。

宮内庁（1971）『明治天皇紀』第 5、吉川弘文館。

桑田優（2003）「The List of British Diplomats in Japan 1859-1945」『近代における駐日英国外交官』敏馬書房。

ケンペル、斎藤信（訳）（1979）『江戸参府旅行日記』平凡社。

河野仁昭編（1989）『山本覚馬・新島八重 - その生涯』「新島八重年譜」学校法人同志社本部庶務部。

小嶋正亮（2019）「英文京都案内『CELEBRATED PLACES IN KIYOTO & THE SURROUNDING COUNTRIES FOR THE FOREIGN VISITORS』について」『宇治市歴史資料館年報平成 29 年度』1－33 ページ。

小林丈弘、高木博志、三枝暁子（2016）『京都の歴史を歩く』岩波書店。

小山騰（2010）『日本の刺青と英国王室』藤原書店。

『西京新聞』「英国皇孫関連記事」（1881 年 11 月 6 日、8 日、9 日）京都府立京都学・歴彩館所蔵（マイクロフィルム）。

斎藤信（訳）（1981）『江戸参府紀行（ジーボルト著）』平凡社。

榊原悟（1991）「諸国名所図会」『ケンペル展 ： ドイツ人の見た元禄時代』国立民族学博物館，ドイツ－日本研究所 編、国立民族学博物館。

坂本久子（2008）「日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会とウィーン万国博覧会の関連」『近畿大学九州短期大学研究紀要』第 38 号、 1－15 ページ。

サトウ. E.（2006）『アーネスト・サトウ神道論』（2006）庄田元男編訳、平凡社。

重野安繹（1899）レオン・ヂュリー碑「碑文の大意」。

重久篤太郎（1968）『お雇い外国人⑤教育・宗教』鹿島研究所出版会。

庄田元男（訳）（1992）『日本旅行日記 2』平凡社。

白幡洋三郎（2004）『幕末・維新彩色の京都』京都新聞出版センター。

新修京都叢書刊行会（編著）（1967）『新修京都叢書第 6 巻』臨川書店。

新修京都叢書刊行会（編著）（1968）「都花月名所完」『新修京都叢書第 5 巻』臨川書店。

杉井六郎（1976）「山本覚馬年譜」『改訂増補山本覚馬伝』京都ライトハウス。

住谷悦治校閲（1976）『改訂増補山本覚馬伝』（原著 1928 年、青山霞村）京都ライトハウス。

高木博志（2016）「第 2 章開化と繁華の道－新京極と祇園－」『京都の歴史を歩く』小林丈弘、高木博志、三枝暁子著、岩波書店。

滝波章弘（2012）「Ⅸ観光の文化装置 3．旅行記」『よくわかる観光社会学』安村克己他（編著）、ミネルヴァ書房。

田中まり（2001）「「京都」における「日本文化」の発見－明治期外国人の京都観光と日本の伝統文化イメージの形成をめぐって－」『北陸学院短期大学紀要』第 33 号、245－258 ページ。

田中まり（2004）「19 世紀末西欧における日本観光と日本イメージの形成―マレー社の『日本旅行案内』に紹介された京都―」『金沢星稜大学論集』第 38 巻第 2 号、33－40 ページ。

田中泰彦（1971）『都の魁（上）』京を語る会。

田中泰彦（編）（1994）「51 京都ホテル・常盤」『石田有年の銅版画明治の京都名所五十一景』京を語る会。

千代間泉（2020a）「[資料翻訳]山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）」『同志社女子大学大学院紀要』第 20 号、55－79 ページ。

千代間泉（2020b）「日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改訂についての研究」『日本国際観光学会論文集』第 27 号、63－71 ページ。

千代間泉（2020 年 7 月 11 日）「丹羽章氏面談採録」。

千代間泉（2021 年 3 月 2 日）「保津川遊船企業組合豊田覚司氏電話インタビュー採録」。

千代間泉（2021a）「Keeling の *Tourists' Guide*（1880）についての研究―山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』（1873）と京都博覧会、古い西洋人旅行記の影響―」『日本国際観光学会論文集』第 28 号、59－69 ページ。

千代間泉（2021b）「[資料翻訳] W. E. L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』（1880）」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第 21 号、47－69 ページ。

千代間泉（2021c）「出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文「京都とその近郊の名所案内』(1873) の詳細な制作背景」『同志社女子大学日本語日本文学』第 33 号、23－38 ページ。

千代間泉（2021d）「英国皇孫京都観光（1881）について」『日本英学史学会英学史研究』第 56 号、27－44 ページ。

千代間泉（2022a）「英文ガイドブックからみた明治初期の「保津川下り」の始まりと発展」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第 22 号、153－171 ページ。

千代間泉（2022b）「*Stray Notes on Kioto and Its Environs* の研究」『日本国際観光学会論文集』第 29 号、94－101 ページ。

ツンベルグ（1991）「日本紀行」『史料京都見聞記第二巻』駒敏郎、村井康彦、森谷尅久編集、法蔵館。定本『異国叢書』一、駿南社。

豊田知八（2015）「保津川下り船頭の操船技術と精神―角倉伝来の技術を継承する保津川船頭の仕事から―」『角倉一族とその時代』、思文閣出版。

土居晴夫（1980）「解説」『ジャパン・クロニクル紙ジュビリーナンバー神戸外国人居留地』、堀博・小出石史郎（共訳）、299－309 ページ、のじぎく文庫（編）、神戸新聞出版センター。

中島民之介（1909）『山本亡羊先生小伝』奮京都博物会。
中西直樹（2013）「明治前期・信州大谷派の海外進出とその背景―北海道開拓・欧州視察・アジア布教―」『龍谷大学論集』第 481 号、87－128 ページ。
長坂契那（2010）「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 69 号、101－115 ページ。
長坂契那（2014）博士論文「観光をめぐる近代日本の表象に関する歴史社会学的研究―探検紀行から旅行ガイドブックへ―」慶應義塾大学大学院社会学研究科。
並木誠士（2008）「京都の初期博覧会における『古美術』」『近代京都研究』思文閣出版。
並木誠士、青木美保子（編）（2017）『京都　近代美術工芸のネットワーク』思文閣出版。
丹羽章（2010）『三橋写真』。
野口祐子（2014）「明治時代の英語ガイドブックにおける京都へのまなざし–「文化財」という観点」『京都府立大学学術報告（人文）』第 66 号、131－141 ページ。
野間光辰編（1994）『新修京都叢書』第六巻、臨川書店。
拝師暢彦（2005）『御雇外国人 J. A. Weed の六年間―京都府農牧学校物語―』京都新聞出版センター。
博覧会の沿革（1896 か）「京都と博覧会丹羽圭介氏談」「丹羽圭介講演録」博覧会関係資料、博古 313－7、京都府立京都学・歴彩館所蔵。
長谷川奨悟（2012）「明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察」『歴史地理学』54－4（261）24－45 ページ。
長谷川雅世（2015）「明治時代の京都でのイギリス人旅行者の神社仏閣めぐり―イギリス人の旅行記に描かれた京都の特別な寺々―」『高知大学教育学部研究報告』第 75 号、191－202 ページ。
原田禎夫（2017）「水運文化の再生と地域における文化ツーリズム振興に関する研究」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第 19 号、145－164 ページ。
『日出新聞』（1920 年 4 月 11 日）「保津の舟遊び」京都学・歴彩館所蔵（マイクロフィルム）。
深草稲荷保勝会編（2002）『深草稲荷』第 2 版、深草稲荷保勝会。
フロイス、柳谷武夫（訳）（1966）『日本史 3 キリシタンのころ』平凡社。
保津川遊船企業組合「Boarding Photo: The Prince Edward (Duke of Windsor イギリス皇太子エドワード 8 世乗船写真（1922 年・大正 11 年)」保津川遊船企業組合所蔵。
保津川遊船企業組合（2019）『京都府亀岡市保津川下り』。

堀博・小出石史郎（共訳）（1980）『ジャパン・クロニクル紙ジュビリーナンバー神戸外国人居留地』、土居晴夫（解説）、のじぎく文庫（編）、神戸新聞出版センター。

松田毅一、川崎桃太（訳）（1978）『日本史 3 五畿内編 I 』中央公論社。

松田清（2019）『京の学塾山本読書室の世界』京都新聞出版センター。

丸尾長顕（1967）『イヴの喫煙室』立花書房、253－254 ページ。

丸山宏（1986）「明治初期の京都博覧会」『万国博覧会の研究』思文閣出版。

三田商業研究会編（1909）『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社、149－150 ページ。

妙法院門跡（2006）『国宝三十三間堂』三十三間堂本坊。

本井康博（1996）「京都博覧会とアメリカン・ボード―京都ステーション（同志社）への道―」『同志社大学　キリスト教社会問題研究』第 45 号、100－139 ページ。

森　登（2013）「銅・石版画万華鏡 65 山本覚馬『京都名所案内』」日本古書通信第 1002 号、32 ページ。

山口光朔（訳）（1997）『大君の都（上）オールコック著』岩波書店。

山口誠（2012）「ガイドブックその変遷と可能性」『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。

ユネスコ東アジア文化研究センター（1975）『資料御雇外国人』小学館。

横浜開港資料館（編、発行）（2001）『世界漫遊家たちのニッポン―日記と旅行記とガイドブック―』。

横浜開港資料館(編)（2001）『図説アーネスト・サトウ幕末維新のイギリス外交官』。

ラックストン、イアン・C.『アーネスト・サトウの生涯―その日記と手紙より―』長岡祥三、関口英男（訳）、2003 年、雄松堂出版。

Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1891). *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan. Third Edition.* John Murray. Kelly & Walsh, Limited.

Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1901). *A Handbook for Travellers in Japan, Including the Whole Empire of Yezo to Formosa, 6th Edition, Revised,* John Murray. Kelly & Walsh.

Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1913). *A Handbook for Travellers in Japan (including Formosa). Ninth Edition, Revised throughout.* John Murray.

Dennys, N. B. (Eds.). (1867). *The Treaty Ports of China and Japan. A complete guide to the open ports of those countries together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao. Forming a guide book*

and vade mecum for travelers, merchants, and residents in general. With 29 maps and plans. London: Trubner and Co., Paternoster Row. / Hongkong: A. Shortrede and Co. (The emergence of the world tour: a collection of early travel guides and handbooks / edited and introduced (in Japanese) by Hisako Ito; v. 2)

Japan Chronicle. (1918). *Jubilee Number 1868-1918. History of Kobe and reminiscent interviews with old residents.*

Keeling, W. E. L. (1880). *Tourists' Guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc.* Yokohama: Sargent & Farsari Co.

Keeling, W. E. L. (1890). *Keeling's Guide to Japan, Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, Kobe &c., &c., Together with Useful Hints, History, Customs, Festivals Roads &c., &c., with Ten Maps, Fourth Edition, Revised and Enlarged* by A. Farsari [Second Issue], Yokohama, A. Farsari. Kelly & Walsh Limited.

Kyoto and Its Surroundings. With Brief Sketches of Osaka, Arima, and Yu-shima. New Edition, Revised and Enlarged. (1889). "Hyogo News" Co., Printers & Publishers.

Niwa, K. (1913). *A Directory of Kyoto and Its Traders. (3rd.ed.)*. The Kyoto Commercial Museum.

Prince Albert Victor and Prince George of Wales, Dalton J. N. (with additions). (1886). *The Cruise of Her majesty's Ship "Bacchante", 1879-1882*. Macmillan.

Ruxton, I. (2015). *The Diaries of Sir Ernest Mason Satow 1870-1883*. Eureka Press.

Satow, E. M. and Hawes, A. G. S. (1881). *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan.* Kelly & Co.

Satow, E. M. and Hawes, A. G. S. (1884). *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan. Second Edition*. John Murray. Kelly & Walsh.

Stray Notes on Kioto and Its Environs. (1874) Hiogo: Printed at the "Hiogo News" office. 国立国会図書館所蔵。

Stray Notes on Kioto and Its Environs. Second Ed. (1876). Yokohama: Published by F. R. Wetmore & Co.

Stray Notes on Kioto and Its Environs. Second Ed. Revised. (1878). Hiogo: Printed at the "Hiogo News" office. 京都大学文学研究科図書館所蔵。

Yamamoto, K. (1873). *Celebrated Places in Kiyoto &, the Surrounding Countries for the Foreign Visitors,* Translated into the English by K. Yamamoto. Kyoto, Niwa. 宇治市歴史資料館所蔵。

Yamamoto, K. (1873). *The Guide to the Celebrated Places in kiyoto & the Surrounding Places*, Niwa.

辞書

竹林滋〔編集代表〕（2002）『新英和大辞典第 6 版』研究社。

佐和隆研・奈良本辰也・吉田光邦ほか（編）（1984）「大文字送り火」『京都大事典』淡交社、583－584 ページ。

ジャパンナレッジ所収「うめ」『日本国語大辞典』小学館。

ジャパンナレッジ所収「近江八景」『日本国語大辞典』小学館。

ジャパンナレッジ所収「フロイス」、松田毅一（2018 年 2 月 16 日）『日本大百科全書』小学館。

インターネットホームページ

祇園祭ボランティア 21（n. d.）「祇園祭山鉾巡行　明治からの変遷」 http://www.gionmatsuri.jp/volunteer/seminer/hensen1.htm 最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。

京都市（2003－2015）「レオン・ジュリー碑碑文の大意」 https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/fmindex/jinbutsu_frame.html　最終閲覧 2021 年 1 月 28 日。

京都府（n. d.）「世界文化遺産古都京都の文化財一覧」https://www.pref.kyoto.jp/isan/　最終閲覧 2022 年 2 月 14 日。

熊野若王子（2019）「熊野若王子」https://nyakuouji-jinja.amebaownd.com/　最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。

建仁寺（2008）「建仁寺境内図」https://www.kenninji.jp/grounds/ 最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。

東福寺　善慧院（n. d.）「東福寺　善慧院（明暗寺）について」 http://tofukuji-zennein.com/pg65.html　最終閲覧 2022 年 2 月 24 日。

中村藤吉本店「中村藤吉本店の歴史」https://www.tokichi.jp/history.html　最終閲覧 2021 年 9 月 21 日。

保津川遊船企業組合（n. d.）「保津川下りとは　京都・亀岡保津川下り」 https://www.hozugawakudari.jp/about　最終閲覧 2020 年 9 月 4 日。

宮本ヱイ子（1986）「京都ふらんす事始め」

http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/history/kyoto_france.htm　最終閲覧日 2021 年 1 月 28 日。
矢野翔一監修（2019 年 12 月 18 日）「「円」や銀行の誕生など！明治時代のお金にまつわる豆知識」三菱 UFJ 信託銀行株式会社　https://magazine.tr.mufg.jp/90086#　最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。
臨済宗天龍寺派宗務本院（2021）「天龍寺について」http://www.tenryuji.com/about/index.html 最終閲覧 2022 年 3 月 1 日。
早稲田大学図書館（1996－）『日本誌』https://www.wul.waseda.ac.jp/collect/yo/ae3110.html　最終閲覧 2022 年 3 月 3 日。
Australian National Maritime Museum.（2018） Photograph titled The Detached Squadron. http://collections.anmm.gov.au/objects/21144 最終閲覧 2022 年 3 月 5 日。